

腹下しガール

小説誌

Loosed,
Wronged,
and Failed, Girls at the bottom.

自壊

絶

する

対

弱者

者

試し読み版



R18
ADULT ONLY

自壊する絶対弱者 試し読み版 目次

1. 樹里ちゃんすぐ甘える
著：もちづきうずめ003
2. 神様の呼び方
著：灰屋 絵：かび道楽011
3. 夏の夜 話したくないこと、話したいこと、話したこと
著：A J 絵：あしぶ021
4. お腹の風邪と少女の一日
著：できすとりん 絵：みなみず033
5. 重荷と重圧
著：ゆっきゅん 絵：紫桃ふいず045
6. 泥棒カナの初めて負けた日
著：岩咲魔じっく 絵：みときダム053
7. 歪な鏡
著：軟球ごるふ 絵：みときダム057
8. 鷓久森珠世の献身
著：早川オコゼ 絵：あしぶ065
9. わるいこの代償
著：もちづきうずめ 表紙絵：毒桃079
- 奥付083

※テーマ「お腹下しガール」とは別に隠しテーマもあります。
読み比べながら探してみてくださいね。答えは主催のあとがきで！

樹里ちゃんすぐ甘える

もちづきうずめ

「からだ拭いてー」

浴槽のお湯を抜いてから浴室を出ると、先にお風呂から上がっていたお嬢様がバスタオルを差し出してきました。足元のお風呂マットを濃く湿らせて、全身から雫を滴らせています。

「もう一二月なんですから、はだかのまま待つてないでください。樹里ちゃんは一人で身体を拭けますよね」

「拭ける！」

「ではひとりで試きましようね。風邪を引いてしまいますよ」

「樹里いい子だから元気だもん」

「いい子ならがんばってふきふきしましょう。ね」

「やだ！」

いい子、すぐ矛盾する。

普段は子供扱いされることをとても嫌がるのに、今日は逆に子供扱いされたいようです。下唇を突き出してちよつといじらしい腫で。私を見ています。

おひとりですることは、知っています。そうでなければ普段の入浴を一人でできるわけがないのですから。

一人で身体を拭けるけど、やってほしい——甘えたい。

「はやくはやく」

お嬢様が甘えたそうにしている表情に／私にだけ甘えるところに、どうしようもなく、敵わない。

「しようがないですね」

冷えないように自分の身体にバスタオルを巻いてから、差し出されているそれを受け取った。お嬢様は満足げに口の端を上げて、背中を向けてくれた。

「お一人で入浴されているときは拭けるのに、おこさまですね」

「いつもはできるから大人だもん。今日はいいの」

上から下へくまなく水気を拭き取って行って、最後にデリケートな部分も優しく水分を吸わせて乾かしていく。

「私も拭きますから、着替えていってくださいね。お着替えはひとりでできますか？」

「うん！」

下着を身につけるお嬢様を見守りながら私も身体を拭いていく。

「お着替えできた」

「えらいですね」

「ボタンは留めてね」

「はいはい」

私が下着を身につけたのを待つて、大きな胸を押し出すように上体を突き出していきます。ピンクのチェック模様のパジャマに手をかけて、ボタンを留めていく。

「冷凍庫に後でシューアイスがありますから、後で食べましようね」

「うん！ いっしょに食べようね」

今日は金曜日。お風呂めんどくさがりのお嬢様が率先してお湯張りをすしすゝ入浴してくれる……私が一緒にお風呂に入ってあげられる曜日。甘えん坊の一五さいがもつと幼くなって甘えてくる日。

「シューアイス食べたらお部屋でゲームするでしょ、録画したアニメも見て、えーっとね、それにね」

ぎゅっ。細くも柔和で、愛らしい熱を帯びたお嬢様の左手が私の火照った右手に絡みつく。何も障害のない廊下で結び合う意味も、お風呂上がりなのに熱を求めて肌を擦り合う必要もない。

無意識に愛情を確かめる、幼子の左手。肌が触れることで相手の存在を確かめて、熱を感じて、愛を求めて。拒まれないことで自分がそこにもいい証拠を求める。

私はここにいますよ。

求められていることを実感するために手を握り返す。家の中にいるのだから、多感でじっとできないおこさまを繋ぎ止める必要はない——だけど時折私だつて、孤独でない証明がほしくなる。お嬢様が独りどこかへ行ってしまうはずもないのに、体温を互いに通わせないと、不安になるときがある。

(ああ、甘えてくれています)

「今日はたくさんあまえんぼちゃんですね」

「樹里子供じゃないから甘えないもん。これはいいの」

そう、これでいいのです。

あなたが私を求めてくれている限り、私はここにいられる。冷めも熱されもしないぬるま湯に溺れたままで／甘えていられる。

お嬢様の成長を望む私がいる。幼くあれと願う初鹿野かんながいる。いつかあなたが生涯を共にする異性と巡り会い、将来を誓ったとき。そこに私はいらるのだろうか。いられるのだろうか。

『樹里をひとりにしちゃだあ〜!!』

そうです、ちょうどこの廊下での出来事でしたね。一年前のお嬢様の、泣き顔と涙声を思い出す。

お昼寝中のお嬢様を置いて買い出しに出かけて帰ってきたとき、大泣きしながら自宅を彷徨っていたお嬢様。

目覚めたときに親がいないで泣きじゃくる、赤子のよう。あなたに救われた私が勝手にいなくなるはずがないのに、お嬢様はまた孤独になつてしまったと思ひ込んで泣き止みませんでした。

私がいなければ泣きじゃくるお嬢様。でも代わりがいるのなら、そしていずれ、私があなただの膝元で甘えられなくなるのであれば……。

「今日は寝るまで一緒に、いましょうね」

「うん！」

あなたは水深ゼロメートルの熱の海。

溺れるサカナはもう水の海に戻れない。

だからほんの少し、長く過ぐすくらの甘えは、許してください。

1

「ん、んんっ……」

お手洗いの窓から見上げる一二月の空は今日も灰色が塗りたくられていて、朝からわずかに薄暗い。昨日よりも肌寒さを感じますね。今日はお嬢様とお買い物に出かける予定ですから、あたたかい私服を選ばないといけませんね。もちろん、かわいいと喜んでもらえる組

み合わせで。私も最近は大ファッションというものを理解できるようになりました。お嬢様の思うかわいいがわかる検定三級くらいは取得できます。ふふん。

みち……っ

と、思索に耽っているとむずむず感が膨らんできました。そろそろ出そうです。

「ん……うんっ」

みちみち みちち にちにちにち

「ん、うーん。ん！」

にちにちにちゅっ ちゃぼん とぷん

にちっ ぷりりりっ ぷりゆ ぱちゃっ

「うん……っ」

ぷりぷりぷり……ぷりっ ぷりぷりぷり とぼん

大便、出ましたっ。

今日は気持ち良くする出せて、おなかすっきりです。

お尻を拭いた紙を便器の端に落とし、立ち上がって覗き込む……形の整った黄褐色が二本と、少し明るめの細い便。おなかの調子はまずまずですね。昨日はかなり冷え込みが強く朝からゆるめでしたが、今日は優しい便意で排便できてよかったです。

それに昨日は学校でおなかが痛くなつて、休み時間にゆるめの大便をしてしまいました。休日だとお嬢様と一緒にいる機会が多いのであまりおなかをゆるませたくないですし、治つてよかったです。

「ふうっ」

いい加減朝のお手洗いも寒いですね。排便を済ませるために下半身

を出していたら少し冷えてしまいました。私のおなかの冷え対策もそうですし、お嬢様が寒さで朝の排便を嫌がらないようにパネルヒーターを用意しましょうか。

毎朝の排便を一階トイレで済ませたら、二階のお嬢様の部屋へ。

「ん……？」

ドアを開けた瞬間、違和感がふわつと鼻をくすぐった。

甘い香りがわずかに漂っているのですが、なんでしょうか。昨日食べたお菓子、飲んだ紅茶、焚いたアロマ……。いずれでもない。

エアコンの温風でもごまかされない、生身から滲む熱の匂いです。

お嬢様の体臭。

「はっ、すう」

動悸を抑えようと深く息を吸って、肺が熱で満ちてしまう。余計に鼓動が早鐘を打つ。昨晩わるいことしたばかりなのに、下腹部が疼く。ということはお嬢様の匂いです。

うう……好きな匂い、っ。

掛け布団が蹴飛ばされて床に落ちています。毛布一枚を身体に巻き付けて、寝息を立てています。ああ、熱を閉じ込めていた掛け布団を失って、体温が部屋に散っていたのですね。

「お嬢様、朝ですよ。起きましょうね」

「んう、ん……ずび」

肩を揺さぶつてあげると、今朝はすんなりと上体を起こしてくれました。そうして毛布が捲れ落ち、あふれた濃厚な体臭が両の鼻腔を撫で回していく。

「んっ……ふう。はああ、おはようございます、お嬢様」

「おはよ。……ずずつ」

「あらあら鼻水が、今ティッシュを……。はい、ちーんしまししょうね」
「ちーんっ」

鼻水を垂らすかわいなお鼻にティッシュをあてがい、鼻をかませてあげます。薄紙越しに熱を含んだ粘性があふれます。

「お布団を蹴飛ばして寒い寒いでしたね。あつたかい朝食を用意しますから、ダイニングに行きましょう」

「うん……」

とろんとした目と視線が合う。こころなしか顔が赤いような。

「お嬢様、熱でもありますか？」

癖っ毛で跳ねる前髪を除けて額に手を当てると、普段よりも熱っぽ
いような……？

「冷たい」

「あつ、冷え性の手じゃ余計寒いですね」

「きもちいから、そのまま」

もしかして、風邪を引いたのでしょいか。熱はありますし、寝起きのお嬢様はお寝ぼけさんとはいえぼーっとしすぎですし、鼻水もずびずび。冬の夜の寒さの中、寝相の悪さを發揮して掛け布団をのけ者にしてしまえば、まあそうなりますよね。様子を見た感じだと微熱で少し不調な程度ですが、今日は安静にしてもらいますよう。

「お嬢様、体調はどうですか？」

「ん。わかん、ない。頭痛いかも。トイレいく」

「はい。ごゆっくりどうぞ」

廊下に出てすぐ、重い足取りで二階のお手洗いへ。ドアは閉めてく

れましたが鍵のかかる音はなく、しばらくして無防備なおしっこの音が聞こえてきました。

黄色い水音が止んで紙を巻いてお股を拭いて……出てきませんね。おねむでしょうか。

「お嬢様ー？ どうしましたか？」

返事はなく、しかし耳を澄ませば息遣いが聞こえます。寝息というよりは、息んでいるような。

「んっ、うん——うんっ」

ぶおっ！ ぶううううううっ！

大きい、おならの音。

「うーん……はああ」

ぶっ ぶすぶす ぶううーっ！ ぶしゅ

どうやらおなが張っていて、気張っていたようです。そういえば最後に排便されたのが先週の日曜日で、もうお便秘六日目ですからおながガスでばんばんなのもしょうがありません。

大きなおならの後もトイレから出てくる気配はなく、時折息んでいる小さな声が聞こえるのみでした。

「うんちが出そうですか？」

「うん……。お腹痛いから、うーんっしてる」

「大丈夫ですか？ うんちがしたいときの腹痛ですか？」

「わかんないっ」

機嫌のよくない返事でしたので黙って見守ることにします。

朝一番のおしっこのときに排便もしたくなることは滅多になく、出ないので踏ん張ることもないお便秘体質ですが、大便が溜まっていて

よほどお腹が痛いのでしょうか。ちゃんと排便ができてつらいのが解消されればいいのですが。

数分後、ようやく紙を巻き取る音が聞こえてきました。しかし大便が出た様子はなく、おなかを擦りながらお手洗いで出てきました。

「お腹が痛い……」

「お食事が終わったら一緒にお手洗いでがんばりましょう。うんちが出ればきつと良くなりますよ」

「うん、そういうのじゃなくて、お腹痛いの」

「うんちが出そうではなかったのですか?」

「出そうな気もする……でも気持ち悪いから、もういい」

当事者ではない私に違いはわかりませんが、苦しそうなことだけはわかります。お便秘のせいでおなかが張って痛いのか、それとも風邪っぽいせいで痛むのか……。

「風邪気味なら今日はお家でゆっくりしましょうか」

「うん……。あ、元気だよ！ 元気だからだいじょうぶ」

「それならいいのですが」

「元気だからお出かけしようね。ね」

強がりなのか本当に何も無いのか、計りかねます。体調が悪いことも体力が尽きそうなのも自覚がないまま走り回る、そんなおこさまなので。

「かな、来て」

ダイニングに着いて自分の席について早々、手招きをされたので鍋の火を止めて駆け寄ります。

「お腹痛いから擦って……」

「いいですよ」

一度お便秘ばんぼんを撫でてあげて便秘解消のお手伝いをして以来、たまにおなかのマッサージを催促されるのですが……ちよつとどきどきするので控えてほしいような、ほしくないような、じゃなくて。

具合が悪そうなので興奮よりも心配が先立ちました。安心。

椅子の背もたれに体重を預けるお嬢様の後ろに跪いて、抱きつくようにパジャマの上に両手を添える。

「ん……」

「痛かったら言ってくださいね」

ぶつくり膨れた、おへその下。皮膚と脂肪の弾力の下に、硬く歪な感触があります。お嬢様の大便が、手のひらの下にあります。

食事前ですし、痛みが和らぐ程度にしておきましょう。

「ご飯を食べたらうんちが出るように腸揉みしてあげますね」

「うん……。ふう、ふーっ」

お嬢様のおながが、ごろごろしています。私が触れる前から少し蠕動していたのですが、強張るおなかを撫でている内に腸の動きが強くなってきました。

ごろごろごろ……ぎゅるるる

「ん！ ふううーっ」

「苦しいですか？ おながらが出そうなら我慢せずに、」

「うんちしたいっ!」

私の手を振り払い、突然立ち上がる。

「トイレえっ!」

お嬢様は横顔に焦りと苦痛を浮かべながら駆け足でダイニングを

飛び出して廊下へ。

全然揉んでもいなかったのに、さっきまで便意もなかったのにいきなり催すなんて……どうしたのでしょうか。

慌てて追いかけると一階のトイレの前にパジャマのズボンとショーツが脱ぎ捨ててあり、

「ふうふうううううんっ！」

ミチミチミチヂヂヂヂリリリリリリミチミチミチッ！！

腹の底から、そして腹の中から。正反対の腔くまから力強く懸命な声と肉を引き裂く音が廊下に響き渡りました。

「はあ、はああ……うんち、でる、っ。うううんっ！」

ミチミチミチッ！ ミチッ メリメリ……ミチミチミチミチッ！

ミチユミチユミチユミチユ……プリプリポチャッ！

いつもは便意を待つて努力で絞り出すお便秘大便が、雪崩れて便器に落ちていつています。まさかおなかを壊されたのでしょうか。

「お嬢様大丈夫ですか？ おなか壊しちゃいましたか？」

「ふううーっ、うーん、うーんっ」

私の声も届かないくらい必死に踏ん張り、大便を押し出すお嬢様。息む声の強ばりが和らぐことはなく、ばちゃ、ぼちゃんと硬めの大便が断続的に便器に叩きつけられる様子を見守ることしかできません。

やっぱりお嬢様は風邪を引いておなかの調子が悪いのでは……？ 寝起きに六日目のお便秘大便が一気に出るなんて、大腸が異常な蠕動をしなければ——軟便や下痢を催しておなか動いているとしか考えられません。

「ふうううう、んっ、うーんっ、お腹が痛いよ……」

ドアが閉まっていられないせいで大便の出る音も、苦しうに息む声も、そして大便の臭いまでもが廊下に漏れ出ています……。水分を吸い尽くされ腸内で熟成した、濃厚で鼻腔に染みつく悪臭です。大好きなお嬢様でも排泄物は臭うのです。

ニチニチニチ ベチャーン！ ポトン ドボン

しかし水分過多な便を彷彿とさせる酸っぱい臭いはしませんね。便器に叩きつけられる音も硬質で質量のある感じですよ。硬いのは出終わって、普通便の感じですね。

お嬢様の排便に付き添いすぎて、音と臭いで便の状態がわかってしまうようになりました。

「おなかの具合はどうですか？」

「んっ……あ、かな。えつとね、硬いのいっぱい出た……」

「ゆるいうんちは出ましたか？」

「出てない……。でもまだ出そう。お腹痛いよ」

「食後におなかのお薬飲みましようね。すつきりするまでここで待っていますね」

それからは息む声と湿ったおならが聞こえるばかりで、大便が出ている感じはありませんでした。おなかを洗ってお手洗いで出られないとはまた違う、出るに出不る様子です。

応援も煩わしいかと思ひ、黙って待ち続けて五分後。諦めの溜め息をついて、後始末を始められました。温水洗浄のボタンを押して、お尻を洗っています。何回か紙で拭いて、水を流してお嬢様が出てきます。

「お嬢様、すつきりしましたか？」

「うん、全然……。ずっとお腹痛いの、うんちが出ない」

「それは大変でしたね。風邪のようですが、朝ご飯は食べられそうですか？」

「ちょっとだけ食べる……。あと、ね」

手を洗い終わったお嬢様は恥ずかしそうにトイレの方を指差ししました。

「うんち、流れなかった……」

「え、ああ、詰まってしまったんですね。うんちがいっぱい出たならしょうがないですよ。では私が直しておきますから、先にダイニングで待っていてください」

「うん、ごめんね……」

お便秘がひどいときは途中で一度流さないと詰まることがあり、今日は腹痛で気が回らなくて流せなかったのですね。

おなかを擦りながらダイニングに向かうお嬢様を見送って、トイレのドアを開く。便器は蓋が閉められており、そっと開くと閉じ込められていた激臭があふれ出しました。空腹の胃袋がひっくり返りそうなのを堪えながら便座も持ち上げて、惨状を確認します。

少し水位の上がった便器の中は茶色く濁っており、太くて硬い便が奥で引っかかっているのが辛うじて視認できます。ぼろぼろに崩れた便の欠片やバナナ状の便が浮いていますが、水に溶けた下痢や軟便は見受けられません。お尻の出口で留まっていた大便に阻まれていた六日分が全部出ただけで、消化途中の老廃物が下ってきたわけでは無い……。のでしょうか。おなかを壊したなら一緒に出ているはず、ですよ。

トイレの隣の用具庫から掃除セットを取り出し、まずはトンクで硬い便を砕いていきます。流れ損ねた大便を見える範疇でほぐして、取り除いて、ラバーカップで配水管に詰まった異物を吸い出します。そういえば体調が悪いせいなのか、詰まったと報告するお嬢様は恥ずかしそうにしていましたね。

『かななあー！ うんち詰まったー!!』

なんて、下半身に何も穿かないまま報告しに来たこともありましたが、さすがに自宅以外で詰ませたときはこそっと呼んでくれるのですが、自宅でも今日のように恥じらいを持ってほしいものです。

「っと、直りましたね」

真空状態で何度か引っ張ると、配水管の中でごぼごぼと音が鳴りました。ラバーカップと外すとごつごつの大便や溶けたペーパーが浮いてきました。よかった、直りましたね。あとはまた詰まらないように硬いのを砕いて流すだけ——

「かなんっ！ トイレ直った!？」

「はい、直りましたよ。今流しますからね」

スリッパを鳴らしてお嬢様が駆け寄ってきました。他人に自分の排泄物を処理させるのが恥ずかしくて、様子を見に来られたんでしょうか？ 別に私はお嬢様の排泄物は気になりませんよ。

「早くトイレ空けてっ！」

「えっ、まさか、」

「樹里うんちがしたいのっ!」

やっばりおなかを壊されているようですよ！

今すぐどいてあげたいのですが奥に詰まっていた硬い大便だけ細

かくしないよ。

「ちよっと待ってくださいね、今使えるようにしますから」

「早く早くーっ！ うんちもれちゃう！」

トングを突き刺して硬質便を分割し、水を流す。用具の水気を拭き取らないままバケツに戻し、便座を下げてお手洗いで飛び出した。

「ふうふううっ！」

待っている間にズボンもショーツも脱ぎ下ろしていたお嬢様がお

手洗いに駆け込んでいき——

「ううううううっ!!」

ブリブリブリブリニチチチチチーッ!! ブリブリブリッ!!

ブリュリュリュリュブリッ!! ブゥッッ!!

「お嬢様!? 大丈夫ですか？」

「お腹痛いよお、ううう、下痢のうんちでるっ！」

先ほどの排便とは一転して、多量に水分を含んだ大便が……軟便がものすごい勢いで便器におちまけられている音が響いています。まさにおなかを壊していると呼ぶにふさわしい、暴風の如き破裂音。

「うーん、うーんっ！ うああ、くうううっ！」

ブピヂッ! ブヂヂヂヂッ! ブピポブチュブチュチュッ!

ブピッ! ブブリュリュリュッッ!!

さっきお手洗いで息んでいたときは訴える腹痛も弱々しく、出された大便もゆるんでいなかったのに。開けっぱなしのドアから見えるお嬢様。激痛におなかを抱えて、おびただしい量の下痢を噴出するお嬢様。私には声をかけることしかできなくて、ただただ立ち尽くす。

便意と腹痛があるのに排便できなくて、それなのに後から突然下痢

がしたくなる症状。私にも似た経験があります。寝ている間におなか
が下って、真夜中にお手洗いにいっても普通の便しか出なくて……だ
けど薄い便意と腹痛が止まらなくて。用便を切り上げてベッドに戻
ると急に差し込む鋭い痛みと強烈な便意。壮絶な下痢でお手洗いを往
復した記憶が蘇る。

「気持ち悪いよお、お腹が痛いよ、うんち、止まらない……」

直腸から遠い小腸や大腸の入り口で下痢になって、水様便が下つて
くるまでの不明瞭な便意がようやく本物になって、お嬢様に襲いか
かっているのです。

「助けて、かなあ……!」

一〇分かけて下痢便を出し尽くし、朝食を摂られる具合でもなさそ
うでしたのでお部屋まで付き添います。

「今日はお家で休んでましようね」

「やだ、お出かけするもん……あつ、……トイレ!」

おなかを労りながら傍に寄り添うも、脇に差し込んだ体温計が検温
する間も我慢できず、二階のトイレに殺到していく。

暴力的な便意の前に、風邪を患ったお嬢様はお部屋とお手洗いを往
復する苦しみを余儀なくされるのです。

神様の呼び方

灰屋

一

残っていた最後の一枚の葉が風に吹かれて枝を離れました。枯れ葉はつむじ風にくるりくるりと空高くまで巻きあげられます。つむじ風はそこで飽きてしまって、枯れ葉を放り投げました。枯れ葉はひらひらと舞いながら、一匹の狐の足元に落ちて乾いた音を立てました。

狐は背負っていた籠を置いて、空を見上げました。西の山の上の方には、厚い雲がかかっています。

「雨が降るな。寒いから雪になるかもしれない」と狐はひとりごちました。

籠の中には、栗と柿の実が転がっています。もう少し粘ろうかと思いましたが、天気が悪くなる前に帰ることにしました。

心に浮かぶのは待っているコツキのこと。病弱で健気な女の子のことです。

コツキとの出会いは、偶然でした。狐が休んでいた荒れ果てたお社に彼女がたまたま雨宿りに訪れたのです。狐は神を騙って彼女から油揚げを騙しとりました。

その夜、たまたまコツキの奉公先のお屋敷を通りかかり、少女が虐げられているのを知りました。コツキがお屋敷の縁側で薄白く照らされながら、月を見上げているのを物陰から覗き見て、狐はコツキに惹

かれてしまったのです。

それから、狐は毎日コツキと神社で会ってコツキの好きな空の話をしたり、月を眺めたりするうちに仲良くなりました。

そうして、つい五日前のこと。狐はコツキを奉公先の屋敷から連れ出しました。そして、夜に誰にも使われていない小屋や廃寺を転々として、村の誰も知らない遠くへ行こうとしているのです。

「へくしゅんっ」

狐はくしゃみをして、しかめっ面をしました。

「冷えるな」

そう言っ首をすくめて歩きだします。

——風邪、ひどくなつてないといいけどな。

狐はそそくさと乾いた落ち葉の上をコツキが待つ今日の宿に向かいました。

二

里から少し離れた高台に廃寺がひとつ、誰にも手入れされずに残っていました。その周りのすっかり葉の落ちた林の中で、一人の線の細い少女がしゃがんでいました。外はもうすっかり寒くて、出したままのお尻が赤くなりはじめています。

「んっ」

少女は小さく声を出して、下腹に力をいれます。おへその下をてっ

べんに膨らんでいたお腹がわずかにへこみます。

ふすっ。ぷしゅう。

寒さで赤くなっていた頬がいきんだせいで余計に赤く色づきます。

コツキはため息をつきました。

「おなか、変な感じなのに、おならしか出ない」

一度腰を浮かしてしびれた脚ごと草履を動かします。

びりびりに乾いた初冬の空気を飲みこんでもう一度お腹に力をい

れます。

「んいっ」

けほっ。ごほっ。ごほごほごほっ。

急に肺の上の方から咳がせりあがってきて、喉と胸が熱くなりまし
た。

ごほんっ。ごほっ。ごほっ。

咳が止まりません。

ごほっ。げほっ。ごほっ。

ぶうっ。

咳が小さい体を揺らした拍子に、可愛らしい音がお尻から漏れまし
た。赤い頬がさらに赤くなります。

——寒い。中に戻ろう。

コツキは恥ずかしさをごまかすように、立ち上がりました。慣れた
様子で着物を直していきます。林から廃寺の中に戻ると、火鉢がびり
びりと熱を発しています。火鉢のそばに座って手をかざしていると、
煙ったい空気が喉をひりひりと刺激して、コツキはけほけほとせき込

み始めてしまいました。

——風邪、治らないな。

コツキは、痛む喉でつばをぐくりと飲み込みました。どうやら風邪
をひいてしまったようです。六日前、大便が出せずに苦しんで、長い
時間、寒い外で過ごしたことがコツキの体には酷だったようです。コ
ツキは丹前を着こみました。

——なんだかお腹も変。あれから出てないし。それに。お腹の奥が
動いている気がする。

コツキは小さな手でお腹を丹前の上から撫でました。お腹が張って
います。

狐に奉公先から連れ出してもらってから、連れ戻されないように
転々とする生活。コツキにとってはじめての生活のためか、廁がつい
ていない小屋を寢床とすることが増えたためか、コツキは最後にお通
じがあつてからすでに五日が経とうとしていました。

つんと張つたお腹の中にずっしりとした感覚があつて、お尻に固い
ものが栓のように刺さっているようです。ときどきお腹の中のものが
上の方でぐるぐる言っているのが分かります。近いうちにお腹が痛く
なりそうな予感がしてお腹を撫で続けます。

「神様、早く帰ってこないかな」

小さい独り言が埃っぽい狭いお堂に寂しく吸いとられました。あと
には火鉢のバチバチという音と扉がときおりカタカタと揺れる音だ
けがしています。

狐はコツキに「神様」と呼ばれるのを嫌がりましたが、コツキは「神様」と呼び続けていました。

コツキが居場所のないお屋敷から救い出された晩のこと。狐はコツキに謝りました。

「すまない。おれは、ほんとうの神様ではない。おまえの前で神様のふりをして、油揚げを取り上げて、コツキを奉公先から連れ去った。

もしおまえが俺と一緒にいるのが嫌だったなら、屋敷に戻ってもいいのだぞ」

コツキは首を横に振りました。

「ううん、一緒にいたい。お仕え、するの。あなたはわたしの、神様だよ。ほんとうの……神様だ」

薄暗い神社の中でコツキはそつと言いました。

コツキは、狐が神様を名乗って、コツキを騙していたことなどどうでもいいと思っていました。そんなことは長い間、家族にそして、奉公先で否定され続けた少女にはなんでもないので。

自分と話してくれた。誰にも相談できなかったお腹の苦しみを取り除いてくれた。居場所のなかったお屋敷から、救い出してくれた。

コツキにはどうして狐が自分を助けてくれるのか分かりませんでした。何にもとりえない自分に見返りなく救いの手を伸ばしてくれる存在。

コツキにとって狐は間違いない神様だったので。

風邪をひいたのはその晩のすぐあとでした。コツキは狐の役に立ちたくて、柿や栗をとるのを手伝いたいと申し出ましたが、狐は許しませんでした。風邪を治してからだ、と言われたのです。

ひとり薄暗い廃寺であたたまって待っているとコツキはつい考えでしまうことがありました。

いつか神様が何の役にも立たないわたしに飽きて、捨ててしまうのではないか、ということでした。悲しいくらいに体が弱いわたし。冬になれば、きつと寝込むことが多くなる。それでも、神様は自分を見てくれるだろうか。

今の狐との暮らしは幸せでした。おかみさんになじられることも、奉公人仲間に邪険にされることもありません。でも今までかけられたことのない優しい言葉は自分に不釣り合いに見えて、こんな暮らしが長く続くわけがない、と思ってしまうのです。幸せな暮らしであるほど、狐に見捨てられるかもしれないという疑念は余計にくすぶるのでした。

三

風にかたかたと揺れていた戸がトントんと叩かれました。

「コツキ、体はどうだ。喉は痛むか？」

コツキを案じながら、狐が中に入ってきます。

「まだ、喉がいたい、です」コツキは火鉢の前で丹前にくるまりながら答えました。

「そうか。柿があるぞ。食べられるか。栗もあとで煮ようか」

狐は柿を籠から取り出して、コツキの小さい手のひらの上に載せました。

「ありがたい……。神様、外、寒かった……。？ 火、あたりますか？」

コツキは腰を少し上げて言いました。

「いい、コツキがあたれ。おれは平気だ。あと、神様とよばなくていい」

と狐は答えました。

「柿、剥いてやるか？」

狐は、一枚の葉を取り出して、頭の上に載せました。それから、小声でぶつぶつと唱えます。次の瞬間には、狐のいた場所に一人の男が現れて、あぐらをかいていました。男は、どこからどうみても山奥で修行をしているような山伏にしか見えません。

狐はこうやって人に化けることができましたから、狐の姿では難しいことがあると、よく山伏に化けるのです。それから、コツキの手から柿の一つ取って、不器用な手で柿を剥きはじめました。狐の衣に柿の汁が滴ります。

「そうだ、外の雲行きがよくなかった。雪が降るかもしれない」

「雪……。ですか。たしかに、寒いかも……」

「ああ。明日の出発はやめよう。峠を越える。風邪が治つてからの方がいいだろう」

「わたし、だいじょうぶです」と言いかけて、のどの奥が詰まるような感覚がして、むせました。

——けほっ。こほっ。

咳こんでしまいます。

「ほら、いわんこっちゃない」

そう言って、狐は丹前の上からコツキの背中をそつと撫でました。

コツキは、狐に涙目を向けて「ごめんなさい」と少し低い声で言いました。

そのとき、狐が怖い眼をして、戸に向かってきつとにらみました。

「どうしたの？ 神様」

「コツキ、隣の座敷に押入れがあつたらう。そこでおれが呼ぶまで静かにしている」と耳打ちしました。

「押入れ？」

「そうだ。静かにできるか？」

コツキは半ば押し出されるようにして、となりの座敷に連れていかれました。そして、となりの座敷へ押入れに小さい体を押し込みました。ふすまを閉めると押入れの中は真っ暗になりました。ふすまを開いた時に舞い上がった埃を口で吸い込んでしまつて、コツキはせきこみそうになりましたが、狐の言葉を思い出して、手で口を押さえました。空いた方の手で胸をさすります。

——どうしたんだろう、急に。

急に「押入れに入れ」だなんて。

土間の戸が開く音が聞こえました。誰かが入ってきたようです。それから、低い声が聞こえてきました。内容は聞こえませんが、狐と誰かが話しているようでした。

ふと耳元の壁でカサカサという音がして、少女は背中をびくりとさ

せました。古いお堂の中です。虫がいたって不思議ではありません。コツキは押入れを飛び出したい衝動に駆られました。が、神様の言いつけを守ろうとコツキはぎゅっとこぶしを握りました。

暗闇で何かを待っている時間は長く感じるものです。コツキはつい空想に耽りました。

——もしかしたら、わたしに聞かれたくない話？

たとえば、このままわたしを置いて行ってしまおう、っていう相談……とか。

そこまで考えて、コツキは首をぶんぶん振りしました。

——あんなによくしてもらっているのに、神様を疑うなんて、わたし最低だ。

そんなことばかりを頭に浮かべていると、ふいに押入れに光が差し込みました。

狐がふすまを開けて、コツキの近くにしゃがんでいたのです。

「コツキ、すまない。ちよつと急ぎの用ができた。荷物をまとめたらすぐ出発しよう」

「出発？ あの、神様、なにかあった？」

狐は一瞬ためらうような素振りをみせて、外の方へ視線を走らせました。すぐこう答えました。

「気にするな。大丈夫だ」

そう答えると狐は荷物をまとめ始めました。

四

コツキは、荷物をまとめ終えると「廁に……おしっこ」と小さく立ち上がりました。狐は「——おれも。いや」と言っけて口ごもりました。

「神様？」とコツキが振り返ると、狐は「暗いから気を付けて」とだけ言いました。

外はもう青くて、林の木も笹も深い黒い輪郭しかみえません。

コツキは、お尻をひよいと出してしゃがみました。

おしっこと狐には言っけて外に出ましたが、本当にしたいのはおしっこではありませんでした。お腹に力を入れます。

「んっ」

ぴすっ。おすっ。

小さい音を立てて熱いおならが出ていきます。

コツキは手でお腹をさすりました。お腹の奥の気持ち悪さがとれません。お腹の中に溜まったものがなんだか悪たくみをするように不気味に動いているのに、便意はないのです。いっそウンチが今出てしまえば楽なのに、とコツキは小さいお腹をさすりました。

おすっ。おしゅうっ。

匂いが少しだけ濃くなつたおならが薄闇の中に広がっていきましました。お尻から出るのは、おならばかり。体はもやもやを出そうとしているのに、コツキのお腹の中からは、ガスしか出て行きません。コツキはお腹に力を入れるのをやめてふつと息をつきました。

——神様、どうして急に峠を越えることにしたのかな。

コツキの思考は、さきほどから心の中でもやもやしていた疑問に行きつきました。荷物をまとめながら聞いてみても神様は「たいしたこ

とじゃない、心配するな」としか言いませんでした。さつきコツキを押し入れにやったときに、きつとなにかあったに違いない、とコツキは思いました。

コツキはほとんど青く暗くなっていく林の中で、冷たい風をお尻と頬に浴びながら、無性に落ち着かなくなってきました。

もしも。もし、神様がわたしのことを山に捨てて……。そういうことを考えていたら。でも、わたし何もしてないし、仕方ないのかな。なんで助けてくれたんだろう。

心のざわつきは青く冷たく、小さい体を冷やしていきます。

そのとき、後ろから心配そうな狐の声がしました。

「コツキ、大丈夫か？ 怖い目にあつてないか？」

急に話しかけられて、コツキはびくつと背中を震わせました。

コツキが厠に行っている最中に狐が話しかけるのはめずらしいことでした。コツキは狐に急かされているように感じました。

「だいじょうぶ、です」

そう言つてコツキはお尻をしまいました。

立ち上がつて冷えた腿を衣で隠したとき、お腹の奥に違和感を覚えました。何かがぐねりと動いたような気がします。コツキは一瞬迷いました。

——お腹、やつぱり変だ。

ざわざわと笹が風に揺られます。

——でも、神様、急いで。待たせたくない。

コツキは小さく首を振つてそのまま、小走りで狐の元へと駆けてゆきました。

五

コツキは目の前の山道の険しきでいつのまにかお腹の不安を忘れていました。

二人は月が隠れて何も見えない真つ暗な林の中を息を切らしながら歩いていました。木の間を縫うように続く急な坂を登るたびに、口から冷たい空気が無遠慮に入つて、咳こみそうになります。土くれを木の根が支えているだけの急な段差を超えるたびに、足がほとんど重くなって上がらなくなりです。

狐は夜目が利いて、山にも慣れていましたから、ひよいひよいと身軽に登つていきました。ところが、コツキは慣れていませんからついでいくのがやつとでした。少しでも気を抜けば、狐の姿は真つ黒な夜に吞まれて見えなくなつてしまふそうでした。狐はときどき後ろを振り返りました。しかし、そのとき時々一瞬見せるぎりりとした鋭い目つきに、コツキは胸の奥がきゅつと締め付けられました。

——どうしよ。神様怒つてるかも。わたし、おそいから。

胸の内が悪い想像でいっぱいになります。焦れば焦るほど、息があがつて、体の中から熱と汗が滲んできます。コツキは、ふらふらになつて、木の根ですべつてよろけました。

狐がコツキを心配そうに振り返つて「大丈夫か。ごめんな。ほら、おぶつてやる」と言つて、背中を向けて腰をかがめました。

——遅いから。わたしの登るのが遅いからだ。足を引っ張つてる。コツキは少しためらいましたが、言われるがままに肩をつかみまし

た。

体がぐいっと持ち上げられて、頭がくらくらします。

「コツキ、熱っぽくないか？」狐がそう心配しました。

コツキは言葉を探しました。熱と不安が絡みついて彼女の思考は負の方向へ流されていきます。

——具合悪いつて伝えたら、困った顔……するかな。甘えたい。

でも、また、今度も甘えたら。今度は、愛想をつかさされるかも。甘えちゃうのが怖い……。

コツキは「だいじょうぶ」とだけ言いました。

「そうか？ 具合悪く……」そう言いかけて、狐は言葉を止めて、なにか恐ろしいものを見たように目を見開きました。

そうして、狐は音を立てないように慎重に、山道を登り始めました。

コツキは「狐の機嫌が悪いから、言葉を止めたのだ」と受け止めて体をこわらせて息をひそめました。

二人が歩いているうちに、林が風で揺すられる音がどんどん大きくなっていきました。狐におぶわれている少女の体は汗冷えていきます。さつきまで、急な傾斜を登って、体にもったはずの熱はどんどん奪われていきます。少女の背中も指もつま先も、じわじわと気づかないうちに冷たくなっていました。

汗に濡れた背中がぶるりと震えて、くしゅんっ、とくしやみが出ました。

——寒い。

さつきまでむしろ熱いとさえ思っていた少女の体は、いつの間にか

冷たくなっていました。体をずらして狐の化けた首元の丹前のひもをぎゅっと結んで、首をすくめます。

そのとき、二人の進む先が開きました。林が終わって、目の前は枯草の広がる野原になりました。暗闇から冷たい風が吹いて、ざわざわとすずきが揺れる音が聞こえます。北風がコツキのやわらかい髪を揺らしながら、首筋を冷たく撫でました。細い指先も、つま先も、背中も風がどんどん熱を奪っていきます。

くしゅっ。

コツキはもう一度くしやみをしました。コツキのくしやみの音はざわざわと揺れるすずきの音ですぐにかき消えてしまいました。

六

すずきの揺れる音と風がいつぱいの寂しい野原をおぶわれながら、コツキが時折咳をしています。コツキは寒さに震えながら、お腹を気にしていました。

狐の背中には、コツキのお腹が押し付けられていました。着物の下にはおへその下をてっぺんにして膨らんだ腹が隠れています。

この五日間、風邪を引いたことを心配した狐は柿や栗をたくさん拾ってきては食べさせようとしてきました。お屋敷の奉公人の時には、ご飯をずつと減らされてきましたから、コツキも好きに食べられるのが嬉しくてついついたくさん食べてしまいました。繊維たっぷりの果実と甘くておいしい木の実は、少女に消化され、コツキの桃色のきれい

な腸管の中に溜まっていききました。

腸に溜まった内容物は、長い間少女の体温にあたためられ続けました。可愛らしい小さなお腹の中の腸の内側で水を失っていき、柿の実
は繊維質の黒い便に、栗は固いコロコロした塊へと変わっていつて、
コツキの左腹にずっしりと溜まりました。それから、コツキの腸の中
のさまざまな菌が分解して、ぽこぽここと気泡が生まれていたのです。

出発前に便を出そうとしてから、一時間。緊張と焦りにさらされた
コツキの腹にガスはどんどんたまっていたのです。

おぶわれた少女の腸の中の微小な泡は、ゆっくりとお腹の中で上へ
上へと上がっていききました。うすい膜に覆われたたぐさんの気泡は行
き場を求めて、腸のひだを引き伸ばし、膨らましました。無理やり
膨らまされた腸は、気弱な少女のお腹の中の限られた隙間を求めて、
折り曲げられ、形を変えながら彼女のお腹をどんどん膨らましていま
した。小さいお腹の皮膚は、その奥の折れ曲がった腸に内側から押し
られて、ばんばんに引き伸ばされます。少女の白い腹はてっぺんが潰れ
たダイフクのようになっていました。

ばんばんのお腹を抱えたまま、狐の背に揺られます。時折コツキは
自分の重さでお腹がぎゅっと押されて、おならが出てしまいうそうに
なってお尻をきゅっと締めました。

コツキは放屁を気づかれるのが嫌でした。以前、狐は「コツキがお
ならをしても嫌いにならない」と言ってくれたことがありました。で
も、コツキは怖いのです。

何かを急いで焦っているように見える狐。普段はそんなことを思わ
ないって分かっている、余裕が無いときは、きたない、くさいって

思うかもしれない。嫌われるかもしれない。

コツキは背中の上で揺られながら、お腹に力が入らないように重心
を後ろに倒したり、前にしたり姿勢をずらします。それから、お尻の
穴にきゅっと力をいれて、必死に我慢していたのです。

狐が不意に立ち止まりました。

「コツキ、一旦降ろすぞ」

そう言って、コツキを枯草の上に降ろすと、狐は今まで歩いてきた
道の方を怖い顔をしてじっと見ていました。

コツキは、そっと狐から離れて風下の方向へ行きました。狐から離
れたところで、放屁をしようと思ったのです。すすきの陰に隠れて、
そっとお尻から力を抜きながら、お腹に力をこめました。

ふしゅっ。ふすっ。

小さな音とともにコツキのお尻の穴がほんの少し開いて、ガスが出
ていきました。お尻を包む暗い赤色の着物の内側にお腹の中の熱が発
散していきます。着物から外に匂いが広がって、風に流されていきま
す。

——だめだ、まだお腹苦しい。溜まってる。

膨らんだお腹が苦しくて、コツキは帯紐を少し緩めました。

こぼこぼっ。

腸壁と便の隙間から気泡が降りてきて、お尻の裏側がぷくつと膨れ
ました。呼吸を止めます。

ぴすっ。ぷっしゅう。ぷうっ。

お腹の苦しさが少し和らいで、ため息を吐くと、息が白くなって鼻

が濡れました。コツキのお尻と着物の間の空間は、熱でいっぱいになりました。冷たい風で感覚がマヒしているはずなのに、鼻に染みつくような匂いが浮かび上がってきます。ひどい便秘の時とお腹を壊した時においを混ぜたような匂いです。コツキはひどい匂いに思わず顔をしかめました。

ぎゅるるっ。

お腹の奥が低く暗くうなってじんわりとした痛みを感じました。

——出るかも。

膨れたお腹のずつと奥の方で、腸が動いている気がします。

——どうしよう。出ないかもしれないけど、もう一回。

そのとき、狐が声を張り上げました。

「おい、コツキ、待たせてすまん。どこだ？ 行くぞ。雪が降ってきた」

コツキはその時初めて、風に交じって雪が舞っているのに気が付きました。コツキの髪に数粒落ちて、すぐに小さな滴になっていきます。

コツキは迷いました。でも、コツキは狐に置いて行かれたくありませんでした。

——きつと頑張ってもまた出ない。神様、急いでるから。峠を越えてからしよう。

「神様、今行きますっ」

コツキは、すすきの陰から頭を出して、狐に答えました。

七

いつの間にか、雪は強く降り始めて、二人の頭にも雪がうっすらと積まりました。野原の枯草も強くゆすられます。

少女は背中の上で、せわしなく体を動かしていました。それは何も寒さのせいばかりではありませんでした。

——どうしよ、ウンチしたくなって……きたかも。

さっきおぼろげに感じたコツキの便意がだんだんとはつきりしたものになってきたからです。コツキの「出るかも」は「したい」に変わりました。便が降りてきた感覚がします。

コツキは狐の肩に置いた手をきゅつと握りました。

——どうしよ。神様に言えば、止まってくれるかな。そのすすきの陰でしちやえば。

そう考えて、コツキは山道を登る途中で見た狐のぎりりとした目を思い出しました。

——今、声かけたら嫌がるかも。まだ、我慢できないほどじゃない、から。峠を越えるまで……我慢できる。

きゅるきゅる。

背負われた少女の小さなお腹の中が鳴っています。腸管が物を運んでいるのです。朝食べた柿の実が繊維のたつぷり残ったまま、胃のすぐ下を右から左へ進んでいきます。臭気の閉じ込められた薄い気泡を腸が伸びたり縮んだりして、次第に下へ下へと送っていきます。

大丈夫。我慢できる。そう言い聞かせて、コツキは背中の上でお腹が落ち着くように願ったのです。

夏の夜 話したくないこと、話したいこと、話したこと

A J

ジャンパースカートの制服に身を包んだ少女が、尻を剥いて、他者には絶対に見せられぬ赤黒い排泄器を晒し、しゃがみ込んでいる。

ビチヂチッ……ブビビビビィィィ……ブジュルルッ!

薄暗くて湿っぽいトイレの中。時代から取り残された和式便器の上で、一人の少女が、嫌悪の対象でしかない首と臭いを撒き散らし、形の崩れた汚物を注ぎ込んでいる。

「うあ……んっ、んんうっ……うううう……っ!」

ブビビッ! ブッ、ブブウウウッ……ブチュルル、ブリュリュッ!

ブジュルルッ! ブビビッ! ブボボボドボボッ!

立ち上がって背筋を伸ばしたところで百四十七センチメートルにしかならない短軀を、しかし華奢な脚だけで支えるには重たいその身を丸めながら下痢をしている様が、ただただ哀れであった。目元まで隠れるような長い前髪を汗で額に張り付かせ、抑えようにも抑えきれぬ低い呻きを漏らしているのがどうしようもなく無様であった。十五を数える実年齢をおおよそ主張できていない童顔は青ざめて、ただ唯一成熟を感じさせるはつきりとした目元も、今は苦痛に細められてしまっている。纏う少女らしい甘い香りも、暴力的な腐臭が容赦なく塗り潰す。

ブリュリュブビビッ! ブジュルルルビチビチチッ……!

(いつもより酷いかもっ……学校だから、早く済ませたいのに……っ) 誰しもにとって、下痢をするのは不幸なこと。しかし、この藍花と

いう少女にとってには日常の一部に過ぎない。人並みより貧弱なその大腸は、頻繁にその調子を崩してしまう。今日も朝には柔らかなめの大便を出してきたというのに、結局下してしまった。部活動に励む最中に抗い難い便意を催し、この場に駆けていく羽目になった。

ブチュルルッ……ビビッ……ブブウウウッ!

(やだっ……止まらないっ……人來てるのにつ!)

しかし、校舎の片隅へ逃げ込んでも、そこはいくつもの文化部も活動をしている場所である。他の生徒の来訪も当然にあり得ることだ。聞かれたくない、嗅がれたくないという願いも空しく、壊れたお腹はうねり続けている。

「……ねえ、ちよっと」

「うん……そうだね」

後から来た生徒たちは、気まずそうに言葉を交わすと、用を足さぬまま、そそくさと去って行ってしまった。気遣いのつもりか、或いは悪臭漂うこの場で用を足すのが嫌だったのか、個室の中の藍花には分らない。

(……別に、好きで下痢してるわけじゃないのに。汚いのは分かっているけど、仕方ないんだから。こんな、こんな体質だから)

小学生の頃にも、幾度となく学校のトイレで下痢をした。授業の最中に青い顔で教室を飛び出したことも数知れない。遠足のバスに予定外の停車を強いることすら経験している。そしてその度に陰湿な陰口を叩かれ、囁し立てられ、ドロドロの腹の中身を見ると同じ目で見られた。何度も何度も、まだ幼く他人の優しさを信じたかったであろう心を傷付けられた。心無い声に恐怖し、もう少しでチャイムが鳴る

のだからと無理な我慢を重ねた結果、最悪の辱めを受けるに至った記憶は、今でも夢に出てパジャマを嫌な汗で湿らせる。諦めて受け流し、折り合いを付けることを覚えた今でも、物事を悪い方向に捉え、常に悪意を想像する癖は直せないでいた。

「くっ……んっ……うんん……っ！」

プビッ！ ユルルルビユルルルウウウッ！

熱い汚物が肛門を擦る度に、お腹は楽になる。しかし、心の深くで膿んだ傷跡は癒しようがない。

間欠的に粥状の糞便を便器へと注ぎ続け、渋ったお腹が落ち着きを取り戻すまで個室に籠ること約十分。藍花はようやくやく苦闘を終えて外に出た。その間ずっと体を支えていた脚が痛むが、人気の少ないトイレは、改装を受けられず全て和式なのだから仕方がない。

(……やっぱり、緊張しちゃったせいだよね。でも、頑張らないと)

藍花は石鹸を使い丁寧に手を清めた。ハンカチで滲んだ汗も含めて拭き取り、制服に乱れがないか些細な点にまで目を配る。鏡に写った自身の表情に緊張の色を認め、静かに深呼吸をする——校舎の内で大便をするのにも相応の羞恥を伴うが、藍花にはもう慣れたこと。心臓が跳ねる理由は別にあつた。

(そろそろ下校の時間だし、言わないとだよね。紅里^{あかり}ちゃんは、私なんかと違って、他の人からも誘われちゃうだろうし、今日のうちに……ううう、またお腹痛くなりそう)

つい数分前までの汚辱の様から、本来あるべき女子生徒の姿に立ち返った藍花が、廊下を歩いている。勇気とためらいの間で揺れる感情

を抑えきれず、頬の色が赤に移ろう。週三回は放課後に通う美術室へと繋がるただの引戸でさえ、今は重かった。

(紅里ちゃん、居ない……どこに行っただら)

藍花は数度美術室の中を見渡すと、残念そうな、しかし安堵とも取れる表情を浮かべ、自らの席に戻った。壁際の、周囲に着席する者の少ないやや孤立した席である。そして、静かに絵筆を取ると、描きかけになっている風景画に取り組み始めた。題材は赤と黄色で彩られた花畑で、壮大な風景を感じさせる力強い構図ながら、キャンバス一面に渡って繊細な描き込みがなされている。中高一貫校ということに混ざっている高等部の部員と比べても、遜色のない腕前であった。

「もういつもの気分転換は終わりですか、藍花先輩」

しばらく自分の世界に没入していた藍花を、図書室で借りて来たと思しき美術書を抱え、ちよūd美術室に戻って来たばかりの女子生徒が現実呼び戻す。人懐っこく幼げな声色に反し、力強い双眸を備え、成熟した造形美というものを顔付きで表現する少女であった。背丈においても藍花より二十センチメートル近く高いのだが、彼女のことを先輩と呼んでいる……中等部二年の後輩であった。

「あつ、紅里ちゃん……えつと、その、外を歩いたら、なつ、悩んでた色使い、か、解決したかな……これなら、夏休み入る前までに完成するかも」

「わあ……いつもながら、力強い描き方なのに、細かなところの描き込みがすごい……私、先輩の絵が本当に大好きですっ」

後輩の少女——紅里の浮かべた屈託のない笑みはあまりに眩しく、藍花には直視することは難しい。向けられた「大好き」という言葉が、

自身の作品に向けられたものであるのは明らかであっても、体の奥底から熱が沸き上がるのは避けられない。

藍花は耳の先まで顔を朱に染め、俯き加減で細々と話した。

「えっと……あ、ありがとう……紅里ちゃんが褒めてくれるから、もっと頑張らなきゃって思う。まだ、わ、私も人物画とか苦手だから」

教室では寡黙を貼り付けなんとか誤魔化している口下手がそのまゝに出ていた。上手く話したい、相手にも楽しんでほしいという想いが空回りして、舌がもつれてしまう。

「藍花先輩がもっと上手くなったら、私なんて自信喪失しちゃいますよ……あつ、そういえば今回はなんで花畑なんですか。紅花の花畑、どこかの公園でこういうの見たことあります」

「こつ……このお花、さきつ、咲き具合で、い、色が変わって綺麗だし、夏の花だから、今の時期に、ちょうどいいかな、って」

貴女の微笑みが好きだから、無邪気で満開の花のようなその表情が大好きだから、貴方の名前に因んだ花を描きました——などと、臆病で引つ込み思案で内気な藍花が言えるはずもない。そんな生来の氣質を除いたところで、この今にも胸を突き破ってしまいそうな感情は、誰にだって言葉にするのは難しい類のもの。

「あつ、あの、紅里ちゃん……えっと、つ、次の土曜日なんだけど……」

絶対に表には出せぬ想いとは別に、言うど心に決めたことがある。数日間に渡って秘めて悩んで堂々巡りを繰り返したことに。先にトイレに籠らざるを得なかった原因も、その極度の緊張であったに違いない。それほど大きな、しかし傍から見ればささやかに過ぎない望みが、藍花の口から零れていく。

「百福台の方で、は、花火大会があつてね、あつ、紅里ちゃんの、家からは、ちかつ、近いと思うし、せっかくだし二人でつ、一緒に見たいなって……っ！」

そうして聞き取りにくい小声で、聞き取れないかもしれない早口で一気に藍花は言ってみせた——まくし立ててしまった。藍花という少女の勇氣という勇氣をかき集めてようやく切り出したのは、夏らしいお出かけの提案。二人きりで、思い出を共有するということが何より、上目遣いで懇願する彼女にとって価値があった。

「いいですね、藍花先輩と花火一緒に見たいです！ 浴衣とかもちゃんと準備するんで、先輩もお願ひしますねっ」

紅里の快い返事が、藍花の表情を瞬く間に輝かせる。クラスでは暗いと囁かれがちな藍花の表情が、喜びと期待に満ちていく。

「あつ、ありがとう……っ！ あ、あの……ほ、本当に私なんかと一緒に、いいの？」

「藍花先輩となら、ぜったい楽しいですから！ 一緒に行きましょう」

「ほ、本当にありがとう、紅里ちゃん、わ、私、ちゃんと準備していいね……ゆ、浴衣もつ、着てみるっ」

来たるべき日が今この瞬間から楽しみでたまらなかつた。楽しみなだけならばいいが、今日からの五日間、授業中も構わず上の空になつてしまわないか、藍花自身心配になるほど。

それほどに、藍花は紅里のことが好きだった——無論、その「好き」がどういう意味を持っているか、十五歳の藍花は、思い悩んだ末に理解をしている。

* * *

「はああ……くっ、う、んっ……んんっ！」

ビチビチビチチッ！ ブジュルル、ブビビッ……！

きらきらと目を輝かせた恋する乙女として下痢をする。この日の藍花が腹痛に見舞われたのは、最寄り駅から自宅までの道中のこと。十分の我慢の果てに自宅に着くと、制服を脱ぐ間もなく、大慌てで便器に飛び付くこととなった。

藍花は些細なことでお腹を下してしまう。そして、執拗で病的な蠕動が送り出す消化不良の泥状便や水様便は、そう長い間留めておくことができない。だから藍花は、校舎の片隅にあるトイレで、途中下車をした駅のトイレで、青い顔で飛び込んだコンビニのトイレで、まともにも清掃もされていない男女共用の公衆トイレで下痢をする。いつだって、どこだって下痢をすることを強いられる。

だから、たとえ腹痛に悶えるのが辛いことだとしても、外と比べれば、自宅のトイレはまさしく天国だった。清掃は行き届いているし、事が済めば温水で尻を洗うことも許される。そして何より、音や臭いを気にしなくてもよいことが、一つしかない便器を長い間占有しても、藍花の体質を知る家族は理解してくれることが救いだ。

「うろうう……う、んんんっ……う……んんんっ！」

ブビビィィーッ！ プリュププッ……ブビボボッ！！

苦しみから逃れるために、幼子のように声を上げて息む藍花。蒼白に赤色を混ぜて、一生懸命にうんちを頑張る女の子——この安息の空間は全部を許してくれた。

ビチビチビチッ……プリュルルブビビッ……ブチュルルッ！

（最近はずいぶん良かったのに、ここ何日かは緩んでも下痢って感じじゃなかったし、今日だって朝はちゃんと形のあるのが出たのに……教室の冷房がいつもより強かったから、冷えちゃったのかな……六時間目の音楽、独唱のテストだったから、緊張し過ぎたのかも……）

不調の理由はいくつか考えられたが、理由など無くても下してしまいうのが藍花だ。それに、原因がどうであれ、乱れた腹の中身を全部吐き出すまで便器を離れないのはよく理解している。半ば達観した表情を浮かべる藍花は、何度も何度もその尻から茶色を吐き続けた。（……はあ、収まるまで時間掛かった……結構酷かったかも。夜ご飯少な目にしておこうかな）

事を済ませ、藍花は痛みの残滓の残るお腹をさすりながら、自室のベッドで寝転んでいた。制服は脱いで、ゆったりとした部屋着である。慣れたこととはいえ、冷房もない息詰まる狭い空間に閉じ込められ、差し込む痛みに悶えていたのだ。手を洗ってすぐにグラス一杯の麦茶を飲み干し気分は良くなったが、しばらくは体を休めていたかった。（明日の花火、こんな調子で大丈夫かな……会場のトイレは混むし、それに紅里ちゃんにお腹ピーピーで下痢しちゃうってなんて、絶対に知られたくない……そんなの、嫌われちゃうから）

恋愛という熱く重く切なげな特別を向ける相手と並んで歩き、きつと全部が楽しいと大好きで形作られているであろう明日にだって、大嫌いな体質が茶色の影を落としている。向かう先は数千数万人の人々が集う夏の一大イベントだ。一度下痢に見舞われれば、数少ない便器を

求めての過酷な闘いが待っている。事実、長蛇の列の中で腹痛に揉まれ、便意に苛まれ、大失敗に至った幼き日の苦い記憶もあった。

そして何よりも、着衣に守られ、白磁の肌に包まれた腹腔の内に、ドロドロでグチャグチャの汚らしいものがあることを、紅里という少女には絶対に知られなくなかった。尻を剥いて泥と化した汚物を垂れる自らの姿は、一片たりとも紅里という少女の脳裏に存在してほしくなかった。事あるごとに最低の音と臭いを撒き散らして下痢をしてみよう汚い女の子を、好きになる人なんているはずがないから、隠しておきたい。下痢という呪いのせいで、数多の恥を受けて、嫌悪と侮蔑と揶揄いを向けられて、時には失敗の惨めさに涙を枯らして、無理矢理に慣らされ鈍麻した心にも、絶対に譲れない一線が残っている……幸い、部活動中に時折行われる「気分転換」の真意は、まだ紅里には気付かれていない。

(でも、頑張らないと。ここで距離を縮めて、もっと仲良くなりたい) 中学生になった藍花は、不器用と口下手を隠すために、落ち着き払ったように振る舞い、寡黙が生来の気質であるかのように口をつぐみ、元より他人に興味がないふりをしてきた。そんな自ら作ってしまった壁を、軽々と乗り越えて来たのが一年と三か月前の紅里である。出会った直後、いささか大げさな身振り手振りと言い回しで絵を褒められた時は、困惑の方が勝っていたのを記憶している。その後も、舌が回らず受け答えもままならない藍花にも呆れず、根気強く話し掛けてきてくれた。自分のペースで、ありのままを話しても受け止めてくれた。藍花の絵に憧れて入部したと語る紅里だったが、藍花もまた紅里という少女の底抜けの明るさと、真っ直ぐさに憧れるようになって

た。勇氣を出して下の名前前で呼び始めた瞬間も、はじめて二人きりでお弁当を食べた昼休みも、自分から誘って一緒に画材を買いに出かけた休日も、紅里との思い出の全てが、藍花には愛おしく思える。

そうして日増しに好意は大きく育っていき、季節が巡り再びの春を迎えた頃には、その感情に新たな名前を付けなければいけなかった。同性にそのような感情を抱くことが圧倒的な少数派であることも、到底実らぬ想いだということも自覚しているが、それで諦めて捨てられるような類のものでもない。

(紅里ちゃんのお陰で、部内で話せる人も増えたけど、みんなと遊ぶのも楽しいって思えるようになってきたけど……やっぱり二人きりは嬉しい。浴衣の紅里ちゃんを独り占めして、手も繋いじゃって、くっついて……っ!!)

分の悪い賭けに違いなかったが、それでも恋に揺られる少女は必死だった。勝手な妄想を繰り広げては、ベッドの上で悶え転がるその姿は、自分でも無様に思えたが止められない。

しばらくそうした後に、藍花は自身のスマートフォンを睨む。起動されたメッセージアプリには、「明日楽しみだね」と他愛のない文字列が下書きのまま放置されている。送り先は当然、この日部活がなく会うことの叶わなかった紅里だ。電子の上でのやり取りならば、舌を噛むこともなければ、朱に染まった顔を覗かれる心配もないのだが、いつだって送信ボタンを押すのには時間が掛かった。

「……あつ、紅里ちゃん返信早いな。ふふっ、嬉しい」

なんとか震える指先を動かしてから一分もしないうちに返信があった。明るくて活発な性格の紅里であるから、絶えず電子機器を眺

める姿が想像し難いが、それも新たな一面なのかもしれないと微笑む。そして何より、すぐに反応があったことが、大切に思われているという事実が藍花の頬を緩ませていた。

『今年最初の花火なのですごく楽しみです！ 楽しみすぎて、このあいだ新しく買った浴衣を試しに着ちゃいました！』

そんなメッセージと共に送られてきたのは、赤色を基調とした浴衣に身を包んだ紅里の自撮り写真。それが映し出された液晶画面に、藍花はしばらくの間釘付けになっていた——心が好きで溢れていく。

(……明日は、お腹のことなんか忘れて、いっぱい楽しめたらいいな)

そうして、苦しくも心地良い鼓動を感じながら、藍花はお気に入り入りの熊のぬいぐるみ思い切り抱きしめた。大好きな人にそうできる日のことを夢見て、少女は恋に焦がれていく。

* * *

そうして藍花にとっての待望の日が訪れた。天候は花火の打ち上げに何ら支障を感じさせぬ晴れ模様。数日前には台風接近の報もあったが、幸いにも暴風は海へ逸れて去っている——連日吊るしたてるてる坊主の威力を思い知る藍花であった。子供じみて無為なこととは頭のどこかで理解していても、予報を耳にして涙すら浮かべていた藍花は、藁にも縋る想いだっただけだ。

藍花は、はやる気持ちが全面に押し出された軽やかな足取りで進んでいった。写真では見た紅里の浴衣姿を一刻も早く目に焼き付けたかった……そして、この日のために新調した、淡い青色の浴衣に身を

包んだ自分の姿を、早く紅里に見てほしかった。動画サイトで何度も手順を確認し、完璧に着付けた浴衣姿である。前髪を留めている星の形をあしらったヘアクリップは、紅里から誕生日にプレゼントをされた宝物。平素は敢えて前髪を降ろし、人と目が合うのを避けようとする重度の人見知りを抱えた藍花だったが、今日は恋焦がれるその人に、少しでも可憐な姿を見せたかった。

(……ちよつと、下駄は歩きにくいかも。いつものサンダルでもよかつたかな。気合入れすぎ、だよね)

凝視すれば、その相貌には自然に見える程度の化粧が施されているのが分かる。ファッションに疎い藍花はその術を知らず、わざわざ年の離れた姉に頼み込んだほど。元来の愛らしさをより一層美しく着飾ったその姿は、まさしく晴れの日に相応しい。

紅里との待ち合わせ場所までは、通学に使うのと同じ急行電車に乗って十五分ほど。駅前のような人々の行き交う場所を、普段の地味で簡素な私服とは対極にある姿で歩くのは、藍花にはいささかの抵抗と緊張があった。楽しみなのは間違いなく本心なのだが、駅舎に入っていく、改札をくぐり、電車に乗り込むまでも、心の隅には不安が募っていく。目を見てお話しができるだろうか。紅里にとっても楽しい思い出にできるだろうか。背丈は低くとも、引つ込み思案であろうとも、年上としてリードしなければという自負もある。喉の渇きは、きつと夏の蒸し暑さだけが原因ではなかった。

(っ、大丈夫……ちゃんと道も出店の配置も調べてあるし、誘った時には紅里ちゃんも嬉しそうにしてたし、楽しんでくれるよね)

胸の内に棲みついた否定と逃避を追い払っているうちに、藍花を乗

せた電車が走り出す。華奢な少女は、揺れに耐えるべく、汗の滲んだ手で目の前の金属棒を握り締めた。

グルルッ……キュルルルッ……

少女の奥底で不快が蠢いている。ただの感覚の世界の出来後でなく、確かにそこに質量がある。捻じれて、かき混ぜられるイメージが幾重にも脳裏に浮かぶ。始まりはいつも小さな違和感に過ぎない。それをよく理解している藍花にとっては、戦慄を禁じ得ない予兆であった。

ギユウウウ……グルルッ……グルルッ……

(っ……やだ……こんな時に、来ちゃったかも……)

色鮮やかな布地に包まれた下腹の内で揺れ動くものがある。不快の一言で片づけられた感覚が、次第に刺すような痛みへと変わっていく。

ギユルルルルッ……グルルルルグピィィィ……ッ!

「っ……あつ……」

(ううう、お腹痛くなってきた……下痢しちゃってる……っ!)

痛みが、消化管の鳴動が、強烈な欲求を伴うようになるまでそう時間には掛からない。理知ある思考が、瞬間間に出したい茶色と恋しい白色で埋め尽くされる——幾度経験したとしても慣れることのできない下痢の症状が、走る列車の中の藍花に襲い掛かっていた。

(はああ……家では出てくれなかったのに……花火中にお腹痛くなったら嫌だから、お昼ご飯の後も、出掛ける前もトイレに籠って、それでも出なかったのに……っ)

日常茶飯事といえど、ままならぬ大小腸に文句を言いたい気分であった。昨日は下校中の腹痛を皮切りとして、夕食後にも緩んだ大便

を排泄し、風呂の後には清めたばかりの尻から下痢便を吐き、ベッドに入ってから腹痛に叩き起こされている。そのようにピーピーに下った反動なのか、この日のお腹は異様なまでの静けさを保っていた。大事なお出掛けの最中に下しては困るから、排泄を試み何度も息を切らして緊張したものの、その成果は一日分には到底満たない僅かな欠片のみ。ならばせめて、このまま落ち着いたままでいてくれたらと願ったというのに、結局緊張のせいで下してしまっただようだ。

(……でも、藍花ちゃんに会う前でよかった。浴衣姿だし、できればしたくなかったけど、知られずに済むなら……)

しかし、腹の内に爆弾を抱えながらも、藍花は内心安堵していた。今ならば、想い人に知られることなく排泄を済ませられると。一人であれば、急激に高まる便意に震え、差し込む痛みを眉を傾けるのも、藍花にはありふれた日常に過ぎない。ちょうど中間の駅を通り過ぎたばかりの電車が、目的地に辿り着くまでは約十分。日々の通学の中で、何度も壊れたお腹のリズムで測った時間だから、その長さは体に刻み込まれている。

グルグルギユルギユル……ッ!! ピィーッ、ゴギユルル……

(……これぐらいなら、大丈夫。いつものことだから……っ)

瞬く間に顔色は蒼白へと変わった。眉間にできた谷に汗が流れ込み、唇が固く引き結ばれていた。さりげない仕草でさする下腹は、少女の期待に反し不気味に唸り続けていた。いくら「いつものこと」と胸の内が強がったところで、一刻も早く便器にありつく必要があるのは事実。各駅停車ならば止まっていたであろう駅のホームを、恨めしそうに藍花が睨む。

「はああ……っ……ふうう……っ……」

耐える——控えめにしたはずの摂食の成れの果てが、十分な消化と吸収を経ないまま、藍花の尻のすばまり目掛けて殺到している。耐える——理性を押し流さんとする大波は、もう何度目かも分からない。ただ、寄せる度に足の親指で床をえぐって耐え続ける。

(うんちしたいっ、お腹痛い……ううう、本当に調子悪いかも……っ)
 そうして我慢を言い聞かせるうちに、藍花は小さな右手を当てた帯の下の、肌の奥の有様を理解する。その蛇腹の管の内はどうしようもなく下痢だった。ピーピーの下痢。耐え難い下痢。授業中であれば、既に手は挙がっているであろう酷い下痢であった。

「ふううーっ、ふっ、ふうう……っ」
 (がまんっ……もうちよつとで着くし……大丈夫)

とはいえ、目に映る窓の外の見慣れた景色が、然るべき場所までの距離を教えてくれる。通学では通過点に過ぎない目的地だが、何度も途中下車をした／せざるを得なかった駅だ。トイレの配置も個室の数も頭に叩き込まれている。この狂おしい欲求と折り合いを付けるのに、そう難しいことはない……はずだった。

『只今百福駅で非常停止ボタンが扱われたため、緊急停車をいたします。発車までしばらくお待ちください』

レールの上を走る車両とはいえ、不測の事態は避けられないことは藍花も理解をしている……理解はしているが、今絶対に起きてほしくないことが、起きたのだと車内アナウンスが告げている。

(う、うそっ……電車止まって……やだ、なんでこんな時に……っ！)
 一人でも多くの人を運ぶことに特化した通勤型車両にトイレなど

あるはずもなく、時にそれは少女の尊厳を葬る鉄の棺桶と化す。

グギュルルルッ!! ゴロロゴログウウウッ!!
 「はうっ……ううう……っ」

そんな事情などお構いなしに、膨大な量の泥が雪崩れ込み、痛みと欲求となって炸裂する。いつだって下痢は藍花を容赦しない。寝坊として遅刻寸前で学校へと駆けていた朝でも、家族旅行で巻き込まれた渋滞の車中でも、中学受験の第一志望の試験中でも、構うことなく下ってしまうどうしようもない消化器官を抱え、それに縛られる。だから、今更折ったところでどうしようもないことは分かっていた。
 (ううう……早く動いてくれないと、わたしっ……)

そして、激流の中でどれだけもがいても、いずれ力尽きる時が来ることも、藍花はよく理解している。自らの経験として、刻み込まれている。

ギュルオオオオーッ、ギュルギュルルルウウウッ!

停車した車両が動き出すまで十分もの時間を要した——地獄のような十分間であった。痛みが這い回る腹を抱え、重圧からの解放を求めてひきつく肛門を締め付け続けるのは過酷なことだ。

ぷすっ……ぷすすすっ! ぷしゅうう……っ!
 (だめ、だめっ……おならがまんでできないっ……やだああ)

藍花は放屁を抑えることすらできなくなっていた。してはいけないと理性が叫ぶが、結局猛烈な腹圧に負け、尻穴がこじ開けられ、ぷすぷすとガスを漏らしてしまう。悪臭に顔をしかめる者は数あれど、華奢な少女を着飾る浴衣の下で、かのような品性を欠いた器官があると

は誰も想像できはしないだろう。

(ううう……出ちやう、だめっ……我慢……がまんしないとっ……!)

焦らすようにゆっくりと速度を落としてゆく車両の窓越しに、ホーム上の階段を凝視する——一気に駆け上がり、右に曲がつて数十メートルを突き進み、二つに分かれた入口の一つに飛び込み数歩——便器までの道のりを絶えず思い描かずにはいられない。

(っ、着いたっ……トイレ、トイレ、トイレええ……!)

扉が開くと同時に藍花は飛び出した。混雑したホームで人を押し退け、情けの無いへつぱり腰で駆けて行く浴衣の少女は、多くの奇異の視線を集めたが、最早気に掛けている余裕などなかった。今は一刻も早く、大便がしたい。下痢を出したくてたまらない。

「はあっ……はあっ……はあああっ……!」

暴力的に叩かれ続けるその扉に全力を注いだまま、一秒でも早く長い階段を駆け上がらねばならない矛盾。慣れない浴衣と下駄が一層藍花の体力を奪っていく。無様に広がった鼻孔に、その吐息の荒々しさが如実に表れていた。

「はああっ……はああっ……ふううっ……!!」

辛うじて踏み外さずに、半ばでしゃがみ込んで理性と着衣を台無しにせずに登りきった。後は平坦な道を突き進む。

そうして藍花は辿り着いた。真新しい制服に袖を通してから一週間もしないうちに初めて途中下車をした時には、首をあちこちに振って必死に探した場所だが、今では慣れ親しんだ場所である。

(トイレ着いた……うんちできるっ! お腹痛いのもう限界っ!)

焦点の合わぬ目で赤い人型を見据えると、藍花は歩調を速め入口に

差し掛かる。待望の時を迎え、心も体も先走り、排泄孔がひくついている。あとほんの十数歩でうんちができる——そう確信していた。

(えっ……う、うそでしょ……っ!!)

その場に駆け込んだ藍花を阻んだのは、片手では数え切れぬ人の壁であった。目の前には個室の数も十分にあるのだが、それでも藍花の順番までは相応の時間を要するであろう長蛇の列である。見れば彼女と同じく浴衣姿の女性も多かった——ここは花火大会会場への最寄り駅なのだ。冷静に考えれば、混雑は何ら不思議なことではない。

(……すごい並んでどうしよう、でも外の多目的トイレも使ってたし……が、我慢しないとっ! だいたいようぶ、個室の数は多いから、すぐに順番が来るから、だから……っ!)

グウウウウウゴロゴロゴボボボッ!!

「はあっ……あああ……っ」

全身の力を奪ってゆく重たい痛みが突き刺さる。腹の内の灼熱を出してしまいたいと本能が叫んで、限りある理性を摩耗させていく。水の流れる音が、扉を透視するかのよう想像してしまふ白い陶器が、少女の欲求に拍車を掛ける。

ブスツ……ブスブスツ……ブススツ!

(トイレ……トイレトイレといれっ! おねがいはやくしてっ!!)

ちようど浴衣の帯が走るところ——地響きのごとく鳴動の止まぬ下腹を抱え、苦痛にひしゃげた相貌を晒す藍花に憐憫の視線が向けられていた。もう誰が見ても、そこにいるのは下痢をしまった哀れな少女でしかない。破滅的に腹は下り、緩み崩れた大便を一秒でも早く吐きたいというのに、まだ便器にはまだ辿り着けなかった。不幸な

体質に、不幸な偶然の重なった結果はいつだってこうだ。

(だめっ……おなかないっ！ 下痢のうんちがしたい、げりががま
んできないっ……うんち、といれ、うんち、おといれっ!!)

そして、数々の危機を乗り越え、幾百幾千の正しく行為を果した
記憶があろうと限界というものはある。色鮮やかな布地に包まれた、
少女らしい丸みを帯びた双丘が剣舌に震え、その臨界点を現示する。

ギュルルルグルルルウウ……グビィィィーッ!!

(やだっ、やだっ、やだあ……こんなところで、せっかくのおでか
けなのに、ゆかただって、だいなしになっちゃう——でももうだめう
んちでる、げりのうんちがでちゃう、うんちがしたいといれっ!!)

有無を言わせぬ痛みが走る。もう藍花には抵抗する術は残っていな
かった。脚から、尻穴から少しづつ力が抜けていき、痛みも欲求も溶
けて分からなくなる。

(うんちが、げりが、でちゃうっ——)

「あの、大丈夫ですか？ もしも具合が悪いようなら、先に入ってい
いですよ」

本能に飲まれ、汚辱に墮ちる一歩手前であった藍花に光が差し込ん
だ。無心に進むうちに列は残り二人になっているどころか、彼女の尋常
ならざる様子を見て先客が順番を譲ると言っているのだ。

「……っ、あ、すみません、あつ、ありがとう、ございますっ」

予想外の出来事に驚きながらも、息も絶え絶えになりながら、言葉
を紡ぐ。相変わらず目を合わせることはできなかったが、礼の言葉を
正しく告げられたのは、藍花にしては上出来とすら言えた。そうして、
彼女は動きにくい浴衣の裾を持ちながら、一目散に白い陶器へ向かっ

て駆けていく——

ピザッピザッ!

「っあ!? あああっ……!!」

——猛圧に遂に藍花が屈服したのは扉に手を掛けた瞬間のこと
だった。内側に留めたものが溢れて、尻を包む布地をその色に染める。
どうしても我慢することができなかった。そこがトイレだろうと、そ
うでなかつと、藍花の尻はもう下痢を垂れ流すことしかできない。
(もれる、うんちがもれる、もれちゃつてるがまんしないとっ!)

全てが終わってしまう前に、浴衣までを汚してしまう前に、便器に
しがみつくなければならなかった。藍花は灼けた吐息を吐きながら、扉の鍵を
殴り掛ける。血走った眼で眼下の白色を捉えると、すぐさまそこに吸
い寄せられていく。

ピザッ……ピュルッ……ピュルッ……!!

「やつ……あつ、あつ、あああ……!!」

決して清潔とは言い難い和式便器も今は光り輝いてすら見える。柔
肌を炙る灼熱のおぞましさに声にならぬ悲鳴を上げながら、藍花はそ
れを跨いだ。慣れない浴衣を焦燥と混乱に満ちた手付きで捲り上げる
間にも、くぐもった破裂音が響いていた。そうして遂に水色の布を引
きずり降ろすと、そのまま崩れ落ちるかのようにしゃがみ込み、尻が
便器に向かって突き出される。

「ううっ!!」

プリプリプリプリリリリニチチチプリリリリユリユリユビビッ!!

ブボボビビビビビビビチチチビビビィィィーッ!!

その瞬間、藍花の排泄孔が爆発した。膨大な量の茶色が迸り、便器

は瞬く間に肥溜めと化していく。下劣を極めたガスの炸裂と共に、自宅で出せなかった固形便が、消化途上の軟便が、それらを埋め尽くすぐちゃぐちゃに崩れた泥状便が猛烈な勢いで注ぎ込まれていく——ここに至るまでの藍花の受けた苦痛と、消化を司る器官の乱れようを物語る壮絶極まりない下痢であった。

「はああっ……んんんっ……んんううう……っ!!」

ビュルルルルビュルビュルチチブリリリリィィ!!

ドボボボボボジュルルルルッ……ブビビボボボッ!!

這い回る絶大な痛みに汗を噴出させ、乱れた浴衣を濡らしながら、彼女はひたすらに汚泥を吐いた。物静かで小柄な、小動物を思わせる少女には到底似つかわしくない腐臭が漂い、その首は薄く上下の開いた仕切りなどでは遮れず、周囲へ藍花の行為を知らしめていく。

(おトイレっ……間に合った……うんち出るっ、止まんないっ!)

ビチヂヂッ! ブビビビブリュリュリユブビッ!!

ブジュブジュブチヂチィーッ!! ブビビッ!!

「っ……はあーっ! はあ……はあ……っ!」

激流は一度収まったものの、呼吸を整えるには一層の時間を要した。極限を脱した藍花だったが、まだその表情は優れない。万が一にも汚さぬようしっかりと両腕で巻き込んだ浴衣の下では、未だ不気味な蠕動が巻き起こっている——そして、脚を開き尻を晒ししやがみ込むその身が強張るのが再開の合図だった。

「……っ、んんあっ……ふ、ふううううーっ!」

ブリリリリリブリリリリヂヂッ! ブビビィィィッ!!

小刻みに震えていた肛門を、再び大きく開け広げ、藍花はその汗の

したたる尻から溶けた汚物を瀉出させた。壊れてしまった大腸は、消化を放棄した内容を圧送するばかりで、藍花はいっただってその身勝手に支配されることになる。

(もう時間無いのに……早くしないといけないのにつ……!)

ブブブビチビチチチッブビィィィッ!!

下痢は止まらず、便器に縛り付けられ、悲壮と焦燥を顔面に浮かべる藍花。この下り模様は、短時間のうちに落ち着きを取り戻さないであろうことは明らかだった。

お腹の風邪と少女の一日

できずとりん

午前六時半。枕元にある目覚まし時計が大きく鳴り響いた。

ちよっとまだ眠い時間帯だし、同じ五年生の中じやかなり早いほうだとは思っている。もう少し寝ていたい……でもこれ以上寝ていたら朝ごはんが食べられないから、仕方なく起床。

目覚まし時計をとめて、まだ寝ぼけたままトイレに行く。おしっこを済ませて、歯医者さんで教わったとおり、起きたらすぐ洗面所で歯磨き。

部屋に戻るとき、お姉ちゃんの部屋からガサゴソ音がしていたから、多分お姉ちゃんももう起きてる。私も部屋に戻って制服に着替えてから、ダイニングに顔を出した。

「ママ、おはよう」

「おはよう、亜希^{あき}」

この頃には、私もだいぶ目が覚めている。それとは対照的に寝ぼけたままのお姉ちゃんだけど、すでにダイニングで朝食を食べている最中だった。口は動いているのだけれど、目のほうは寝ぼけていてまだ眼そう

「おはよ、お姉ちゃん」

「んー……おはよう、亜希……」

ちなみに何で私の名前が亜希なのかっていうと、お姉ちゃんが美晴^{みはる}だから。春の次に秋。どうやらそういう意味らしい。もうちよっと工夫してほしかったところなんだけども……。

「はい、お待たせ」

「ありがとう」

ママが朝ごはんを運んできてくれた。三人分を一緒に焼いたトースト、それにサラダ、ハムエッグ、牛乳。もう少し後に起きてくるパバの分はママがラップに包んでいるところだ。

ママの出勤時刻はこのくらいで、一方のパバは九時くらい。パバに合わせていると学校には間に合わないから、私達二人はママと一緒にこの時間帯に朝ご飯を食べる。学校にはちよっと早く着いちゃうけれど、友達とも話せるし別に悪いことじゃない。

「ごちそうさま、お先」

先に食べ始めていたお姉ちゃんは、牛乳を一気に飲み干すとお皿とコップを流しに置いて出て行った。朝のニュースを見ながら、ママと二人で朝食を食べる。

十五分くらいで朝ご飯を食べ終わって、洗い物はママに任せて私は部屋に戻る。階段を上ろうとしたとき、ちょうどお姉ちゃんが下りてくる場所だった。少し焦った様子。

もしかして、と私は覚悟を決めた。

「ごめん亜希、ちよっとトイレ、長くなっちゃう……」

「……ううん、いいよ。気にしないで」

高校生のお姉ちゃんは、お腹があまり丈夫じゃないみたいだった。お姉ちゃんが中学に上がって、生理っていうのが起こってから、月に何日か、お腹の調子が悪いみたい。私も再来年くらいには、そうなるかも……と思うと、ちよっと怖い。

とりわけ朝のトイレは、どうも調子が悪くなるみたいだった。少し慌てた様子で、お姉ちゃんはトイレに駆け込んでいく。

「ん……ふうーんっ……」

ぶちちちっ、ぶりゅぶりゅぶりゅ……びちびちっ！

下痢ピーっばいトイレが始まった。普段なら五分くらいで交代してくれるけど、こうなったらとっつっても長い。最低でも十五分、下手をすると三十分くらいトイレから出なかつたこともある。

でも、朝ご飯を食べた後だし、私だつてうんちがしなくなつてしまふ。私の場合は食べ終わつてから大体十分くらい経つとトイレに行きたくなつて、あまり長くは我慢できない。このままお姉ちゃんが出てくるまで待つたら、漏らしちゃうかもしれない。

と、いうわけで、私とる方法は一つだけ。

「ちよつと早いけど、行ってきます」

「あら、もう？ ……つて、なるほど、大変ね……。そうだ、今日お母さんはお仕事午前中だけだから、夕飯作れるけど……何が食べたい？」

「うーん……じゃあ、ハンバーグ！」

「わかつたわ。行ってらっしゃい」

「行ってきまーす」

朝ご飯を食べ終わつてすぐだったけど、私は学校に向かう。家から学校までは、十分くらいかかる。学校でうんちするのはちよつとだけ恥ずかしいけど、早起きしているおかげで、そもそも学校に友達がほとんど来ていないから、大丈夫。

もちろん、友達と会つちやつたことがないわけじゃないけど……で

も別に、お腹が痛い訳じゃないから、ちよつとくらいなら聞かれたりしても平気。

なんだけど……

ゴロゴロゴロ、ぎゅるるるる……

「……あれ、お腹、いたくなつてきちゃつた……？」

学校でうんちをするつもりだったけど、家を出てすぐのところでお腹が痛くなつてきちゃつた。今から家に戻つてトイレ……つてだめじゃん。お姉ちゃんが使つてる。

さつきよりも、うんちがしなくなつてきた、程度の状況だから、学校まで行けるはず。学校までは十分くらいかかるけど、それくらいならどうにか我慢できるかな。

そうと決まれば、早く学校に行かないと。あんまり時間がかかると、学校につく前に限界に達しちゃう……。

ぎゅるぎゅるぎゅるぎゅるぎゅるっ！

あ、ちよつと待つて、また急に……思つたよりも、お腹があつという間に下つている。これ、学校までなんて我慢できないかも。

家に戻つてもトイレは空いてないし、どうしようかと思つたけど、そういえばここから少し歩いたところにコンピニがあつたはず。コンピニならトイレが借りられるから、そこまでだったら、我慢できるはず。

コンピニまでは百メートルもないくらい。少しだけ便意が収まつてきたので、今がチャンス。他にもランドセルを背負つた子がいて、その流れを抜けるのは「トイレが我慢できないんです」つて宣言しているみたいで少しだけ恥ずかしい。

コンビニの中に入りさえすれば、もう私のほうを見ている子もいない。店員さんを見つけて、一言。

「すみません、トイレ貸してください」

「はい、あちらの奥にありますので、どうぞ」

頭を下げて、そのまま店の奥のほうへ。すぐにトイレが見えてきた。でも、だれか並んでる。ランドセル背負ってるから、同じ学校かな。

「あれ……亜希ちゃん？ おはよう」

「美里ちゃん。おはよう」

同じ学校どころじゃなくて、同じクラスの女子だった。美里ちゃん、前の席替えて隣の席だった子だから、今も割とよくお話しする。

「亜希ちゃんもトイレ？」

「うん……美里ちゃんも？」

「うん。……亜希ちゃん、顔色悪いけど、大丈夫？」

お腹が痛くてコンビニに入ったから仕方ないけど、体調悪いのに気付かれちゃった。お腹壊してうんちがしたいの、できれば恥ずかしいから知られたくない。

でも、うんちはしたいから……美里ちゃんの後ろに並ぶしかない。

「本当に大丈夫？ もしお腹痛くてウンチしたい、とかなら先に入っちゃってもいいよ？ 私もウンチだし、時間かかっちゃうから」

「……えーと、その……」

そんな私を見かねてか、美里ちゃんがやさしく提案してくれた。このトイレは一つしかないから、美里ちゃんがうんちしてる間、ずっと我慢しなくちゃいけない。お腹が痛い私にとって、それはちよっと厳しい感じがする。

でも、美里ちゃんに「お腹が痛い」って言うのはやっぱり恥ずかしいよ……。友達にうんちがしたいのを知られるのも嫌だし、下痢ピーのうんちの音も聞かれちゃうし。

グルグルグルッ、ゴロゴロピーーッ!!

で、でもだめ、うんち漏れちゃう……っ!!

「ごめんね美里ちゃん、わたし、お腹痛くてうんちしたいから、先にトイレ入ってもいい……？」

「うん、いいよ」

「ありがとう!」

美里ちゃんに前を譲ってもらって、トイレの前に。ドアは閉まっているから、誰かが入ってる。

グギルルルルルルッ、グウウウーッ!!

トイレを見たら、もっとうんちしたくなっけきちゃった。男女共用のトイレだから、怖いおじさんが入っていたら嫌だけど……早く出てきてもらわないと漏れちゃう。

「すみません、まだかかりますか……？ うんち、したいんです」

「あ、はい!! もうすぐ出ます」

てっきり男の人かと思ったけど、入っていたのは女の子だった。しかも、すぐに出てくれるみたい。やっとうんちできる……。

扉から離れて待っていると、少し経ってジャーつと水が流れる音がした。鍵がガチャッと空いて、出てきたのは制服を着た女の子。お姉ちゃんよりも年下みたいだから、中学生かな。

「あ、ごめんね」

「ううん、ありがとうございます」

個室が開いたから、トイレに入る。便器がちよつと遠いから、ちゃんと鍵を閉めたのを確認してからトイレのほうへ。漏れそうなのに、便器の蓋が閉めてあるのがもどかしい。

でも、蓋が閉めてあつた理由は開けたらわかつた。

「うんち、してんだ……」

鼻を突くような、ちよつと強い臭い。朝のお姉ちゃんみたいにお腹が痛かつたわけじゃないと思うけど、うんちしてみたい。朝だからうんちしたかつたのかな……。

うんちしてたところを急かしちゃつたのは申し訳ないけど、私もうんちがしたくて、しかも下痢ピーだから許してほしい。パンツを下げて、少し大きい便器に腰かけた。

「んうう……ふうっ、んっ」

ニチチチチッ、ぶちゅぶちゅぶりゅりゅっ!!

お尻の出口で蓋をしてくれた、普通のうんちが出る。でもいつもより量が少なくて、代わりに緩めのうんちがたくさん。

間に合つたのは嬉しいけど、まだお腹が痛いのは治らない。最近はずりになることもなかつたから、お腹の下の方が痛いこの感覚はずごく久しぶりだけど……あつ、出るっ。

ブチブチブチブチドボボボッ!! ブビュッ!!

「はあつ、んあああつ、つぐう……」

お尻の穴を、あつい液体が一気に通り抜けていった。うんちがしたい、って思う暇もなく、お腹の奥のほうからものすごい力で下痢のうんちが押し出されていく感じ。

結構うんち出したと思うけど、トイレからは出られない。うんちが

したいという感覚だけが強くて、息んでいるんだけれど、ほとんどうんちが出ない。お腹の下の方も痛い。

少しの間、両手でお腹をさすっていると、違う感覚に襲われた。さつきと同じで、お腹の奥から何かが出そうな感じ。

ビチビチビチビチブウーッ!! ブウウウッ。

ブリリイッ、ブウーッ、ブリュブリュブリュブリリイッ!!

「んぐああ、ふううん……っ、はあつ、でたあ」

まだ結構な量のうんちが出たけど、そのおかげでお腹が痛いのは治まつてくれた。これ以上うんちが出そうな感じはなくなつたから、早くトイレから出ないと。

コンピニのトイレは新しく、ウォッシュレットがあつた。「おしり」を使えば、紙をとるのは一回で済む。

立ち上がりつつパンツをはきながらトイレの中を見ると、茶色い水でいっぱいだった。あんまり見ていたいのじゃないから、蓋を閉めて水を流した。さっきの人の気持ちがよくわかる。

トイレを出たら、美里ちゃんが待つていた。少しモジモジして足を交差してるから、ずつと我慢してたんだ。もしかしたら、うんちが漏れそうだったのに我慢させちゃつたのかも。

「ごめんね美里ちゃん、ありがとう……ちよつと、臭いかも」

「うん、大丈夫だよ」

そういうと、美里ちゃんは私が出てきたばかりのトイレに入つていった。せっかく会つたんだから、学校まで一緒に行くのも良いかもしれない。ちゃんとお礼も言いたいし、ね。

トイレの扉の脇に避けて、美里ちゃんが出てくるのを待つ。

「ふうっ、んう………んっ」

ふうっ。にちちちちち……ブチチチチチブッ！

鍵をかける音がして、すぐに美里ちゃんがりんちをしはじめた。私が入っている間ずつと我慢させちゃったせいかな、すぐに出ていた。でも、私みたいに下痢ピーじゃなくて、ちゃんと形のあるバナウンチみたいだ。

っていうか、普通のうんちでも、外にいてこんなに音が聞こえてきちゃうんだ。私は下痢ピーのうんちだった分、もつと音が大きかったから、もしかすると私の音も全部美里ちゃんに聞こえちゃったのかな……。ちよつと恥ずかしい。

聞かないようにしてあげよう、って思っていたけど、美里ちゃんのうんちは思ったより長くて多量だった。

「……っ。ふうんっ、くっ………ふうーっ」

ブリュブリュッ。ぷりりりっ……ブチュブチュポチャンッ！

うんちの音が更に三回くらい聞こえて、それからやつと息を吐く音がした。美里ちゃんは随分いっぱいうんちするんだね。普段の私の倍くらいじゃないかな……。量も多いからうんち我慢するのも大変だっと思うのに、私のために我慢してくれてたんだ。

ウオッシュレットは使わないタイプみたいで、それからすぐ紙を取る音が聞こえた。そっか、下痢ピーなわけじゃないし、お尻が汚れていないからウオッシュレット要らないんだ。

少し待っていると水が流れる音がして、美里ちゃんが出てきた。私が出て、少し驚いたみたい。

「あれ、亜希ちゃん……あ、もしかしてまたトイレ？」

「え？ あ、うん。せっかくなから、一緒に学校行かない？」

「あつ、そういうことか、なんだ、ビックリしたあ……。うん、いいよ、一緒に行こう！ ……亜希ちゃん凄くお腹下してたから、待たせちゃったかと思ったよ」

「違う違う……あ、でも、もしかして、下痢ピーの音もだいぶ聞こえちゃった？」

「あ、うん……ごめんね、聞いてちゃった」

「いいよ。お腹痛いつて言っちゃってるし。むしろ、うんち我慢させちゃってごめんね」

「大丈夫。ちゃんと間に合ったから」

やっぱり、聞かれちゃってたんだ。本当は恥ずかしいけど、トイレの順番譲ってくれんだし、しょうがないよね。

「それじゃ、学校行こうか」

「うんっ」

二人で並んで、レジのところにいる店員さんに声をかけた。ちよど、私がトイレ借りますって言った店員さんと同じ人。

「トイレ貸してくれて、ありがとうございます」

「私も……ありがとうございます」

「あ、はい、どうも」

トイレを借りたときは何かを買うのがマナー、って前にトイレを借りたお母さんが言ってたっけ。でも学校にお金は持って行っちゃいけないから今はお金がないし、挨拶するだけでもいいよね。

いつも一人の通学路だったけど、久しぶりに友達と一緒に登校するのは、とても楽しかった。



朝の会は、定刻通りに始まった。でも、教室にはいくつか空席がある。一人はよくお話をする女の子だった。

「今日は野島君、相羽さん、水川さんがお休みです。冬になって、風邪が流行っているようですから、皆さんも気を付けてください」

先生は最後にそう告げると、朝の会を終わりにした。配られた保健よりも、風邪を予防する食べ物書かれている。

「……水川さん、昨日、トイレで……」

「ね……きつと、お腹の風邪……」

「相羽さんも、ちよつとお腹の調子がつて言つてたし……」

ガヤガヤうるさい教室だったけど、女子たちが集まって話をしてるのははっきりと聞こえてくる。話に上がっていることは、確かに事実だった。でもきつと、今日休んでた子たちがお腹壊したのはたまたまで、普通の風邪だから別にお腹の風邪じゃないよ。私だつて今日は下痢ピーの日だけど……まさか、私までお腹の風邪引いちゃったなんて、そんなのありえないし。

少しの嫌な予感を遮るように、私は算数のプリントを出した。

またお腹が痛くなつたら、なんて思つていた私だけど、午前中の授業の時は別に何ともなかった。四時間目が終わつて、給食を食べ……でも、それがまた悪かつたのかもしれない。

ギョルギョルギョルギョルピーーッ!!

お昼を食べたせいとか、朝みたいにお腹が痛くなつてきた。すぐにもちもしたくなつてきたし、早くトイレに行かないと。つて、思つてたら、美里ちゃんとはつたり会つた。

「あ、亜希ちゃん……お腹、大丈夫？」

「え？ あー、うん、あんまり……」

「そっか。もしかしてウンチしに行くところだった？」

「んーと……うん。うんち、またしたくなつちやつたから」

うんちしたいつて見抜かれちゃつて、どう答えるか悩んだけど、正直に言つちやつた。どうせ朝の一件でバレちゃつてるし。

でも、意外なのはその後の返事だった。

「まだ、お腹痛いの？」

「うん……朝のときと、変わらない感じかな」

「そっか。朝も同じタイミングだったから、やつぱり昼も同じタイミングなんだね……。私は別にお腹緩いわげじゃないけど、私もウンチしてきたとこなんだ。それじゃ、お大事にね」

「あ、うん……ありがとう」

美里ちゃんも、またうんちしてたんだ。たしかに、次にうんちがしたくなるまでの時間つて、他の子と変わらないのかもしれない。それにしても、朝と一緒に健康なうんちなのかな、羨ましいなあ。

美里ちゃんと別れてから五年生用のトイレに来たら、どうやら中で話し声がする。物陰に隠れながら、中をうかがつた。

「んっ……ううっ」「いたい、はあ……」

ブチュブピビツ、ピチピチッ!! ……ブリリリブウッ!!

トイレに個室は全部で四つある。一番奥だけが洋式で、それ以外が

全部和式。閉まっている個室は、一番奥とその隣だった。二人とも、たぶんお腹を壊してうんちをしている。

トイレで話をしているのは、二人組の女子みたいだった。

「えー、私やだよ。こつちがいい」

「私だってやだよ。下痢ピーの隣とか下痢ピーがうつりそう」

「学校で下痢ピーのウンチするなんて信じらんない」

空いている残りの個室のうち、どちらを使うかでもめているみたいだった。ただその原因は、ほかの個室でうんちをしているから。誰だった、お腹が痛くてうんちがしたいこともあるじゃん……でもそんなことは、頭にないみたいだった。

個室でうんちをしている二人も、うんちが我慢できないってことは本当にお腹が痛いんだろうな。

グギョルルルルゴロゴログウーッ!!

うんちがしたくてこのトイレに来たけど……入りたくなかった。空いているトイレに入っとうんちをしたら、きつとあの子たちにバカにされる。私たちは何も悪くないけど、何かされたりしたらもつと嫌だ。しようがないから、私は女子トイレから出てきた。出てきたけれど、

どうしよう……このトイレは使えないけど、ほかの学年のトイレは使えない。六年生のトイレはちょっと怖いし、下級生のトイレを使うのも、何か恥ずかしい。

あと、学年関係なく使えるトイレといえば、体育館のトイレだ。個室は少ないけど、だれも使う人がいないからきつと空いている。あそこなら、うんちができるはず。

グルゴロゴロゴロゴロゴロピーーッ!!

本格的にうんちがしたくなってきたから、早くトイレに行こう。階段を下りて、昇降口のほうに出て、その隣にあるのが渡り廊下。外は寒いけど、渡り廊下を通れば体育館がある。トイレは、入り口を入ってすぐの脇にあるのだ。

「……うう」

ぎゅるぎゅるぎゅる……ぎゅるるるびーっ!

ピンク色の女子トイレの扉を開けようとしたとき、またお腹が痛くなってきた。うんちが出ちゃいそう……我慢、しないと。

ぎゅるるるるっ……ゴポポポポポッ。

はあ、うんちの波が、少し引いてくれた。今のうちにトイレに入っで、早くうんちしないと、今度は漏れちゃう。

改めて扉を開けた。うんち間に合っ……

「うそ、閉まつてる……?」

トイレが、空いていない。青じゃなくて、赤いマークが出てる。誰かが、先にはいっちゃつてる……。

何かの間違いじゃないかな。個室のドアに近づいて、扉を押してみ……開かない。本当に誰か使ってるんだ。

うんち、できると思ったのに……だめ、お腹痛くて、めっちゃ下痢ピーなのに、このままじゃ漏れちゃいそう!! ノックして、出てきてもらわないと。

「あの、まだかかりますか?」

「お腹が痛くて、入ったばかりなので、少しかかります……」

ピチピチピチピチッ、ブリュブリュブリュブウーッ!!

中の子は、そう返事をして、すぐに物凄い音で下痢ピーのうんちを

し始めた。誰にだつてわかるようなお腹を壊しているときのトイレ……時間がかるような気がした。

このトイレはすぐ空きそうにないから、他のトイレに行かないと……と思うけれど、もう動けなかつた。

ゴロゴロゴロ、ぎゅるぎゅるぎゅるびーっ!!

うんちがしたくてしょうがない。少しでも力を緩めれば、お尻の穴からうんちが漏れちゃいそう。こんな状態では、階段を上がらなきゃいけない五年生のトイレはおろか、一階にある一年生のトイレにすらいけない。

早く、早く、うんち出ちやうよお……。

ぶびっ、ぶぶぶーっ……ぶりっ!!

うんちが出そうになつて、慌てて両手でお尻を抑えた。他に誰もいないから、こうやって我慢しても恥ずかしくない。というか、こうやっていないと我慢できそうにない。

お尻の穴を、熱いおならが抜けていく。うんちとは違う感じだけど、やつぱりものすごく臭い。お腹を壊している時特有の、少し酸っぱい感じのやつだ。

でも、おならじゃなくてうんちが出ちやうのもこのままじゃ時間の問題だ。本当に我慢できそうにない。

お願い、早く出てください……。

「んうっ、はあっ、んう、つぐう……」

ブリュブリュブリュッ! ピチピチピチ……プリブウッ!!

祈るように前のトイレを拝んでみたけど、まるでうんちの音が止まる気配もない。朝学校に来るときにコンピニのトイレで下痢ピーのう

んちをした時のことを思い出す。なかなかすつきりしないのが、手に取るように分かつた。

うんちが止まらないのは私にもわかるけど、待っている人のことも考えてよ!! 私だつてうんちがしたいの、おんなじ下痢ピーなんだから、お願いだよ……。

ごろごろ……ギルギルゴロゴロピーーッ!!

うんちがしたかつたところへ、また大きな波が来た。だめ、しゃがんだらだめ、絶対に立ち上がれなくなっちゃう……。

和式トイレに入ったら、しゃがめるのに。洋式トイレに入ったら、座つていいのに。立つたまま我慢するものつらいし、もう本当に漏れちゃいそうだよお。

ブッ!! ……ぶりりっ、ぶびっ、ぶうっ!

お尻が熱い。うんちの波を追い返すときに、少しずつおならが出ちやつて我慢できない。おならをすれば、周りは臭くなるけど少しだけお腹の中が楽になる。朝のトイレと同じだ。私がつんちをしている間、よくお姉ちゃんはトイレの前で我慢しながらおならをしているときもあった。

ぶっ。ぶりりっ。ぶうっ……プリリリッ!

でももう、お尻の穴の近くまでうんちの感じが近づいてきているよ。うな気がする。おならが出ちやつても、臭くなるだけでもうお腹の中が楽にならない。どれだけ頑張つても、うんちがしたい気持ちが全く消えていかない。

お腹が痛い。うんちが漏れそう。

もう、我慢の限界が近い。

トイレが空かないと漏らしちゃう。もうだめっ。

「お願いです、うんち漏れそうなんです、代わってください!!」

「下痢のウンチが、止まらなくて……もうちよっと……」

ブリリリユツ、ブビツ、プウウウツッ! おびいっつ!

「私だって、下痢ピーなのに、そんなの……」

だめ。全然うんちが止まらないみたい。ずっとうんちしてる音がする。うんちできるの、ずるい。私だってお腹痛くて、下痢ピーのうんちずっと我慢してるのに。

ギルギルギルグルグルゴロゴロゴロピーーッ!!

あっ、うんちまたしたくなってきた。トイレ行きたい。うんち漏れそう。早くしゃがんでピーピーのうんちが出したい。うんちしたいよっ。トイレなんで空かないの。うんち漏れちゃうよ。下痢ピーだからもう我慢できないよっ。うんちがしたいっ!!

ゴボポポポポギルギルギルグウウウツッ!!

ブツ、ブリティ、プブツ、ブビビツ!! ぶうー……

うんちだめ、まだがまん、だめ、うんちしたいっ、あかないっ、うんちもれそうっ、だめ、うんちが、げりピー、うんち、したいよっ、うんち、うんち、うんち、でちゃううううっ!!

ブリティ……ブチュブビツ、ビチビツ……ブリティッ!

うんち、ばんつのなかにしちゃった……?

あったかい、げりのうんちがたくさん……。まだ、でる……。

ブリリリリッ。ブボポポオツ……ぶちゅぶりぶりっ。

頭の中がうんちすることっていつぱいになっちゃって、とうとう、うんち我慢できなかつた。だんだん頭の中から我慢するということが抜

けてきて、少しだけ冷静になる。

うんち、しつかり漏らしちゃった……トイレ、空かなくて、我慢できなかつた。うんちまだ出そう……これ以上お漏らししちゃだめなのに、身体が勝手にうんちを息んじやう。

ブリリリ、びちびちびちっ。ぶぶうっ。ぶちゅぶぼっ。

「んっ……ふうんっ……」

トイレの中にいるときと、あんまり変わらない気もしてきちゃう。トイレじゃない場所で、トイレをしてしまった。だんだんそのことが意識されてきて、あれ……。

どうしよう……これ……。

ゴボゴボ、ジャアアア……

あ、どうしよう。トイレ終わったみたい。パンツもスカートも、もう使えないよ。どうしたらいいの。

なんか、心の中が空っぽになった。あれ、私、もしかして泣いてるのかな……なんて、足に力が入らないよ。

だめ、立ってられない。あ、お尻を着いたら、またうんちの感触がする。いやだよ、気持ち悪い。お漏らししちゃったから、パンツ脱がないと汚いの。身体が動かない。

いやだよ、いやだよ、いやだよお……。

……。

……。

……。

気がついたら、私がいた場所はトイレじゃなかった。ベッドで寝ていたみたい。これ、どこ、保健室……？

「あ、気がついた？」

「はい……あの、木村先生、これは……」

ベッドのほうを向いて話しかけてきたのは、保健室の木村先生。

「さっき、六年生の子が、『トイレから出たら、お漏らししちゃった下級生の子が泣いていてどうしようもない』って教えてくれてね。個室の前で泣いてて、私が何を言っても聞いてくれなくて……それでここに連れてきて、奇麗にしているうちに、あなたは寝てしまったみたいよ」

「そう、だった、んですか……。その、トイレのほうは」

「トイレはね、その六年生の子が、『自分もお腹が痛くて、出られなかったからお漏らしさせちゃったから』って言って彼女が掃除したっていうから」

「……………」

「お礼を言われるのも気が引ける、って言ってたわよ。……それはそうとして、お腹の具合はどう？」

「今は……大丈夫です」

「トイレも、行きたくない？」

「はい、さっき、全部出ちゃったみたいで……」

「そっか」

そういうと、先生は席を立って何か袋を取りに行った。私も起き上がろうとして……やけに下半身がすーすーする。あれ？

「……!? あの、先生、私、ぱんつ……」

「うん、それなんだけどね……」

そういうと先生は、袋をこっちに持ってきてくれた。黒い袋で、中に何が入っているのかは外からは見えない。

「下着だけじゃなくて、スカートも、正直に言って履いて帰れる状態じゃないのだけれど……」

「……あっ」

そこに来て、少し私は思い出した。そっか、スカートの上からお尻を押さえて我慢していたから、スカートも……!!

「何か、履いて帰るものがあるといいのだけれど……体操着って、今日は持ってきてるかしら？」

「えーと……今日は体育がないから、たぶんないです……」

「そっか……どうしましょうね……」

もちろん家に帰れば服があるけど、家に帰れないのだからどうしようもない。家から服を持ってこられれば……あ。

「あの、先生……家に、電話してもらえますか」

「いいけど……親御さん、いらっしやる？」

「お母さん、今日はお仕事午前中だけだったはずなので……服、持ってきてもらって、そのまま早退したいです」

「うん……わかったわ。少し、待ってもらえるかしら？」

そういうと先生は、保健室を出て行った。まだお昼休みだし、たぶん職員室に行って電話をしてくれているのだと思う。

十分くらいで、先生は保健室に帰ってきた。

「お母さんに連絡がついたわ。服をもって、車で迎えに来てくれるって」

「ありがとうございます」

それから十五分くらいでお母さんがパンツとズボンを持ってきてくれて、私は着替えることができた。教室にこっそり戻って荷物を持ってきて、今日は早退することになった。

保健室に戻ってきたら、お母さんと先生がお話をしていた。

「……実をいうと、今週だけでももう七回目なんです」

「そんなに……」

「ええ、お腹の風邪が流行っているのは明らかなので、もしお時間ありましたら病院に連れて行ってあげてください。吐き気がないお子さんが殆どなので、ありえないとは思いますが……万が一ノロウイルスの類だと、こちらも対策が必要ですので」

「わかりました……お世話になりました」

お母さんが私に気付いたみたいで、すぐにこっちに来てくれた。先生にさようならを言って、お母さんの車にのる。

「亜希、今は大丈夫？ トイレ寄っていかなくていい？」

「うん、大丈夫……ママ、ごめんね」

「いいのよ、別に……お腹が痛いもの、いつから？」

「たぶん、今朝から……学校でうんちしようと思ったけど、途中でお腹痛くてコンビニのトイレ使った」

「大変だったわね……。いったん帰って、とりあえずお熱測って寝たほうがいいわ。風邪みたいだし」

「うん……わかった」

あつという間にお家に着いて、体温を測ったけど三十六度台だった

から、熱はないみたい。本当にお腹が痛いだけの風邪を引いちゃったのかも……そんなことを考えて布団で横になっていたら、いつの間にか私は寝てしまっていた。

重荷と重圧

ゆつきゅん

「はい、もう一回！ もっと口を大きく開ける！」

とある高校の音楽室に、女教師の叱咤が飛んでいた。はあ、とため息をついて、ピアノストの生徒が今日で何回目か解らないイントロを奏で出す。完全に飽きた男子達、そして何度も怒鳴られやる気を失くした女生徒達がのろのろと足を開く中、彼らの前に立つのが、指揮者としてクラスを任されている小林楓^{こばやしかへで}である。

(もう……早く解散にしてよね……)

そんな彼女も、既に何度も行った全体合わせに飽きている。少しだけ背が高くすらりと長い手足を大きく動かして、体に染みついた担任の指導通りの指揮を繰り返す。ぴしっと校則通りに着込んだ冬服のスカートが大きく揺れた、彼女も合わせて歌い出す。

楓の高校の合唱コンクールまで、残り一週間を切っている。音楽教諭を担任に持つという不幸に見舞われた彼女達のクラスは、当然優勝候補と目され、それに舞い上がった担任の影響で他よりも練習を積み重ねていた。そして、そんなクラスの指揮担当に抜擢されたのが楓である。

元々女子としてはそこそこの身長があり、見た目もよく、特に問題も起こさない彼女の担任からの評判はすこぶるよかった。楓自身目立ちたいわけでも無いし他の要因もあって指揮者などやりたくはなかったが、決定事項のように推す担任に逆らえるはずはなかった。

(ああもう、みんなちゃんとこっち見て……！ また岡部が怒るじゃ

ん馬鹿……！)

七時限目の音楽の時間はテスト前にも関わらずひたすら全体練習に費やされている。今日は担任の虫の居所でも悪いのか、いつもより反復練習がしつこい。何度も何度ひたすら歌わされればクラスの士気も下がろうというものだ。そもそも元からそこまで乗り気ではないのだから。

とにかく歌い切り楓が手を降ろしたところで、楓の隣に立っていた担任が声を張り上げる。

「まだ全然駄目だけど、もうチャイムなので終わりにします！ この後ホームルームを挟んで放課後練習をやりますからそのつもりで！」

露骨にクラスメイト達の顔が歪むが、明らかに怒気を含んだ担任の物言いにわざわざ歯向かって何にもならないことは解っている。

あーい、と何のやる気も感じられない返事がされ、直後になったチャイムとともに足早に音楽室を出ていく。

(最悪……早く帰りたいのに)

「あ、小林さんちよつと良い？」

「……何ですか？」

呼び止められ立ち止まる。話したくはないが無視もできない。引き続き完全に不機嫌になっている中年女性教師の前で、楓はとぼつちり来ないように少しだけ笑みを浮かべた。

「今日の合唱、本当に駄目だったわ」

「はあ……」

後ろに友達もいるんだけど、と心の中で毒付く。担任が嫌われているのなんて誰でも知っていることだが、彼女の場合は楓のことを味方

だと思っている節がある。自分が指揮者に推し、受け入れたからだ。不本意でもそれは現実であり、そのせいで楓が友達に憐れみの目で見られていることを担任は知らない。

「でもね、結局合唱は指揮者がちゃんとリードしてくれば上手く行くから。小林さんならそれができると思うの。だからお願いね。うちのクラスが勝てるかはあなたにかかっているんだからね」

「……っ、は、はい……すみません、いいですか、一応ちよっと、トイレ行きたいんで……」

「ああ、ごめんなさいね。でも覚えておいてね。期待してるわよ小林さん」

「失礼します……」

『小林楓』にとつての地雷ワードが立て続けに放たれ、楓は足早に部屋を出た。心配そうに声をかけてくれる友達らに、岡部がしつこくてさ、と明るく話しかけながら、しかし。

きゅるるるるる……

(うぐ……来た……最悪……っ)

ぐっと友人にバレないように、楓が歯を食い縛る。お腹の奥の方が揺れ動くみたいに、くるる、と頻りに鳴き始めた。

小林楓は、自他ともに非常に緊張やプレッシャーに弱かった。何か期待をかけられたり大きなものを背負えば背負うほど、ダイレクトに体を崩す。それも、吐き気や腹痛など身体的なものに直結してくるのだ。

幼稚園の時、卒園の挨拶に緊張した楓は密かに戻してしまい早退した。小学生の時、選手リレーに抜擢されたときは走り終えた後すぐにトイレに駆け込むほどお腹を痛めた。高校受験の日も朝から下痢が止まらなかった。そして今も、外から与えられたプレッシャーに反応した楓のお腹が緩やかに下り始めていた。なまじ能力はあるからこそ何度も何かを背負わされ、そのたびに反応する体に苦しんできたのだ。(もう……どうしよ……)

一度下り始めたお腹は、中身を出すまで治まらないと経験上知っている。いや、中身が出たって終わらないことだってある。どちらにせよ、勝手に治ることはないのだ。みんなで教室に戻り座ってホームルームを待っている間も、変わらず軽い汚らしい音が楓の体を通して聞こえていた。当然、解決につながる欲求……便意も同時に襲い掛かる。

(ぐ……ヤバイかも……トイレ行きたい……)

ちらりと時計を見る。流石に今すぐはトイレには行けないとして、次に行けるのはいつか。ホームルームが十分ほど、その後が一度目のチャンス。それから合唱練習が始まって、終わるのは大方下校時間ギリギリだろう。その後は……少し無理をすれば済ませてから帰ることもできるが、下校時間を過ぎてとなると教師がトイレの前で待っている、なんてこともある。乙女の羞恥心を、確実に時間通りに下校させたい学校教師は泣き取ってはくれない。トイレの前に立たれて大きな方なんて、それは絶対に避けたい。

(この後行くしかないか……)

かと言って、今も唸るお腹を抱えて家までは絶対に帰れない。静か

にお腹を摩りつつ、はあ、と大きくため息をついた。当然だが、学校で大きい方なんてしたくはない。だが、楓が抱えている欲求は一気に高まっていくばかりでどうしようもなかった。それを抱えたまま体を動かして指揮、場合によっては歌わなければならないのだ。

「はい、じゃあホームルームを始めます！ ではまず連絡事項からですわ——」

担任が話し始め、これで待っていればホームルームは終わる。そこに楓の出番はない。教室の後方に座る楓はこれ幸いと机に突っ伏した。片手を下げたところと鳴り続けるお腹を撫でる。かなり張ったような感覚があり、お尻に相当の圧力がかかっている。ぐぐぐと天秤が排泄に傾いていく。お腹の痛みがそのまま溶けて広がって、だんだんと便意が変わっている。丁寧に息をつく、ぐるぐるとうねるものが少しずつお腹ではなく下腹部に降りていく感覚があった。急降下していく腹具合に顔を顰め目を閉じる。

しばらくそのまま便意に堪え続け、担任の号令を聞きつつ椅子から立ち上がる。話しぶりからして想定通り少しだが休憩時間があるのが解った。腹で何かが蠢くような感覚を飲み込んで、ごくごく小声で挨拶をしながら頭を下げた。

「……ごめん梓、ちよつといい？」

「何？」

この後は教室で合唱練習だから、机を移動させる必要がある。だが、そんなことをしている時間は無い。今日の不機嫌な担任の動きを考えれば、移動が終わればすぐに練習を始めるだろう。前の席の友人に声をかける。

「ごめん、お腹痛くて……机、頼んで良い？ 先生にも適当に言っておいて……」

「了解。やっつくね」

「ありがと……うう……」

すぐに教室を出る。五分くらいは時間ができるだろう。腹具合は最悪で便意も強いが足が止まるほどでもない。どこのクラスもホームルームが終わっていない廊下を足早に駆け、特別教室のある教室棟まで駆け出す。楓にも人並みに羞恥心というものがある。絶対に爆発してしまうだろう便意を抱えて教室近くのトイレには入れない。

普段から誰も使わないだろうトイレに駆け込み、ちらりとスマホを確認しつつ鍵を掛ける。ここまで来るのに一分。三分で済ませて同じ時間で帰ればいい。幸いにして楓は女子である。普通に済ませるだけでもそれなりの時間はかかるし、変に疑われることはない。スカートで捲り前で纏めて、下着を降ろしながら便座に座る。楓はこれまで何度も腹痛に苦しんできたのだ、多少切羽詰まったくらいではその一連の動作は崩れない。我慢しながらでも衣服を汚さず座る術を知っている。

「……んっ……ふう……」

ピュジュチイイイッ！

プビュプジジジイイイッ！

(く……熱……)

そして次の瞬間、しっかりと役割を果たした排泄孔から堰を切った

ように土石流を放ち始めた。清楚で可憐な彼女の容姿から放たれる穢れた音と鼻をつく悪臭、そして液状のものが勢いよく噴出する熱に楓は息を止めるように体を固めた。

ブピリリリイッツ！ ビュジュウツ！

はふ、とほんの少しづつ消えていく腹痛に背を丸める。楓が思い出すに、朝の排泄ができていなかった。便意のまま勢いよく吐き出されたのは、出口でどろどろに溶かされたものだけ。呼吸とともに次々に便器を叩きつける液状便の奥に、もっと大きな何かがあるような感覚があった。

びろりんっ

ついでに出し切ってしまった、と腹に力を入れようとしたその時だった。スマホの通知音が鳴り、驚いた楓の排泄が止まる。爆発したような下痢はとりあえず落ち着いており、不衛生は承知でスマホを取り出す。先ほど頼んだ友人……梓からの一言だけのメッセージ。『始まるよ』とだけ書かれていた。楓の想像より早い。やる気の無いクラスメイト達がのろのろと準備を進めた結果、担任が彼らの尻を蹴り上げたことは楓には知る由もない。ただ一つ確定したのは、今からここでゆっくりと排泄などしている場合ではないということだ。

(まあ……しようがないよね、流石に……お腹痛いのも治ったし……)

ペーパーを巻き取り痛む尻を拭き取りながら再度お腹の具合を確

かめる。腹痛から便意に変換されたそれは、きれいさっぱりとはいかないが消え失せていた。まだしくしくと洩っている感覚はあるが、それでも便意はないし、十分耐えることができるようなものだった。

それに、これから合唱練習……つまり、クラスメイト達の前に立つて行動するにあたり、体調が万全に戻るはずもない。ある程度は飲み込まないと、一生トイレの個室で液便を吐き出すだけになってしまう。水を流しながら下着とスカートを戻し、手を洗って急いで教室に戻っていった。

「だから、そこはもう少し緩急を付けないと気持ちが入らないの！ 歌詞を読んでおくように言ったわよね!? ここは静かであつとしたりと、大きな流れになつていく、というところなの！ 楽譜にも書き込むように言ったでしょう！」

そして、数分後。既に楓は後悔していた。

担任の怒りは膨らむばかりで、一度歌うたびにひたすらに怒鳴ることを繰り返す。楓の隣で繰り返される要領を得ているのかも解らない説教を、楓含めクラス全員でただ聞き流していた。

しかし、楓の体はそうもいかなかった。

ぐぎゆるるるる……

(う……もう来た……やめてよ……)

トイレで完全に解消しきれなかったもの、そして、隣で大人が怒鳴っているという現実。さらには、担任が一切楓には怒らないということも拍車をかけた。ひたすらに彼女に重圧がかかり、腹具合も急速に下っていく。信じられないほどに体調は悪化し、楓の顔が青ざめていく。

(どうしよう……も、終わりにしてくんないかな……)

心の底からそう思っても、もちろん練習が終わることはない。担任の気分次第でまだ続き、何度も何度も繰り返される。その指揮者が苛烈な腹痛に苦しんでいるとは知らずに。

(ふうー……いぐ……ちよつと……待って……)

ぐぎぐりゆりゆりゆ……つ

普通に立っているのもやつとなほどに、腹痛が楓に襲い掛かる。無理矢理お腹を押し込まれているかのような痛みのみならず、それでも顔に出ないようにだけ必死に堪える。完全に下って来た残り物に抵抗してお尻に力を込めて、担任が促すままに指揮棒を振り続ける。男子の低音がお腹に響く。

絶え間なく襲う腹痛に、ほんの少しずつだが前屈みにお腹を庇う姿勢になってしまふ楓。クラスメイトにはただ単に気分が乗って前のめりになってしまっただけだと認識されているが、それでも、本人は当然解っている。自分の腹具合も、その切羽詰まり方も。そして、少しずつ、振じれる痛みが下って肛門を押し広げようとしている。

(やばそう……かも……!)

呼吸が深く速くなっていく。猛烈な生理的欲求に、慣れているとはいえ楓の顔も歪む。それは家族でしか解らないような少しの差だったが、腹痛と便意に負けて態度を外に見せてしまった、楓の敗北の証でもある。

「はい！ もう一回！」

しかし、残酷にも練習は終わらない。楓が心から求める場所にたどり着くことはできず、ただ苦しみに脂汗を垂らす女子高生が晒しものかのように友人達の前に立たされる。腹の下にどろどろとした汚らしい欲望が蠢いているのは本人にしか解らなくとも、便意に堪える自分が衆目にさらされているという事実には心は削られる。何度やっても満足しない担任の強情さに苛立ちつつも、それ以上考えるとさらに自分が苦しくなる。今以上の精神への負荷は避けたかった。

だが、そんな楓の精一杯の抵抗など関係無く腹具合はさらに悪化していく。

ごぎゆるる……ごぼぼ……

(痛い……お腹痛い……)

楓の立ち姿がおかしくなっていく。唇を結び、少しでも苦痛に耐えようと体に力が入る。それでも、練習を少しでも早く終わらせるためには真面目にやらなければならない。このまま下校時刻になってしまえば、教師がトイレの前で待機しているなか酷い音を響かせることになってしまう。女として……以前に人間として、そんなことを受け入れてはならない。学校が使えない以上、一秒でも早く他のトイレに駆

け込みたい。頭をそれだけでいっぱいしながら、楓はひたすらに指揮棒を振り続け。

「……今日はもう時間ですから、ここまでにします。家で各自練習するように！ 良いですね！」

やっとのことで練習が終わり、楓が解放される時が来た。担任の怒声とともに号令が進み、全員がばらばらと解散していく。

ぎゅぐるるるごおっつっ!!

(く……は、はあっ……ヤバい、ヤバいヤバいいいっ……)

解放されるまで、実に二時間強。その間、絶え間なく訪れる腹痛と便意を我慢し続け、少しづつ熱くなっていくような肛門に力を入れて必死に堪えた。予断を許さないほどに欲求はひっ迫していたが、しかし、何とか楓は堪え切った。

だが、楓の道のりはここからが本番だと言ってもいい。

(はやく、はやくはやくトイレ……!)

荷物をひったくるように掴み、教室から飛び出そうとする。校舎内には既に下校を急かす校内メロディが流れていて、やはりこれ以上学校にすることはできない。学校近くで、人が寄り付かなくて、そんなトイレを脳内で検索しながら駆け出す楓を、しかし、後ろから皺の付いた手が掴んで止めた。

「ごめんなさいね小林さん。ちょっと良いかしら」

ぐぎゅうううっつっ

担任の問いかけに、代わりにお腹が応える。ちょっとなんて良いわけがない。今にも爆発しそうな便意と、奥歯をすり潰してしまいそうなくらいの腹痛に堪えているのだ。急降下した腹具合には一刻の猶予も許されない。だが、わざわざ掴むまでして引き留められたものを拒むことができようか。もう、止まって話を聞くしかなかった。

「今回感じたと思うけど——」

(うぐ……やばい、もうヤバいんだってえ……!)

話し始めた担任の言葉など全く頭に入っていない。今もなお荒れ狂う排泄欲求に苛まれているのだから、考えられるのはトイレまでのルートだけ。気が遠くなるほどの痛みはいっしょに少しづつ引き、代わりに鮮明な排便欲求が、きゅつと閉じた乙女の秘密の出口に押し寄せている。ぐるぐると鳴り続けるお腹がカウントダウンみたいに、一秒ごとに強まっていく。苦しむ生徒の姿には気付かず語り続ける中年教師に怒る心の余裕もない。とにかくトイレに駆け込むことだけが至上命題である。教えに対して頭を垂れるようにして、何とか荒れるお腹を庇う。

ぐぎゅるるるううっつ!

(ぐ……う……っ!?)

だが、次の瞬間訪れた一際大きな腸のうねりにさらに楓は体を縮めた。何か生き物でも入っていて、それが暴れ回っているかのような感覚とともに、さらに急ピッチで腹痛が便意に変わっていく。お尻の穴

が、膨らむ。張った下腹部が、何かを訴えている。

(だめだめ、い、あっ……)

ぶじっ……

「……す、みません……！ 今ちよっと、お、お腹痛くて……帰ります……」

「あらそう？ ごめんなさいね。お大事に」

一気に下着のお尻が熱くなる。一瞬、楓本人ですら下着にぶちまけてしまったのかと錯覚するほどに、ねばっこく尻たぶを撫でるような熱。いずれにせよ開いた肛門が震え、力が入らなくなるのを必死に抑えた。最後の力を振り絞った作り笑いはぐしゃぐしゃに歪んでいたが、とにかくトイレに。その一心で、楓はくるりと向き直って駆け足で昇降口に向かう。

「明日もよろしくね！ 小林さんにかかっているんだからね！」

もはやわざととしか思えない、追撃を受けながら。

泥棒カナの初めて負けた日

岩咲魔じっく

カナは焦っていた。

カナは泥棒だ。十四歳で児童養護施設でのいじめに耐えきれず抜け出して食べる物に困ったとき、通りががった家の庭に忍び込んで柿を貪り食ったのは早数年前のこと。今まで一度も捕まらなかったことを自慢に思っていた。

そんなカナは初めての窮地に立たされていた。何も盗めていない。探しても探しても、不気味なほどに金目の物が見つからないのだ。

カナはガサツだが、抜け目がなかった。数日前から張り込みをし、家主の帰宅時間は一時間後の午後五時だと推測していた。荒らすだけ荒らして何も盗らずに帰ることは、カナのプライドに反する。一刻も早く収穫を得て此処を去らなければならない。

それに加えてカナを追い詰めているのは強烈な便意だ。泥棒稼業による不規則な食生活のせい、はたまた残り時間のプレッシャーからか、カナはお腹を下してしまっていた。トイレを使えば証拠が色々残ってしまう。便器には汗が付着する。指紋防止の手袋も、脱がなくてはお尻を拭く時に便が手袋に付いてしまうかもしれない。排泄物も流しきれぬ分らない。なにより、排泄には時間が掛かってしまう。左手を伸ばして尻穴を押さえながらの家探しは効率が悪く、なおさら泥棒行為が進まない。

腹の奥からガスが下りてきた。今この家にはカナ一人だが、帰宅した家主に臭いを嗅がれるのは屈辱的である。羞恥心に怯えるカナは肛

門括約筋をより一層引き締めた。

全ての部屋を探索したはずなのに、一円たりとも見つからないなんて。この家は何かがおかしい。でもその理由を考えるための思考力は、唸りを上げる下腹部に奪われていた。もはや全身全霊で我慢しないと紺のジャージを歪に膨らませてしまう。カナの焦りは頂点に達していた。

ブスウー……

カナの意思に反して勝手におならが漏れ出す。人間のものとは到底思えない強烈な臭いが辺りに漂う。カナは自ら発した気体の臭さに顔をしかめた。

ガスを抜いて少し楽になった。そう思えたのもつかぬ間のこと、老廃物を体外に排出しようと腸が蠕動を再開し、あつという間にガスで空いたスペースが埋め尽くされた。

もはやなりふり構ってられない。幾ばくかの証拠が残ろうとも、トイレで排泄するしかない。カナは決心し、暴れ狂う下腹部を抑えながらトイレへ歩を進めた。

へつぱり腰になりながら一歩一歩慎重に歩き、ようやくトイレの前までたどり着いた。やっとなおとせ。漏らさずに、便秘に向かって。そう思った瞬間、扉の開く音が聞こえた。

「ごきげんよう、泥棒さん」

開いたのはトイレの扉ではなく廊下の向こうにある玄関の扉。

（嘘だ。また家主は勤務中のはず。あと一時間は帰ってこないはずだ。私の調査に間違いは無い。なぜ!?)

ブジュッ!!

動揺で気が緩み、水っぽい便がカナの下着に放たれた。臀部を濡らす感覚のおぞましさに身体が震える。こんな無様な姿を女に悟られてはいけぬ。カナは尻穴を引き締め直すと、ポケットに隠し持っていたバタフライナイフを女に向けた。

「動くな！ 動いたら刺す！」

パンツスーツの凛々しい女性は凶器に目をくれることなく、パンプスを履いたままカツカツとカナに近づいていく。

「虚勢張って可愛いわね。トイレ、行きたいんでしょう？ もう我慢できないんでしょう？ でも私が予想より早く帰ってきたからタイミングを逃した。そうでしょう？」

「なあっ!？」

(全て見抜かれている……!?!? どういうことだ……!?!?)

脂汗が一層流れ、僅かにしか漏らしていないはずのパンツが肌じつとりと張り付く。

「あれだけ部屋を荒らしてくれておいて気づかなかったのね。家中を常にくまなく見ているカメラに」

(カメラだと!? そんなもの、どこにも……)

しかし、よく目を凝らすと、そこかしこから幾つもの黒い点に監視されていることにカナは気がついた。

「盗撮とか卑劣だ！ 犯罪だぞ！」

「泥棒さんには言われたくない台詞ね。自分の部屋を撮影して何が悪いのかしら？」

行為の異常性に言及しなければ、全くもってその通りだ。カナは言葉に詰まる。

「たまたまネズミさんが映ってたからお仕事切り上げて急いで帰ってきちゃったわ。感謝なさい」

「余計なことを……ぐっ、ふう……」

追い討ちをかけるように、更なる便意の波がカナを襲う。目の前の腹立たしい女を倒して今すぐ便器に座らないと間に合わない。息を吐きながらナイフを構え直した。

「うんち、したいんでしょう？」

「ああ、そうだよ！ 今すぐうんこしたいんだよ！ うんこ漏れそうなんだよ！ だからそこどけよ！」

屈辱だった。見ず知らずの相手に、それも財産を奪うはずだった女に、便意の告白をしなくてはならないなんて。

だが凶器を持っているのはカナだけだ。形勢が逆転する前に女を脅して便器に座り、刃物を向けながら腹に溜まった忌まわしい下痢を放出する。そのためにはこの告白も仕方がなかった。

「ふっ……でもどいてあげない。今ここで楽にしてあげるわ。——はっ！」

ナイフの切っ先に向かって鋭い蹴りが炸裂する。カナはナイフを振るい対抗するが、ナイフは靴底に弾かれて部屋の隅へと飛んで行った。尻もちをつき為す術を失ったカナの顔が絶望の色に染まる。

「嫌……いやだ……」

「よくここまで耐えたわね。でももうお終いよ。全部ぶちまけなさい！ ——はあっ！」

女は無慈悲にカナの腹を踏みつけた。

ブリュッ！ ブリューブリュブリュブリュブリュブリュブリュッ!!

「うああっ!! やあっ!!」

一瞬にして下痢便がカナのパンツを一色に染め上げた。

「ふふ……愉快だわ! さあ、もつと!!」

女に肩を蹴飛ばされ床に倒れ込んだ。尻に抱えていたペーストが、行き場を求めてあらゆる隙間へと侵食していく。普通ありえないエリアに付着した便は、カナに激烈な不快感を与えた。

「ブニニニニニ!! ビジュジュジュニニ!!」

「……………っ!!」

カナの思考は排泄の快感と失便の不快感、羞恥によってショートしかけていたが、不気味に笑う女の顔を見て僅かに理性を取り戻した。

カナは開きっぱなしの肛門を強引に引き締めた。

大腸の中で熟成された下痢の臭いが部屋中に充満した。その臭いは数分前に発したおならとは比べものにならないほど強烈だ。

「私の家をこんなに臭くしてくれちゃって。ふふ、どうしてもらおうかしら。地下室はまだ使えるわね……」

(地下室、だと……!?)

隠し部屋の存在は、家中をくまなく搜索したはずのカナの心を揺る。それと同時に恐怖が芽生える。監禁されてしまうのか。このサディスティックな女から拷問を受ける日々が始まるのか。

「……うん、今監禁するのは真子だけでいいわ。あなたは……そうね。これ付けなさい」

カナに手渡されたのはアイマスク。

「何をするつもりだ!」

「あなたに拒否権は無いのよ。さっき言ったでしょう? 全部『撮っ

てる』って」

「脅迫とか卑怯だ! 犯罪だぞ!」

「……それわざと言ってるのかしら? まあいいわ。あなたはこれから私とお散歩するのよ」

(クソっ、なんでアタシがこんな目に……あの女、絶対に許さねえ!)

カナは下痢便を下着に抱えたみつももない姿のまま玄関の外へ連れ出された。まるで本物のような手錠で後ろ手に拘束されていて、思うように動くことができない。アイマスクが着けられ、カナの視界は真っ暗になった。

「あなたはただ私に着いてくるだけでいいわ。逃げたり抵抗したら……分かってるわよね?」

「ああ、分かっている」

今は大人しく従うフリをして様子を窺い、隙を見て反撃して拘束し返す。再び家に連れて帰り、監視カメラのデータを消去させる。そして、拷問して地下室を開けさせる。それがカナのプランだ。

カナは女がつぶやいていた地下室の存在がずっと気になっていた。あまりにも見つからない金品に、異様な監視システム。女の発言から、既に一人監禁されているようだ。監禁相手を入質に取り隠された金品を用意させる。成功すればカナは証拠無しに金品が手に入る。しかし、失敗してしまえば良くて豚箱行き、最悪の場合はこの女に監禁されてしまうことだろう。

カナは泥棒のプライドにかけてプラン遂行を決断した。

「まずは……そうね、住宅街をのんびり歩きましょう」

縛ったロープを隠すように女が手首を掴み、カナを前へ誘導する。足を一歩動かすたびに、尻に挟まった汚泥がカナのデリケートな柔肌をねっちょりと犯していく。あまりの不快感にカナはすぐ歩みを止めた。

「なに止まっているのよ、歩きなさい」

「だって気持ち悪いんだよ、ケツが。仕方ないだろ」

「生意気なこと言うのね。お仕置が必要だわ」

ぐちゅり。カナの尻がジャージ越しに揉まれ、下着が形を変える。

「ひいっ！ やだあっ！」

アイマスクによって視界が奪われていることで触覚に意識が集中し、より一層不快感が増していた。

「あらやだ、汚い汁が手に付いちちゃったじゃない」

そう言っただけで女はカナのジャージのズボンで手を拭いた。

「おいやめろよ！ 汚えだろ！」

「そんな大声出したら目立つわよ。私は別にいいけれど。分かったらさっさと歩きなさい、この汚物が！」

カナは渋々歩き始めた。臭いを放つ面積が増えたカナは、まるで歩く肥溜めだ。

「そうよ、良い子ね」

元より反抗的な性格のカナは、この高圧的な女の言いなりになっているのが気に入らなくて仕方がない。どうか対抗できないものか。女はカナから奪ったナイフをベルトに刺していた。あれが奪えればこちらのものだが、今は視界が遮られており、カナの得られる情報は手首を掴まれる感覚と女の声のする方向くらいしかない。今下手に動けば

どうなるか分かったものではない。ここは大人しく女に従い、アイマスクが外される瞬間を待つべきだ。カナはそう結論づけた。

しかし、ジャージ越しに吹き付ける風までもがカナを嘲笑している。(そうだ、今ここで走って逃げて、大声で助けを求めるのはどうだ？ 見た目的にはこの女の方がどう見ても犯罪者だ。それにナイフも携えているから銃刀法違反だ)

そう考えた矢先、ある音がカナの耳に入ってきた。車の近づいてくる音だ。エンジン音がカナをにらみつけるように迫ってくる。

「ほら、運転手があなたを見てるわよ」

「い、嫌だっ」

カナは反射的に女に身を寄せてしまった。まるで人見知りをして母親の後ろに隠れる女兒のように。

「ふふっ、あなたにも可愛らしいところあるじゃない」

自分のしてしまったことに気付いたカナは、パッと女から離れた。車はもう遠くへ去っていた。

「そんなに見られたくなかったのかしら？ お漏らしさん」

「う、うるせえ！ あんたが不審者だって思われないうようにしてやっただけだ！ むしろ感謝しろよな！」

「あらあら、顔真っ赤にしちゃって。いいわよ、そういうことにしておいてあげるわ」

恥ずかしさと悔しさにこぶしを握りしめ地団駄を踏むカナ。これ以上恥を重ねる前に逃げ出してしまいたい。カナは己の下半身から放たれる異臭に嘔吐しながら、密かにタイミングを窺うのだった。

『リオちゃんは本当にすごいね』

『やっぱり、リオちゃんが一番だよ』

『リオさん、あなたには期待してますよ』

私には双子の姉がいる。

顔はそっくりだけれどそれ以外は何も似てない。誰とでもすぐ仲良くなれる性格の良さと、勉強・スポーツも一位か二位で簡単に順位が簡単に落ちることはない。人気者になれるのも当たり前だ。

それに比べて私ときたら。

性格は人見知りで友達もほとんどいない。勉強とスポーツは中の下、平均をとれるかとれないか。

目立たず凡庸でつまらない人間。だから私は眩しい姉の陰に埋もれてしまう。仕方がないことなのかもしれない。

何もせずにその名声を得たわけではないことを私は知っている。勉強は家でもしているし、自分が出る部活の大会が近くなれば練習を遅くまで残ってやったりしている。

私も同じくらい努力しているつもりではいる。けれどやっぱりその差は埋まらない。姉と同じ輝きが欲しいわけではなく、眩し過ぎるから光量を下げてもほしだけ。

そんな私の朝は苦痛から始まる。

目覚まし代わりとなったそれはいつから始まったのだろう。

ぐるっぐらばばっ。

起きて早々にトイレに急かされる。痛む所を抑えながら歩く。寝ている間もおそらく痛んでいるのだろう。

薬でなんとか落ち着かせているが、起きるころにはどうしても効果が切れてしまう。

トイレには不運にも先客がいた。

寝起きから腹痛に苦しむ私を表すような赤色が見える。

ぎゅうう！　ぐぐお！

空腹の音よりも嫌な感じに鳴らしながら、私は中の人を急かそうと手を挙げた。

じゃあああーっ、水を流す音がドア越しに聞こえてドアを叩く直前で手を止めた。すぐに出てきてほしいけれど、ちゃんと中から出てくるなら大人しく黙って待つ。

中から出てきたのは姉だった。

「あつ、ごめんねミホちゃん。待ったよね？」

「大丈夫、全然待つてないよ」

少し恥ずかしそうに笑いながら

「うんちしちゃったから臭いかも。ごめんね？」

いたずらっ子のようなその顔をされたら何をされても許してしまいたいそう。別にこれから私がする方が酷いことになるから姉が出した物なんて許容範囲だ。

「それも大丈夫、私もうんちするし」

いい加減姉とのんびり話をしている余裕もないので、顔も見えないまますぐに入ってドアを閉める。

鍵もちゃんとかけ、まだ水が流れ切っていない便器に向かう。

「ごろごろ……」。

ここで安心してはいけない。以前油断したせいで下着を少し汚してしまっただけがあるからだ。

汗でやや張り付き、脱ぎずらい寝間着と下着をいつぺんに引き下げて座る。ようやく緊張していた体の力を抜いていく。

ぶぶー！

始めに穴から大きなため息が吐き出される。そして、本体が勢いよく飛び出していく。

びぶぶうう！ ぢびいいっ！ ぶぼっ、ばばちゃ！

激しい破裂音と叩きつけられる水音。これをしている時は決まっても顔は苦痛のままだ。

出している間もずっとお腹は痛いし、お尻の穴の方も熱くて不快だ。ぶりりい！ ぼちゃぼちゃぼちゃ！

「うう、すああ。いつつう……」

姉の残り香なんて比じゃないくらい臭いがたちまち鼻から入ってきて、嫌な気分は増していくばかり。

ぶ！ ぶっぶっ！ ぶううっ！

お腹に力を入れ、なるべく空にする。ガスさえも残したくない。

しよろろろお、忘れてたかのようにおしっこが出た。

とても臭いが深呼吸する。若干の痛みは残っているが、寝起きのお腹イライラは無くなった。これでしばらくは安心だ。

トイレレットペーパーで何度も何度もお尻を拭いて、ようやくべつとりとしたものが消えたのを見る。その時、見たくない便器の中も目に入ってしまった。うんちとおしっこが混ざって、それを吸った紙が

いくつもいくつも折り重なりとてつもなく嫌な気分になる。

さっさと流してようやく視界から消えた。それでも便器の端々にこびりついたものが残ってしまう。水のように噴出した分簡単に流れてくれないらしい。

他の人に見られる前にトイレの中にあるブラシを出し、洗剤を付けて根気よく擦る。

姉が残した物ではなく、これは私のだから私が始末する。

綺麗にトイレを使える姉と毎回汚してしまう妹。朝から差が出てしまふとは何とも恨ましい。

ようやく綺麗になったので、改めて水を流してトイレを出る。

トイレは掃除をすれば綺麗なままでいられる。

だけど私の黒い汚れはいつまで擦っても落ちたりしない。



朝食後、学校へ行く準備をする。

姉も同じように着替え、持っていく物を確認している。もうすぐ自分が出る水泳大会の練習用に水着やらバスタオルを学生靴とは別のスポーツバックに入れていく。

全て準備し終えて、後は靴を履いて出ていくだけという状況。

「ちょっと横詰めて」

「うん、あれ？ ミホちゃんも練習出るの？」

姉の隣に座って靴を履く私もスポーツバックを用意しているのを見た姉が聞いてきた。

私も姉と同じ水泳部で活動している。

もちろん姉は大会に出て好成绩を残しているけれど、私は補欠に入れるか入れないか程度の実力。そんな実力の私が残って練習する必要なんで全く無い。普段なら真っ直ぐ帰っているから、姉が聞いてきたことも嫌みでもなんでもなく当然のことだろう。

「練習っていうのは口実で、暑いから単純に泳ぎたいだけ。リオちゃん邪魔になっちゃうならしないけど？」

「全然！ 泳ぐの気持ちいいよね、無料でプール使えるのは水泳部の特権。一緒に泳ごう！」

ニカッ、真っ白な歯を見せて笑う姉に思わずこちらの口角も上がる。

元気に家を出ていく姉と後ろからのそのそとついていく私。

「さすがに水着を着て学校に行くようなことはしなくなっただね」

姉は昔とか結構前までそうしていた。

「だってえ、クラスの皆とか止めた方がいいって言うから」

ぶー、と口を尖らせて姉は抗議する。

「私は逆に着て行く方がいろいろ面倒だと思うけどね」

「だってさあ、競泳水着って着るのも脱ぐのも時間かかるでしょ？ ならせめて着る方の時間だけでも省略出来ればなって」

言いたいことは分かる。

でも、高校生でそんな子供っぽい考えでやっていたのは姉だけ。

「スカートとかもうちょっと気を付けていれば皆もそこまでうるさく言わなかったと思うけど？ 『今日も中に着てきたんだー！』 って教室のと真ん中でスカート持ち上げたりしたって聞いたけど？ 恥ずかしい限りだよ」

私がそう言うとう自分のスカートをばさばさと叩いて、

「あれは！ 友達が『今日も着てきた？』って期待した顔をするから」
「そんなのはバカにされてるに決まってるじゃん。調子にのせられてくだらないことしてさ」

やれやれと私は頭痛に悩むように頭に手を置く。姉とこういう会話をするのは正直苦痛ではない。むしろ和みすら感じる。

お腹の調子の悪さもこの瞬間は少し忘れてしまうほどだ。

「リオちゃんおっはよー！」

「おはよー！」

後ろから複数の声、どうやらこの時間も終わりのようだ。やって来たのは姉のクラスメイト達。私のことなぞまるで目に入っていないようにすぐさま姉を囲んでしまう。

「今日も練習？ エース様は違いますなあ」

「練習するからエースになれるの！ リオちゃんのそういう所をあんなは見習いなさい。ま、私もだけど」

ワイワイと弾んだ会話が始まり、あつという間に私はその輪から弾かれ置いて行かれる。こうなると入って行くことは出来ない。姉と教室が違うという以前にきつと姉の友達には日陰者の妹に興味が無い。

どんなん会話が弾んで遠ざかっていく姉とその友人達。

途中で姉が少し振り返り『また後で』と声に出さず私に伝えた。こちらも軽く頷き、手を振って別れた。

ああ、なんて羨ましい光景なのだろう。

私も姉のような人になりたい。

「羨ましい」から「妬ましい」に変わったのいつからだろうか。

眩し過ぎる光に目を細めているのはいい加減疲れた。
私の内なる怒りに呼応するように、またお腹がきゅると鳴った。



学校でも私のお腹は時々暴れる。

授業中に我慢できずにトイレ退出したこともよくある。幸いにも休み時間まで我慢出来た私はトイレへと急いでいる。

ぐるぐる！ もうすぐそこだからと腹を撫で、廊下を速足で歩く。
「リオちゃん！ ちょっと用事が、あっ」

後ろから声をかけられ肩に手を置かれて振り向くと、驚いてから気まずそうな顔をしている女子生徒がいた。後ろ姿で姉と間違えたが、顔を見て妹の方だと気付いたようだ。

「ごめん、そっくりだから間違えちゃった」
「あっ、いえ……いいんです」

双子という宿命か、こういうことはもう数えきれないほどある。顔もかなり似ているし、性格好も体つきも似ている。

本当に似ていないのは性格と才能だけ。

その違いだけで姉の友達は『こいつは妹の方だ』と分かるようだ。屈託のない明るさを持つ姉と不機嫌な顔ばかりしている陰気な妹。

謝罪するとさっさと立ち去って行く姉の友人を見送る。

ぎゅおおお！ 強い腹痛、思わず前のめりになりながら女子トイレに駆け込んでいく。

入った時にちょうど一番近い個室が空いた。

「んぐっ！ ちょっとごめん！」

出てきた人を強引に押しつけ、個室に体をねじ込ませる。悠長にしている暇はない。焦っているとは言え押しつけられた人が怒っているがお構いなしで乱暴に鍵を閉め、便器の蓋を勢いよく上げる。下着を下ろしながら座る。

ぶつぶぶぢぢいっ！ びりびりいっ！

便器内で弾ける音は、女子が周囲に聴かせてもいい音ではない。でも、痛むお腹に両手をまだ置いている私に音消し用の水を流す余裕はない。

ぼっ！ ぼじよぼっ！ びぢゅーっ！

朝に出したのにまだ水っぱいものがたくさん出る。

ガスも混じるからきつと便器内で弾けているに違いない。

「うおっ」

声まで出ってしまったので、そちらは手で口を覆って遮った。

出るままに任せていたけれど、止まったようなので恐る恐るお腹に力を入れてみる。

お尻の穴が膨らんで萎む。

どうやら終わったらしい。いつの間にか額は汗ばんでいた。

「ふう、ふう……」

体力も気力もごっそり持っていかれる。

朝に固形のはほとんど出したから今のは未消化が九割だろう。

ゆっくり仕事を終えたお尻を拭いていく。

「いっ！ つう」

今日一日で、すでに過労気味な穴はトイレトペーパーの刺激です

ら痛みになる。もしかして切れてしまったのではと確認する。紙に付いているのは茶色い液体で血の赤は何もなかった。

少だけホツとしながら今度は穴の痛みを我慢しながら拭く。痛みを覚悟しているので、さつきよりはマシだ。でも、痛くないわけじゃない。これがまた私にイライラとして溜まっていく。

個室の外で何人が動く心配がする。しまった、ここは家のトイレじゃない。ゆつくりと時間をかけ過ぎた。音の誤魔化しも何もしていない。

「リオちゃんさあ、どう思う？」

気になる名前が聞こえて思わず聞き耳を立てる。

「どうって、なにが」

「最近のあの子だよ、すごく活躍してるけどさあ」

これは思わぬ場所に遭遇したのかもしれない。

姉の噂、それも陰口の類は聴いたことが無い。私みたいに彼女のことを良いと思っている人ばかりじゃないということを確認できるかもしれない。

「すっごくない!? また大会レギュラーだよ! 今度リオちゃん優勝とかしたらさ、全国にも行けるよ!」

「じゃあめっちゃ応援しなきゃじゃん! リオちゃんやつぱすごいよ! うちら友達でよかったなあ」

前言撤回、人気者は裏でも人気者のまもらしい。

「そういう言い方だとさあ、リオちゃんの人気にあやかっている人みただけだよ?」

「はあ? うちらリオちゃんの大親友だし! この学校で一番最初

に声かけたのうちだし!」

「ばっかじゃないの? 私を差し置いて親友とか。これもう勝負だな! リオちゃんに決めてもらう!」

「受けてたとう! よし、休み時間終わる前に行くぞ!」

バタン! と大きな音がして走り去っていく音もする。

なんだか頭が悪そうな感じだったけれど、姉の友達なのは間違いないだろう。私が知らないだけで本当はどこかで、姉の悪口大会や今の地位から引き釣り下ろしてやろう、といった感じのやり取りが行われているのかもしれない。でも、あったとしても一握りで全体の割くらいだろう。

それほどの場所に彼女は来てしまっている。

いつまでも羨望の眼差しで見ているだけでは届かない。

だから私は行動に移す。

これが失敗したのなら素直に私は身を引こう。

やろうとしていることを考えると怒りが泥となり、お腹を刺激した。



放課後、姉と同じく大会に出るレギュラーや練習に付き合う生徒達でプールは賑わっている。

私も練習の手伝い勢として参加している。

泳ぐ姉は綺麗だ。

私とほとんど同じ顔なのになぜこう思うのだろう。自分の顔が嫌いなわけではない。

実力や性格がまるで似ていないのが気に入らない。

見た目がそっくりなだけの偽者。ならば中身もそっくりになりたい。

「リオさん、良いタイムですね。これなら大会も問題ないでしょう」

「先生それ本当？ 私この地域で負けなし？」

プールから上がった姉がキャップを頭から外し、笑顔で顧問の先生に歩み寄って行く。

「あら？ リオさんは、地域“しか見ていないのですか？ 先生は

もっと先を見据えているつもりでしたが」

「うー！ 先生言うねえ！」

キャッキヤと喜ぶ姉の元に生徒達がプールからどんどん生徒が上がつて集まっていく。

「何言ってるの、リオちゃんなら全国余裕でしょ！」

「ちやちやっと一位取っちゃってうちらを全国のおっきいプールに

連れてってくれるんだもんねー？」

「ちよっとお、私以外もちゃんと頑張ってるよ？ 大会当日に何かあつ

たりして『はいこれで終わり』とか止めてよ？」

たちまち姉を中心とした花が咲く。

その賑やかさを嫌っているのは恐らくこの場で私だけだろう。

一人だけプールから睨んでいてもアウェイな場では下手したら排

除されかねない。その前に私はひっそりとプールから上がり、こそこ

そと座りながら自分の鞆からスポーツドリンクを出す。

ドリンクのボトルに粉と水を入れて振っている、

「はあく疲れた疲れた、きゆうけー」

横に姉がどっかりと座ってきた。

「ミホちゃんも休憩？ まだまだあつついねー」

チラと奥を見ると姉の友達同士で固まって話したり、先生も他の生徒の練習を見ている。

私が一人ぼっちでいるのを見てわざわざ来てくれたのだろう。

「リオ様は練習再開しないのかな？ 皆待ってるよ」

「やーめてー、休憩くらいしてもいいでしょ？ すぐ皆でヨイショ

してくるんだから。ゆっくり妹と話も出来ない」

そう言いながらも「リオちゃんはやくー！」と呼ばれると笑顔で手

を振って「はいい！」なんて答えている。

人気者は大変だなあ、つくづく姉を見てるとそう思う。

「のんびり泳げるにはまだ時間かかりそう、ミホちゃんどうする？」

「ならだらだらと練習してるよ、私は大会には出れないからね」

さり気なく嫌みを飛ばすと、姉は少しムツとした顔をする。

「そういう言い方、嫌いだな。ミホちゃんだって十分頑張ってるよ。

周りの評価はともかく、自分が自分を認めなかつたらちゃんとした成

果は出てくれないよ？」

的を得た言葉にチクリとお腹が痛んだ。

タイムだけを見て補欠入りを考えもしない先生、自分と競う相手で

もないと分かり見向きもしない生徒達。

姉はちゃんと私という一人の人間を見てくれる。

いつも優しい、だから嫌だと思ふ。

「そう言われたらもうちよっと真面目に練習しますかね」

私はわざとらしく立ち上がり、伸びをしながら作り終えたスポーツ

ドリンクを飲む。

「うん！ 頑張れ！ いつか姉妹でワンツー取るうよ！」

姉もそろそろ練習を再開するらしく立ち上がる。

「あ、そうだ。リオちゃんの分もスポドリ作ったから飲んでよ」

私は鞆から別のドリンクボトルを差し出す。これはさつき自分のを作る前に作っておいた物だ。

「ええー？ なんか悪いねえ。んじやお言葉に甘えてー」

あっさりとした手から受け取り、ぐびぐびと飲んでいく。

私が作った特製のスポーツドリンク。原料の粉はもちろん入っているけど、別の物も入っている。そちらも粉で、スポーツドリンクの粉と水と一緒に混ぜてしまえば分からない。

堂々とプールサイドで作っていたが、誰が見てもスポーツドリンクを普通に作っているようにしか見えないだろう。

そうして姉は私の悪意を飲み込んでいく。

「ぶつはあ、うまい！ そんじやあ行きますか！」

怒られない程度の速さでプールへ向かう。

さて、その元気はいつまで続くのかな？

いきなりお腹が下る体験を姉はこれから味わうのだから。



あれは中学二年くらいの時だった。

私は授業中にお腹が急に痛くなって困っていた。

トイレに行くべきだ緊急事態だけど、急な痛み過ぎて手が上げられなかった。今でこそ痛みと排泄の波を乗り切ることが出来るように

なったが、当時の私はまだ突発的な下痢への対応が下手だった。

だから誰かに気付いてほしかった。

誰かに助けてほしかった。

でも私のことなんて誰も見ていなかった。

授業時間は残り数分、それだけ我慢するだけなのに私の未熟なお尻は耐えられなかった。

びぢぢい！ ぶろろろっ、ぶりゅう！

教室に突如響く汚い音。

トイレ内でもそれを聴いた人は不快に思うに違いないその音は私のお尻から何度も何度も噴き出していた。

一瞬の静寂、その間も私の排泄は止まらない。

ぶぶっ！ ぶぢゅぼっ！ びぢびぢびぢい！

私の周囲の生徒は立ち上がって離れる。

鼻をつまむ者、指をさして騒ぐ者、周りの騒ぎを鎮めようとする者、

いろんな人がようやく私という存在に気付いた。

悪臭と目に見える排泄物を教室に持ち込んでしまった。

誰も助けようとしていない。

当たり前だ、我慢出来なかった本人が悪い。むしろクラスの調和を乱す悪人だと言われるかもしれない。

なんだかすごく悲しくなり、私はしゃくり上げて泣き出した。

そこで真っ先に私に近付いてきた人がいた。

姉だった。同じクラスにいたのですぐに駆け寄ってきた。

「大丈夫？ って大丈夫じゃないよね。先生！ 私が妹をトイレまで連れて行きます！」

そう言いながら臭くてパンツからはみ出て落ちたうんちを踏んで
しまうかもしれない危険もあるのにまるで気にもせず、私の肩を優し
く抱きしめた。

早川オコセ

序

重苦しい冬の曇天から微かに日が差し込む薄暗い廊下の突き当り、屋敷の奥へと続く曲がり角に一滴の雫が落ちておりました。凍てつく廊下の床板に膝をつけて腰を下ろし、手拭いでそれを拭き取ると、付着した土留め色の染みが放つ腐った野菜のような刺激が鼻を突きまします。思わず込み上げる吐き気を堪えて視線を上げると、悪臭を放つ泥粒は廊下の先まで点々と続いておりました。

泥粒を辿って廊下を進み、半開きの引き戸に行き当たると、その隙間から風のような激しい水音と、床の泥粒とは比較にならぬ臭気が漏れ出しています。恐る恐る中を覗けば、一面に糞のこびりついた丸い尻がわたしの目に飛び込んでまいりました。

絹の白肌と対をなす漆黒の喪服を乱暴に捲り上げ、こちらに尻を向けた睦子さまは水状の糞を絞り出しておられます。股の下で口を開ける汚物槽の暗い穴の底からは、びたびたと粘りのある音……。睦子さまの大きな尻は割れ目から股にかけて糞塗れとなり、激しい放屁の勢いで飛び散ったほうじ茶色の雫が足袋の踵までをも汚しています。

「睦子さま……」

思わず呼びかけると、睦子さまは首を回してこちらをご覧になります。わたしは、今まで見たことのない主人の表情を前に絶句しました。

下痢糞をひり出す睦子さまの尻穴は灼熱の鑄鉄で焼かれたように

赤く爛れ、白かった腰巻には泥がべったりと塗りたくられています。井戸さえ凍る底冷えの屋敷にあつて、睦子さまの尻だけが湯気を立てて下痢糞の熱湯を噴き出しております。そんな辛苦の渦中にあつて、なぜ睦子さまはそのような表情をなさっているのですか。

わたしは止む気配のない糞の音を聞きながら臉を閉じます。暫くそうしておりますと、国府田睦子さまと、この鶉久森珠世が過ごしてきた今日までの日々が、一抹の泡のごとく浮かんでまいりました。

一

鶉久森は北関東に江戸初期から続く、菓の卸売りで財を成した家でした。先祖は將軍家との繋がりで事業を拡大し、祖父の代には日清戦争の特需も相まって鶉久森の商売は繁盛を極めます。その財で築いた西洋風の邸宅で、わたしは幼少期を何不自由なく過ごしました。

ところが、祖父が病により他界し、商いの手綱を父が握るようになると、元来の乱暴な性格が災いしてみるみる商売は火の車となりました。幼いわたしですら、暮らしの変わりように驚いたほどです。父は祖父の残した財を食いつぶし、酒を飲んで毎晩のように母に手を上げ、収入の殆どを耽溺する骨董品につき込んでいました。

明治最後の五月。十歳の誕生日を控えたわたしの目の前で、父に殴られた母が頭から血を流して動かなくなりました。青白くなってゆく母の見開かれた目が、今でも脳髄にこびりついています。

鶉久森の屋敷が業火に包まれたのはその未明でした。炎と煙に喉を焼かれながらも懸命に外へと逃げ出すと、屋敷から立ち上る火柱で周

囲はまるで昼間のようでした。大人に保護されるまで、他人事のよう
にその光景を眺めていたのを覚えております。

診療所に運びこまれたわたしの枕元には、毎日毎日たくさん大人の
がやってきて、あれやこれや事情を訊いていきました。

「旦那様の寝室に煙草の不始末だってよ。夫婦とも顔が知れんほどに
焼けてしまつて、警察も一苦勞だそうだ。かわいそうになあ」

そのうちのお一人がそう仰いました。母と父は、死んだのです。

焼けた喉が癒える頃になつても、生前の父の振舞いが祟り、わたし
を引き取ってくれる親戚筋は現れませんでした。診療所の布団の上で
時間だけが過ぎていきます。そうして、どこかへ売り飛ばされるのも
止む無しと覚悟を決めた矢先、横濱を拠点に西洋貿易で巨万の富を築
いた国府田家の当主、信玄しんげんさまがいらつしやいました。

「正直、お前の親父は好かん。だが、お前の祖父には返しきれんほど
の大金がある。どこぞの娘売りに買い叩かれるくらいなら、儂の家で
使用人として雇つてやつてもよい。どうだ、来るか？」

布団の上で三つ指をついて頭を垂れたわたしは、元号が大正に改
まつたその年の夏、国府田家の敷居を跨ぐことになりました。

わたしが連れられたのは横濱港近くに建つ信玄さまの本邸ではな
く、内陸の丘の中腹にある別邸でした。別邸とはいえ、手入れされた
生垣に囲まれた豪奢な平屋造りで、門構えもたいそう立派です。

支給された給仕服代わりの鼠色の着物を袖を通したわたしは、案内
された奥の床の間でこちらを値踏みする鋭い視線に射抜かれます。

信玄さまの母堂、国府田ハツさまでした。

「お前が鵜久森の一人娘かい。なんともまあ薄汚いねえ。飯を食いた

ければ、汗水たらして働きな。で、名前は？」

わたしは頭を下げ、畳に額を擦り付けます。十歳の幼子でも、歓迎
されていないことはすぐに分かりました。

「鵜久森和己かずみの娘、珠世と申します。宜しくお願い申し上げます」

ふんと鼻を鳴らしたハツさまは、奥の襖に声を掛けます。恐る恐る
顔を上げると、中から現れたそのお方と目が合いました。年の頃はわ
たしと同じくらいで、薄い紅色の着物をお召しになっていました。

「お前は今日からこの娘の従者だ。薄汚い血同士適任さね」

ハツさまの真意を測りかねて一瞬呆けたあと、わたしは慌てて主人
と紹介されたその少女に向かって、恭しく頭を下げます。

「国府田睦子です。どうぞ、よろしく」

これが、わたしと睦子さまとの出会いでした。

はじめの数か月、睦子さまが心を開いてくださることはございませ
んでした。警戒されていた、といつて差し支えないでしょう。睦子さ
まの境遇を知る今ならば納得もできましようが、何も知らぬ当時のわ
たしには、食事の配膳やお召し物の準備、床の用意に至るまで一日お
傍に付いて、ただ一言の感謝もないのは堪えるものでした。

変化が訪れたのは、その年の十月のことです。

秋とは思えぬ暑さが続いたその日、女中の一人が横着し、前の晩に
余った味噌汁を朝餉に出したのです。ハツさまは商談で別邸に不在で
したが、代わりに信玄さまの妻の光代みつよさまが滞在されていたため、光
代さま付の女中を含め多くの人間がその傷んだ味噌汁を飲みました。

昼過ぎには、屋敷は阿鼻叫喚の大騒ぎとなりました。一人二人と使
用人たちが不調を訴えだしたころ、顔を歪めた光代さまと廊下ですれ

違いました。齡三十を迎えられても衰えぬ美貌は見る影もなく、着物を振り乱した光代さまは厠かわやに飛び込むと、戸を閉めることもなく乱暴に尻を出し、凄まじい勢いで糞を噴き出しました。泥のような糞は青磁の便器を大きく外れて板張りの床に沼を作っていました。それが、それを気にする余裕は光代さまにはございませんでした。

皆の様子を確かめねば。光代さまが籠る厠の戸をそと閉め、急ぎ踵を返します。しかし間もなく、わたしは今まで経験したことのない腹痛に襲われました。傷んだ味噌汁を飲んだのですから当然です。痛みに悶える暇もなく、わたしは糞がしたくて堪らなくなりました。

国府田別邸には厠が二か所ございます。一つは今、光代さまが籠っておられる屋敷内のもので、檜の床板に高価な青磁器の便器を備えた国府田家の方々が使う厠です。もう一つは、屋敷の外に増築された小汚い使用人用の厠。便器はなく、板張りの床に空けた四角い穴へ糞尿をする劣悪な造りで、夏などは酷く臭います。それでも、大量の糞を堪えた今のわたしには、その場所が恋しくて仕方がありませんでした。

しかし、腹と尻を押さえて懸命に外の厠まで辿りついたわたしが見たのは、同じような格好で順番を待つ女中らの背中でした。

鶴久森の屋敷では、厠の順番を待ったことありません。それが今、猛り狂う腹の痛みに苦しむ使用人の一人として、わたしは厠にできた列の最後尾で脂汗を流しています。このままでは糞を漏らしてしまふ……おぞましい想像に背筋が凍りました。

ぐるぐると荒れ狂う腸はらわたを必死に宥めながら、厠が空くのを待ちました。何度も糞が溢れそうになるたびに着物の裾を握りしめ、血が出るほど唇を噛んで尻の穴を締め上げ続けました。

そうしてようやく、あと一人でわたしの順番という段になって、後ろから声が掛かります。蚊の鳴くような、睦子さまの声でした。

「あ、あの……腹が痛くて、もう一刻も辛抱できないのです……」

睦子さまの青ざめた顔と、尻を押さえる仕草で全てを察します。光代さまが屋敷の厠から出てこないのでしょうか。光代さまが睦子さまに途中で順番を譲るはずがありませんから、切羽詰まった睦子さまは、こうして恥を忍んで使用人用の厠まで足を向けたのです。常日頃から無下にあしらっている従者のわたしに向かつて、普段は近寄りもしない劣悪な厠を懇願する睦子さまは、どのようなお気持ちなのでしょう。わたしの脾腹が、ぐるぐると低く唸りました。

するとようやく、厠から青い顔をした女中が出てきました。わたしは決壊目前の尻に添えていた両手を前で合わせ、頭を垂れます。

「ど、どうぞっ、お先にお使いくださいませ……睦子さま」

「あ、ありがとうっ」

睦子さまが戸の奥に隠れてすぐ、桶おけの雨水をひっくり返したような糞の音が響きました。そこで、わたしの尻も限界を迎えたのです。

「あっ、ああっ……」

泥のような糞が止めどなく溢れ出します。反射的に押さえた尻に湿っぽい感触が広がり、脚を伝って泥水が地面に垂れていきます。わたしは、腫から流れる涙よりも遙かに量の多い下痢糞を、厠の戸を見つめたまま着物の中に全てぶちまけたのです。

涙で顔を歪め、誰にも見られぬよう屋敷の裏手を流れる沢に駆け込んだわたしは、腹に残った糞を絞り出しながら着物を洗いました。腰巻はもちろん、着物の尻から裾までもが糞まみれで、それを浸けた川

の水が朽葉色に濁った途端、嗚咽が止まらなくなりました。

しばらくして、背後から声を掛けられました。はつと振り返り、声の主が睦子さまだと知ると、わたしは慌てて身体を丸めて縮こまります。裸になって糞まみれの尻を晒すことほど、恥ずべきことはありません。この世から消えたい。そう思ったわたしの目の前で、睦子さまが突然、湿った土の上に膝をついて深々と頭を下げられたのです。

「睦子さま……」

「申し訳ありません！ わたくしが廁の順番を奪ったばかりに、貴方をそのような姿に……。いくら腹が痛かろうとも、人としての道義は通すべきでした。それをわたくしは、わたくしはっ……」

お召し物が汚れるのも厭わず、睦子さまは涙声でそう仰ったのです。この一件以来、三つの変化がございました。まず、傷んだ味噌汁を出した女中が首になったこと。次に、心を開いた睦子さまが、わたしに友人のごとく接してくださるようになったこと。最後に、この日之境に、睦子さまが頻繁に腹を下すようになったことでございます。

二

上野から汽車に揺られること六時間、車窓には青々とした広葉樹の森が広がっております。大正六年、五月の末。共に十六歳となった睦子さまとわたしは、明治のころより方々で話題となっていた軽井沢という避暑地を訪れておりました。

「すごいわ珠世、空気が横濱とはぜんぜん違うのね！」

はしゃぐ睦子さまの横顔を見ながら、わたしは小さく息を吐きます。

昔から色を好んだ信玄さまが、国府田の跡取りを作るべく二十も年の離れた光代さまと籍を入れたのが十七年前。しかし、光代さまは子を授かることができず、仕方なく信玄さまは遊女との間にできた隠し子を知り、跡取り候補として家に迎え入れました。その妻の子というのが、睦子さまです。睦子さまが横濱の本邸ではなく、青葉台の別邸で隠れ暮らしているのも、その出生が原因でございました。

当然、国府田の人間は睦子さまのことを良く思っておらず、特にハツさまは穢れた血だと忌み嫌っていました。さらに別邸の使用人たちも、本邸を離れて妻の子の世話をさせられることを左遷と感じている節があり、屋敷で睦子さまの陰口が聞こえない日はありません。誕生日にかこつけてそんな陰湿な屋敷から離れることができた睦子さまが、列車の旅に心躍らせるのも仕方ないことでしょう。

その日遅くに国府田の別荘に着いたわたしたちは、旅の疲れもあつてすぐ床に就きました。翌日、毎朝の習慣となつてお茶の時間を楽しまれている睦子さまに、軽井沢散策をご提案致しました。

「林道を進むと、雲場池というそれは美しい場所があるそうです」

「そうなのね。ぜひ、これから行ってみましょう」

ティーカップに口をつけ、睦子さまがにこりと微笑まれます。

「それにしても、別荘でも珠世のお茶が飲めて嬉しい。紅茶でもほうじ茶でも緑茶でも、珠世の淹れてくれるものは他とは何かが違うって、これを飲まないとい日が始まらないの」

「恐縮でございます。因みに、本日の紅茶はここ長野名産の蜂蜜入りでございます。お気に召されたのなら、多めに買って帰りましょう」しばらく談笑してから身支度を済ませたわたしたちは、雲場池に

向け出立しました。今日の睦子さまのお召し物は、白地に爽やかな露草色の矢羽根模様をあしらった着物に、紺の袴と黒の編み上げブーツ。木の葉の隙間から漏れる朝日に照らされるたびに、えんじ色のリボンでマガレイトに結われた黒髪が美しく輝いておりました。

「ああ、なんて気持ちが良いのでしょうか。珠世、この樹はなに？」

「これは椿はるばる、その奥の、葉に鋸歯があるのは水榕みずらぎでございます」

睦子さまは度々立ち止まり、楽しみに樹々を眺めておられます。

「珠世は本当に物知りなのね」睦子さまが感心なさいます。

「……薬屋の娘として、母に色々と躰けられたものですから」

ですが、わたしがそう口にした途端、睦子さまは悲しい顔をして俯いてしまわれました。鶴久森の事情を知った夜に大泣きしてから早六年、睦子さまは未だにこの手の話題に心を痛めてしまわれます。

わたしは睦子さまの手を引いて、努めて明るく申し上げました。

「さあ睦子さま、向こうに東一華あずまいちかが咲いていますよ」

草花を愛でながら歩くうちに睦子さまにも笑顔が戻られ、わたしを置いてどんどん先へ行くようになりました。時折立ち止まっては、わたしにあれこれお尋ねになり、また軽やかに林道を進んでゆきます。

ところが、太陽が真上に昇った頃から、睦子さまのご様子がおかしくなり始めました。あれほど興味津々だった樹々に見向きもせずには元ばかりをご覧になり、靴に根でも生えたように歩みは遅々として、しばしば立ち止まっては何やら身体をくねらせておられます。

と、足を窪みに取られ、睦子さまの体軀が傾きます。わたしが咄嗟にお身体を支えると、添えた手の下で睦子さまの腹がぐるぐるとうねり、尻がぶうつと鳴りました。睦子さまが放屁なされたのです。

「こ、ごめんさい、珠世……」

漂ってくる鼻の曲がりそうな臭い。暖かな初夏の陽気とはいえ、見るからに過剰な発汗。睦子さまが腹を下しているのは明白でした。

「別荘から随分離れてしまいました。廁まで辛抱できますか？」

「は、はい……大丈夫、です」

そう仰られた睦子さまでしたが、その腹具合はかなり悪いようでした。ここ最近では調子が良かっただけに、突然牙をむいた腹痛に戸惑っておられるようです。袴の上から祈るように腹をさすり、わたしの腕を支えに林道を進む睦子さまの足はがたがたと震えております。睦子さまはひっきりなしにぶすぶすと放屁なさいていて、初めのうちは恥じらいから赤く染まっていた顔色も、いつしか真っ青に変わり果てていました。会話はなく、ただ下草を踏む乾いた靴音と、袴の下からごろごろと響く内臓の唸り声ばかりが耳にまわりつきます。

「た、珠世っ、ちよ、ちよつとまってください……」

全身を硬直させ、睦子さまが尻を抱えて立ち止まります。菊の門に下痢糞の濁流が押し寄せているのでしょう。睦子さまは、先ほどから数分おきにこうして立ち止まっては糞を堪えております。もう三十分以上は歩いておりますが、別荘まではなかなか帰り着きません。

涙目で息を荒げる睦子さまに、わたしは恐る恐る申し上げます。

「睦子さま、もう、その辺りの茂みで用を足されては……」

「な、なりませんっ」

睦子さまは声を荒げ、間もなく悲痛なお顔で尻をお抱えになります。

「こ、このような所で糞を垂れるなど……できません」

気丈に振舞われる睦子さまでしたが、その数分後には再び激しい腹

の痛みと糞の欲求に襲われ、とうとうその場に座り込んでしまわれ
ました。睦子さまの腹からはごろごろ、ぐるぐると、絶えず雷鳴が轟
ており、玉のような汗がお顔から滴り落ちています。

「か、廁……わたくしは、廁に……」

整った目鼻をぐちゃぐちゃに歪ませ、睦子さまはうわ言のように眩
きます。他家の別荘が近ければ恥を忍んで廁を借りることもできま
しょうが、雲場池方面は別荘の集まる地域とは反対側にごさいます。
広葉樹の森にまっすぐ続く明るい林道を抜けて国府田の別荘に帰り
着く他に、睦子さまが廁で糞をなさる術はありませんでした。

「はあつ、はあ……すす、進みましょう」

少し落ち着つかれたのか、睦子さまがわたしの手を引いて先を急が
れます。ですが、数歩進んだだけで帯の下から低い轟音が響き、ひいっ
と喉を鳴らして立ち止まってしまいます。睦子さまは腰を老婆のごと
く屈曲させ、今にも破裂しそうな尻を袴の上から懸命に押さえておら
れます。それでも、足はもう一歩も進みません。誰の目にも限界は明
白でございました。そして、ついにその時が訪れたのです。

「あ、あああつ！」

喉から絞り出すような悲鳴と一緒に、睦子さまの尻から放屁とは違
うぶちゅぶちゅと水気のある音が響きました。

「も、もう辛抱できません！」

涙声で叫ばれた睦子さまが、袴に手をかけ、大慌てで駆け出されま
す。しかし、すでに糞が漏れ始めた睦子さまの尻の穴には、もう一刻
の猶子もございませんでした。力尽きた睦子さまはわたしの目と鼻の
先、林道から丸見えの水樋の木陰で、袴と腰巻を一息に捲り上げられ

ました。木漏れ日に照らされて、糞で汚れた腰巻と、ぶるぶると震え
る大きくて丸い睦子さまの尻が露わになります。

「うううううっ」

びゆるるる。煮えくり返った糞が中腰の尻から勢いよく飛び出し、
弧を描いて地面に降り注ぎました。少し遅れて睦子さまがその場に
しゃがまると、ばかりと口を開けた桃色の尻穴から、夥おびんたしい粥の
ような糞が大地に溢れ出します。

「あつ、おうああつ……」

糞の濁流は徐々にその勢いを増し、みるみるうちに睦子さまの尻の
下で淡紙色の泥沼を広げてゆきます。糞の中には未だ形を保った野菜
屑が点々と浮いており、まるで横濱で食べたライスカレーのごとき風
体です——尤も、風に乗って鼻を衝く悪臭がなければの話ですが。

「ああ、珠世、珠世つ、お願い、見ないでください……」

睦子さまは何度も鼻水をすすり、必死に涙声を上げられます。その
間にも尻の穴からは柔らかな糞が勢いよく放たれ、地面の糞だまりに
衝突しては飛散し、睦子さまの尻やブーツを汚してゆきます。小鳥の
囀りと木の葉が風で擦れる音だけがあつたはずの初夏の森に、睦子さ
まの糞と放屁の音が響き渡っております。

やがて、ぶうーっと大きな放屁を最後に糞の噴出が止まると、睦子
さまはしゃがんで尻を丸出しにした格好のまま、赤子のように大声で
泣き始めてしまいました。睦子さまの細い体軀から出たとは思えぬ山
盛りの糞には、いつしか何匹もの蛭がたかっております。

「睦子さま……まずは汚れた腰巻を脱いで、尻をきれいにしましょう」
わたしが染みのついた下履きを脱がし、糞まみれの尻を拭って差し

上げる間も、睦子さまが泣き止むことはありませんでした。しばらく背中をさすって差し上げ、ようやく落ち着きを取り戻した睦子さまでしたが、一度下った腹具合はそうもいきません。

結局睦子さまは、別荘に帰り着くまでの間に再び腹痛に襲われ、泣きながら何度も野糞を余儀なくされたのでした。

三

「た、珠世……くすぐったいわ」

鏡の前で、はにかんだ睦子さまが身体を振られます。

わたしはその声を努めて聞き流し、ガーターベルトを付けた睦子さまの大きな尻を白いパンティで覆い、たわわな乳房を乳バンドの中に押し込みました。セーラー服なる特徴的な襟付きの黒い着物に袖を通し、同じ色のスカートで腰を覆われた睦子さまは、畳の上でたいそう嬉しそうにくるくると回っておられます。

大正六年、六月。睦子さまが横濱にある女學院へ編入なさることになりました。西洋學問を礎とした女性の社会進出を校是としており、校舎はわたしが買い出しへ赴く横濱市場の目と鼻の先にございます。ハツさまのご意向により国府田では洋装がご法度ですが、學院の制服であれば仕方がありません。隠し読んでいた婦人誌と同じ装いに身を包めることが、睦子さまには嬉しくて仕方がないようでした。尤も、『売女譲りの下品な乳と尻だ。バタ臭い洋装はお似合いだろうさ』

睦子さまの明るい振舞いは、吐き捨てるように仰ったハツさまのお言葉を、懸命に振り払おうとなさっているようにも思えました。

「どうかしら珠世。わたくし、こんなハイカラなの初めてよ!」

「ええ……とても、とてもよくお似合いでございます」

わたしはそう申し上げ、鏡の前で楽しまれていた睦子さまを残して部屋を出ました。廊下を進んでいると、井戸へ続く戸の隙間から何やら漏れ聞こえてまいります。洗濯担当の女中らのようでした。

「品がないというか、洋装ってどうしてあなのでしょう」

「着る人の問題かもしれませんよ。何せ、血がもう……」

「でも、横濱の女學院は今の家庭教師よりずっと安上がりですからね」
「やつぱりそういうことかねえ。……にしても、お嬢様は人力車で通われるそうですよ。途中で厠がなくて、さぞ大変でしょうねえ」

そこで、下卑た笑い声が上がりました。睦子さまの腹下しは年々酷くなる一方で、とても隠し通せはしません。嫉妬とやつかみを抱えた女中には、妾の娘の下事情が愉快で仕方がないようでした。ただ、下賤の戯言にも、このような時期に女學院へ編入することは不自然であるという部分には頷けます。聞くところでは、信玄さまが一方的に決めた話とのこと。本邸で、一体何が起きているのでしょうか。

女學院へ通いはじめた睦子さまは、前にも増してわたしに色々なことをお話しくださるようになりました。これまで年の近い知り合いはわたしくらいのものでしたから、ご學友の皆さまと勉學に励むことは誠に新鮮な喜びなのでしょう。毎朝のお茶の時間や、夜に床の支度でお部屋に伺った折など、暇をみつけてはわたしに、街を走る自動車のこと、音楽の授業での一幕、ご學友からお借りになった婦人誌や小説誌のことまで、楽しそうにお話になるのです。

ある夜のことです。日中横濱へ買い出しに出向いた疲れが顔に出ぬ

よう努め、床の準備のためお部屋に伺いますと、睦子さまが朱の差した顔で何やら落ち着きなくわたしのことをご覧になっていました。作業が終わるのを今か今かと待ちわびているご様子で、わたしが布団を敷き終えた途端、「珠世、聞いてほしい話があるの！」と仰いました。

「睦子さま、どうしたのですか？」

「聞いて珠世。今日ね、學院の履物入れに、これが……」

睦子さまがおずおずと差し出されたそれは、書簡でございました。薄紫の上質な和紙に紫陽花^{あじようばな}があしらわれた便箋——睦子さまに目で見かけ、首肯を認めてから中を調べます。

差出人の名はありません。内容は季節の挨拶から始まり、女學院近くの陸軍學校に身を置いていること、名は明かせぬこと。そして、ある日睦子さまを偶然お見かけして以来、それが忘れられぬこと……。

「これは……恋文、ということでしょうか？」

「こ、恋文！ そ、そのような、その、わたくしは……」

睦子さまは飛び上がるように肩を震わせると、茹蟬のように顔を真っ赤にして俯いてしまわれました。殿方からの書簡に戸惑っておられるようです。声を震わせながら、睦子さまが仰られます。

「珠世……わたくしこんなの初めてで、どうしたらよいか……」

わたしは、不安そうな主人に努めて穏やかに申し上げます。

「慌てる必要はございません。まずは、お返事をなさってはいかがでしょうか？ わたしも、お手伝い致しますので」

こうして睦子さまと、紫陽花の君との文通が始まりました。決して頻繁とは言えぬやり取りでしたが、睦子さまはお返事を貰うたびに、紫陽花の便箋を手に幸せそうに微笑まれます。立場上書いてはならぬ

ことに気を付けつつ、わたしにお返事の内容をご相談される睦子さまはいじらしくすらありました。とうとう、睦子さまがわたしの部屋まで相談に向かわれるようにすんなったのです。

「珠世のお部屋に来るのは、とても久しぶりね」

睦子さまは物珍しそうに周りを伺っておられます。四畳半の畳部屋に布団と文机が一つ。屋敷で電灯があるのは国府田の方々の部屋だけです。わたし、わたしの部屋の薄暗いガス灯が物珍しいようでした。

「あ、いけません。わたくし、筆を部屋に忘れてきてしまいました。珠世のを貸してくださいませ？ ええっと、ここかしら？」

と、睦子さまが文机の引き出しに指を伸ばされたので、わたしはつい「なりません！」と声を荒げてしまいました。

「た、珠世？ どうしたの？ わたくし、驚いて……」

「も、申し訳御座いませぬ！」わたしは慌てて頭を垂れます。「その、いくら睦子さまといえど、日記を見られるのは……」

「そ、そうでしたか。ごめんね珠世、そんなつもりは……」

「いえ……。それより睦子さま、筆はこちらでございます」

筆をお取りになった睦子さまは、すぐにお顔を柔らかにされ、懐から取り出した薄紫色の便箋をわが子のようにお抱えになります。

「紫陽花の君……どのような殿方なのでしょう。か。書簡の端々に教養が滲み出て、文字も力強く美しい。陸軍學校でも優秀に違いないわ。きつと行く末はご立派な将校ね。そう思うでしょう、珠世？」

睦子さまは文通を始めてから、いよいよ女學院が楽しみになつたようでした。ただ、それを面白く思わない者も居たのです。

ある日、夜用の米を研いでいると、急に糞がしたくなりました。緩

いものが続々尻に流れ込んできます。一目散に厠へ走りたところですが、米を炊かねば夕餉に間に合いません。わたしは腹痛を堪えながら手早く水を替え、重い釜を竈にかけ、急ぎ厠へと向かいました。

屋敷の裏へ回る折、睦子さまを乗せた人力車が遠目に見えましたが、腹具合が深刻でした。出迎えは後回しに厠へ飛びこみ、着物を捲り上げてしやがむと、どばどばと糞が溢れ出します。間一髪でした。

腹下しの原因には心当たりがありました。だからといって渋り腹が治まるわけありません。刺痛を堪えつつ糞が滴る尻に力を込めてみると、車輪の軋む音が耳に入りました。人力車が着いたようです。しかし、何やら慌ただしい様子で、玄関の戸が乱暴に開く音が聞こえてまいります。しばらくして、足を引き摺る靴音が大きくなり、屋敷の外、わたしが籠る使用人用の厠の前で止まりました。

「あ、あの！ 急ぎ代わってはいませんか！」

戸の向こうから聞こえたのは、切迫した睦子さまのお声でした。

「睦子さま？ どうされたのですか？」

「た、珠世！ その、腹、腹が！ わたくし、もうっ！」

睦子さまは一刻を争うご様子でした。わたしは木箱に入った藁半紙で急ぎ尻の汚れを拭い、身なりを正して厠の戸を開けます。が、

「いやあああつ！」

中腰でスカートと尻を抱えた睦子さまの悲鳴。少し遅れて、風に乗った新鮮な糞の臭いがぶうんと漂ってきたのです。

泣き崩れる睦子さまを伴って厠の中へ戻り、スカートと捲ってパンティを下ろして差し上げますと、すり潰した豆腐のごとき質感の鮮やかな植染色の糞が山盛りになっておりました。酷い臭気で込み上げる

吐き気を堪え、わたしは睦子さまの尻を拭って差し上げます。尻は、密着したパンティの形そのままに糞まみれでしたが、これが腰巻ならば糞を全て屋敷の敷地におちまけているところでした。

睦子さまは、全身を震わせて泣きじやくつておられます。糞汁の染みた下履きとスカートは、捨てる他ないでしょう。何度拭いても泥濘が塗り広げられるばかりの睦子さまの尻と太ももは、生まれたばかりの鹿の赤子のようにぶるぶると痙攣しておりました。

三十分ほど泣き続け、ようやく少しばかり言葉を解するようになった睦子さまが仰るには、學院で腹が下ったものの、ご學友の手前、厠に行きたいと申し出ることができなかつたそうです。結局、糞を堪えたまま人力車に乗り、脂汗を流して屋敷へ辿り着いたそうですが――

「ひっぐ……屋敷の厠を掃除していた女中らが、終わるまでっ、辛抱しろと……わたくし、もう腹が限界で……それで、それでっ……」

睦子さまは尻を出されたまま、わたしの胸で慟哭なさいました。

學院から戻った睦子さまが血相を変えて厠に飛び込まれるのは日常茶飯事でした。睦子さまが學院で腹を下すのは決まって昼食後、午後の授業中です。睦子さまは殆ど毎日、その時刻になると腹痛に襲われ、緩い糞を催します。懸命に授業終了まで耐えるそうですが、休憩時間になっても、睦子さまの為人では人前で糞がしたいなどとは口が裂けても言えません。そうしてご學友に糞だと悟られぬよう教室から遠い厠で慌てて用を足すか、屋敷まで耐えるかの選択を迫られるのです。學院で急ぎ用を足せば、拭き残した糞が下履きに筋を残します。屋敷まで辛抱を選ぶと、人力車で腹を刺激され糞をちびります。なんとか屋敷に帰っても、厠へ間に合わず漏らしたのが本日を

含めて三度。人力車を停めて野糞に及んだ回数十を超えるそうです。

数日して。表の掃き掃除を終えて屋敷に戻ると、母屋の廊下で、能面のようなお顔で立ちすくまれる睦子さまをお見掛けしました。

「見て頂戴、この染み！ また糞が我慢できなかったのねえ」

「まあまあ、お嬢様は尻の緩いことで。汚いねえ。これであたしら流汗の隙間から覗くと、洗濯をする女中らが小さな染みの付いた睦子

さまの下履きをつまんで囃し立てていました。一言申し上げようとしたわたしを制し、睦子さまは部屋へお連れになります。しばしの沈黙の後、見開かれた両の目から大粒の涙をぼろぼろと零されました。

「どうしてつわたくしは、こうなのでしょうっ……。この歳になつて、糞の辛抱もできないなんて。紫陽花の君から、とんとお返事が来ないのも、そうです。わたくしがっ、臭く穢れた、売女の娘だから……っ」

わたしは、睦子さまの頬を平手で張り飛ばしました。

睦子さまはあつけにとられ、べたりと座り込んでおられます。わたしは額を畳に擦り付けるように頭を下げ、申し上げます。

「そのようにご自分を卑下してはなりません。睦子さまは懸命に勤めに励まれております。腹具合も、きつとよくなります。だからそのように自らを貶めることだけは、決してなさってはいけません」

わたしが顔を上げると、睦子さまは何故か、ぶたれて腫れあがる左の頬を嬉しそうに撫でておいででした。そうして睦子さまは、いつまでもわたしの膝で泣き続け、やがて疲れて眠ってしまわれたのです。

しばらく後。睦子さまは元氣を取り戻されました。わたしの平手が効いたのかもしれないが、一番の理由は、かの君からの書簡でした。

その夜。昼に横濱へ出向いた際に擦りむいた足に薬を塗っていると、筆と風呂敷包みを手にした睦子さまがわたしの部屋を訪れました。

「聞いて珠世、今日學院の履物入れに紫陽花の君からの書簡が入っていたの！ 軍事演習がお忙しくて、お返事ができなかったんですって」

心底安堵した睦子さまに、私は申し上げます。

「それはよかったですね。では、早速お返事を考えましょう」

「あ、うん……そうなのだけど、その前に……こ、これを」

しかし睦子さまは途端に口ごもられ、赤面しながらおぼろげと風呂敷包みを差し出されます。中を檢めると、そこには糞染みを付けてしまったパンティ。書簡の返事を相談する他に、女中らに見られぬよう汚れた下履きを洗濯することも、わたしの仕事となったのです。

いつの間にか季節は秋。朝夕が肌寒くなり、箱根山の樹々の色が緩やかに褪せてゆくある日のことでした。

その日、朝から胸騒ぎがしたわたしは、睦子さまを學院に送り出したあとも、落ち着きなく過ごしておりました。そうして昼過ぎ、玄關を掃除していた折に、その電報を受け取ったのです。

差出人は本邸の信玄さま。わたしは急ぎハツさまに、受け取った電報をお渡ししました。周囲で別の女中らも様子を伺っております。ハツさまはいつものように無然としておりましたが、中身を一読した途端、ひやあと大声を上げ、見たことのない笑顔を浮かべたのです。

「生まれた！ ついに生まれた！ 国府田に男児が生まれました！」

電報は、光代さまが信玄さまの子を産んだことを伝えていました。当時、光代さまのご懐妊すら使用人には伏せられていたためひどく驚きました。同時に、以前から感じていた本邸の不審な動きに合点が

いきましました。周囲の女中らが、ハツさまに媚びるように黄色い声を上げています。正式な跡取りとなる待望の男子の誕生、それはめでたいことでございます。ですが、それは同時に、睦子さまのお立場ががらりと変わったことを意味します。

玄関から車輪の軋む音。睦子さまがお帰りになった合図です。わたしはこのことをお伝えしようと玄関へと向かいますが、睦子さまの姿も、靴箱にあるはずの履物もありません。不審に思い表へ出ますと、真っ青なお顔をされた睦子さまがぼつんと立っておられました。

「睦子さま？ どう、されたのですか……？」

恐る恐る申し上げると、睦子さまは息を荒げ、涙を零されます。

「た、珠世……わたくし、わたくし……」

途端、腰をくの字に折り曲げた睦子さまが地面に嘔吐され、そのまま倒れ伏してしまわれました。

四

「清太郎さま万歳！ 清太郎さま万歳！」

その日の夕餉は、一段と豪勢でございました。普段、香の物と味噌汁が常の使用人の食事に、尾頭付きの鯛がまるまる一尾供されたほどです。それほど、ハツさまのお喜びは常軌を逸しておりました。

国府田清太郎。この度誕生された国府田家嫡男のお名前です。浮かれるハツさまのご機嫌を伺うように女中らがその名を繰り返して口にしたり、張り付けた笑顔で手を叩いております。青葉台の別邸すらこのありさまでですから、本邸はどれほどの騒ぎとなっているのやら。

味のしない焼き魚を腹に詰め込んで食事の席を立ち、祝いの喧騒からほど遠い屋敷の奥、睦子さまのお部屋へと向かいました。倒れてから間もなく睦子さまは目を覚まされたのですが、生気を失ったお顔のまま、食事も摂らずに襖の奥に閉じ籠ってしまわれています。

「失礼致します……睦子さま」

お部屋に入ると、睦子さまは明かりも点けず、布団の中に潜っておられました。お休みになっていないのは気配で分かりましたが、わたしの呼びかけにお応えにはなりませんでした。

「何か口になさいませんと、お身体に障ります」わたしは言葉を濁してから、本来の勤めを果たします。「それと本日、光代さまが男の子を出産されました。正式に……国府田の跡取りとなるようです」

睦子さまは結局、一言も口をきいてはくたさませんでした。

睦子さまは女學院もお休みになり、お部屋に籠られるようになりました。倒れた翌日は朝餉の席にいらっしゃったのですが、「なんだお前、まだ居たのかい。辛臭くて飯が不味いねえ」とハツさまに鼻で笑われて以来、厠と湯あみ以外お部屋から一歩もお出でになりません。

これから睦子さまはどうかなのか。まだ信玄さまから正式には何のお達しもございませんが、ハツさまの態度はあからさまでした。もはや国府田の人間ではない不審人物のように睦子さまをねめつたのです。そして、その態度は他の使用人にも伝染してゆきます。着物が畳まれなくなりました。食事は冷え切って米が固くなったものが供されるようになりました。睦子さまが糞をしていると、臭い臭いと女中らが囁し立てます。外の劣悪な厠を使わざるを得ない女中らは、睦子さまが国府田の厠を使うのが我慢ならないのです。それでも睦子さま

は何も言わず、どころか、わたしの顔を見ると逃げるように部屋に引き籠ってしまいます。お顔はまるで、死人のようにやつれていました。

原因は清太郎さまと別にあるのは明白でした。ハツさまと女中らの仕打ちが悪影響を与えているのは確かですが、発端は清太郎さまのことを知る前、玄関先で嘔吐されたその原因こそが肝要であると思われまふ。わたしはそれを聞き出すべく、お部屋にお伺いしました。

「睦子さま、どうして何もお話しくださらないのですか。お願い致します。わたしが、必ずや睦子さまのお力になってみせます」

睦子さまは相変わらず、布団に潜って身じろぎ一つなさいませぬ。わたしはどうとう、無理やり布団を引きはがして申し上げました。

「睦子さま！ どうか、この珠世に……」

「触らないで！」

艶を失った御髪を振り乱して、睦子さまが叫ばれます。久方ぶりに耳にしたお声は、明確な拒絶でございました。ですが、わたしは構わず睦子さまのお身体を抱き寄せます。血走った目で、睦子さまは大暴れなさいました。振り回した拳が、わたしの頬を掠めます。

「やめて！ 触らないでって言っているのが聞こえないの!? わたくしは穢れているのです、珠世まで穢れてしまいます！」

お顔を真っ赤にした睦子さまが、ようやくお気持ちの一端を口にしてくださいました。しばらく辛抱しておりますと、睦子さまは徐々に落ち着きを取り戻され、堰を切ったように号泣なさいました。

「睦子さま、どうかこの珠世にお話しください」

そう申し上げると、睦子さまは泣き腫らした目を見開かれます。

「珠世……絶対に、わたくしのことを嫌わないと、誓いますか」

私が頷くと、睦子さまはしばらく涙を流し逡巡しておられました。ですが、乱れた息が整うと、睦子さまは覚悟を決めて仰いました。

「わ、わたくしの腹の中に……蟲が巢食っているのです」

「蟲……で、ございますか？」

要領を得ない睦子さまのお言葉を何とか解すると、あの日、女學院に医者が訪問して健康相談会なる催しがあり、睦子さまは恥を忍んで慢性の腹下しをご相談されたそうです。するとその医者から条虫や回虫など、所謂寄生虫症の可能性を示唆されたということでした。

「あり得ません。下農の家ならまだしも、国府田家は食材から井戸水まで保健所の厳しい査察を受けています。万に一つも寄生虫など」

「ですが！ お医者様が、糞詰まりが多いはずの年ごろの女で頻繁な腹下しとなれば、蟲の仕業に違いないと……」

これで睦子さまが突然嘔吐された理由も、家のものに近づいたがらない理由も分かりました。ですが、それが分かっても、問題の解決には至りません。国府田の徹底された管理の下では、寄生虫症に蝕まれるはずがないといくら説いても、睦子さまは頑なでした。

「腹の中に蟲だなんて……!! こんな穢れた身体、ご學友のみなさんや、まして紫陽花の君など晒せるはずがありません！」

睦子さまは髪を握りしめ、思いつめた表情で泣き腫らしておられます。これはもう、実際に蟲など居ないと証明する以外に道はないと思えました。わたしは居住まいを正し、申し上げます。

「承知しました。ならばこの珠世が、睦子さまの腹に蟲など居らぬことを明らかに致します。非常な苦痛が伴いますが、よろしいですか」

睦子さまは、しばらくして首を縦に振られました。

後日。ハツさまが本邸に赴かれ、使用人の多くが暇を取った休日の昼間。頃合いをみてお部屋に何うと、寝巻用の白い着物をお召しになった睦子さまが、緊張した面持ちで布団の上に座っておられます。

「睦子さま、お薬はもうお飲みになりましたか」

「はい、量が多くて苦勞しましたが……」

睦子さまは腹に手を添え、苦し気に仰いました。その表情は岩のようになら強張り、落ち着きなく視線を彷徨わせておられます。それも、これから始まる極限の苦痛を思えば、無理のないことでした。

わたしが提案申し上げたのは、虫下しを用いて、睦子さまの腹に蟲が居ないことを明らかにするというものでした。これならば睦子さまも納得してくださるでしょうし、万が一蟲が居た場合にも、それを駆除して事が済みます。ただし、この方法には苦痛が伴うのです。

「いいですか睦子さま。虫下しとは、蟲を殺めるものではなく、動きを鈍らせるものです。ですから、同時に多量の下剤を服用し、動きを止めた蟲を体外に排出する必要があります」

「げ、下剤……」

睦子さまは目に見えて狼狽されます。無理もありません。普段あれだけ苦しんでいる腹下しを自らの意思で引き起こすなど、なかなか承服できないのでしょうか。しかし、これはまだ序の口なのです。

「そして、腹が下ったとしても、すぐさま糞を出せば腹に蟲が残ってしまいます。ですから、どんなに糞がしたくても、二時間は辛抱せねばなりません。睦子さま……本当によろしいですか？」

睦子さまは、呆然としておられました。駆け下った腹を抱えて二時間糞を堪える——それがどれほど壮絶な苦痛を伴うか、睦子さまは

よくご存じでした。ですがそれ以上に、ご自身の中に蟲が巢食っているのではという疑念が、睦子さまには耐え難いものだったのです。

「構いません。……何時間でも、辛抱してみせます」

そうして覚悟を決められた睦子さまは、本日、不穏な兆候を見せ始めたご自身の腹をさすりながらその時を待つておられます。部屋に入ったわたしがそれを畳に置くと、睦子さまが首を傾げられます。

「珠世……？ 洗濯用の桶など、何に使うのですか？」

「もちろん、蟲が居るか確かめるためでございます。わたしはそのようなものは居ないと信じておりますが、確認しないことには——」

そこまで申し上げて、睦子さまが目を見開かれます。

「そ、そんな……まさか」

「……はい。この中に、糞を出して頂きます」

申し上げるや否や、睦子さまはかっとな声荒げました。

「そ、そんな！ そのようなもので用を足すなど！ できません！」

「しかし、睦子さまが納得なされるためには、目で見て確認を……」

「できないものできません！ わたくしは、廁で——」

突然、睦子さまの動きがびたりと止まりました。見る見る眉間に皺がよります。鋭く、息を飲まれました。ひと時の静寂の後、腹からは嵐の到来を告げる雷鳴——ついに、下剤が効力を発揮したのです。

わるいこの代償

もちづきうずめ

「かなな、大丈夫……?」

「大丈夫、です。うっ、ふうう……っ」

あまりの腹痛と便意に、傘が手から滑り落ちそうになる。

端的に私は——下痢を我慢しています。

うんこがしたいのに、おトイレに行く勇気が出ません。

「どうしたの? お腹痛い?」

「違います、っ。ちよつと気分が悪いだけ、ですから」

「そんなに具合悪そうなのに学校行けないよ! お家に帰ろ? 樹

里が付き添ってあげるから。ね?」

意識を身体から引き剥がしそうなほどの高熱。

重力を数倍に感じさせる倦怠感と、吐き気。

そして腸は荒れ狂い、うんこをすること以外を考えさせてくれない

強烈な腹痛と壮絶な便意が、止まらない。

うんこが、したい……ですっ。

それも下痢のうんこ——おなかを壊してどろどろびちびちの、汚く

て臭くて恥ずかしいうんこが、したい、っ!

それでもおトイレに行けない。

下痢をしてみると思われたくない。

恥ずかしいというちっばけなプライドが、淑女たれと自己を戒める

自尊心が下痢の告白を妨げる。

「模試なんかどうでもいいよ! 受けなくてもいいから帰ろ! 樹

里がさばりたいからじゃないよ! かななのが心配なの!」

「でも、もう、学校着きますから。休んだらよくなります。きつと。だから」

そうです、学校に着けばおトイレがあります。

もちろん通学路にもうんちをしていい場所はたくさんありました。

コンビニ、公園の公衆便所、利用した駅。誰にも開放された共用の施設を、私は努めて無視し、学校を目指しました。

樹里ちゃんが一緒にいたら、下痢だとバレるから。学校ならクラス

が別々で、別れた瞬間にトイレに駆け込めば一人でうんこができると思っただから。幼稚な我慢を続けて、苦しんでいる。

まだ間に合う、我慢ができる、次おトイレが合ったらやっばり行こ

う、でも学校まであと少しだから。そうやって妥協と悪化の我慢を重

ねれば重なるほど、下痢がしたいと言いつつ出するための勇気の量が膨れ上

がっていく。

こんなことなら自制ができればよかったのに。恨んでもどうしよう

もない昨晚の私に、行き場のない怒りをぶつけるのでした。

昨晚の金曜日。それは毎週樹里ちゃんが楽しみにしている一緒にお

風呂に入る日でした。

同じ湯船に浸かって、その日のことをいっぱい話して、洗いっこし

て、めいっばい甘えられて……。

そして私はお互い裸で触れ合った感触を、生まれたときの姿で交え

た熱の味と匂いを、無防備に晒される樹里ちゃんの豊かな胸や恥部を

洗ったときの昂揚を——忘れられなくて。

昨晚も樹里ちゃんが寝入ってから、わるいこをしてしまったのです。快楽を食うために大好きな樹里ちゃんを想像してはいけない、明日は模試の日なのだから早く寝ないといけない、少しでも復習をしておかないと。もう、やめないと。

桃色に満たされた思考回路を回転させて、ダメな理由で雁字搦めにしても、飢えて渴いた右手を自分で止められないのです。

今回きりで終わりにしよう。こういう気持ちは別のことで発散しないと。せめて他のことを妄想してやらないと——一週間も持たず脆く崩れ去る決意を、毎週のように繰り返す。

そうして昨夜も、布団の中でパジャマと肌着を脱ぎ散らかし、熱を孕んだ淫欲の壺を一心不乱にまさぐってしまっただけです……。

『かんなの乳首が樹里のより大きいの、なんで？』

いつのことだったでしょうか。お風呂上がりに、おこさま特有の純粹な疑問を投げかけられ、思わず怒ったことがあります。

『そんなデリカシーのないことを聞いてはいけません!! ——あっ』

恥ずかしさ、情けなさ、罪悪感、最低な行為の露見の予兆。様々な感情が混沌と捻れ合い、誤魔化したくて声を荒げた私。

怒鳴られるとは思ってなくて静かに泣き出すお嬢様を宥め、慰め、機嫌を戻すのには相当の時間がかかりました。

『かんなに嫌われたあ……!!』

乳頭が肥大した理由を赤裸々に明かせば、嫌われるのは私の方です。結局はやむやみになって、お嬢様は二度と聞いてくることはありませんでした。その晩のわるいこは胸をまさぐることはしませんでした。

翌週からはいじってしまいました。本当に、悪い子です。

閑話休題。

ともかく私は、習慣づいたわるいこを昨日もしてしまいました。それどころか欲求不満が募り、初めて二回もして、しまいました。だってお嬢様が、樹里ちゃんが……無防備に甘えてくるから。

先週の土曜日と日曜日、樹里ちゃんは風邪と食中りを併発して熱と下痢に苦しむ日々を過ごされました。弱った姿を見せなくなかった樹里ちゃんを抱きしめ、甘えてくれるように囁いて、看病をしました。おむつを穿かせて、お尻を拭いてあげて、お股もきれいにしておいて、坐薬を入れて、目の前でおむつにうんちをするところを、見てしまっただけ。

赤ちゃんのように私に甘える樹里ちゃんがかわいくて、愛しくて、愛くるしくってしようがなくて。

五日間溜め込んだ愛情はいつしか歪な感情に変わっていて、二度の絶頂を迎えてしまったのです。

そして体力が尽きてはだかのまま眠りに落ちた私は、見事に寝坊をしてしまいました。季節は冬、一二月。布団にくるまれていても生まれたばかりの姿で寝てしまったせいで冷やして風邪を引いてしまったようなのです。

先に目覚めた樹里ちゃんに起こされたものの、昼食用のお弁当の準備はおろか、簡単な朝食を用意する暇もありませんでした。高熱でぼーっとする頭のまま着替えと洗面と排尿だけを済ませ、自宅を飛び出しました。

わるいことをしたせいで風邪を引いたので、休みたい。

そんなこと言えるはずもなく、乗車駅のコンビニで軽食を買って
るときでした。

ぎゅるるるる…

ちよつと大便が、しなくなってきました…。

数分程度なら排便に費やしても模試に間に合うでしょう。

ですが大便がしたいだけなら、学校に着いてからでもいいですよ。

お嬢様がしたいのならともかく、私だけならちよつと我慢しましょう。

ぎゅるるるるる！　ごろごろごろごろっ！

そんな甘い判断を払るように、急激に腹が　捻れた。

おなかが、痛いっ！

腹下しガール小説誌

自壊する絶対弱者 試し読み版

[小説]もちづきうずめ 軟球ごるふ A J ゆっきゅん
 早川オコゼ 灰屋 できすとりん 岩咲魔じっく
 [イラスト]毒桃 あしぶ みなみず 紫桃ふいず
 かび道楽 みときダム

サークル『CRもちづきうずめ』

2021年 12月 31日 書籍版第1刷発行

2021年 12月 31日 電子版第1刷発行

初出イベント コミックマーケット99

★頒布価格 / 1000円 (書籍時価格)

発行者：もちづきうずめ

印刷所：株式会社ポプルス

連絡先：mochiuzu@gmail.com

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
 発行者に認められた場合を除き、著作権の侵害になります。
 また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、
 いかなる場合でも一切認めません。
 無断でインターネットなどへのアップロードを発見した場合、
 DL数×頒布価格請求しますことを申し添えておきます。

@UZUME MOCHIDUKI 2021 Printed in Japan

誰もが不平等に落とされて、公平に彷徨う最底辺。

「お腹を壊して、うんちが我慢できない……！」

下痢——それは無慈悲な茶色の暴力。

美貌・才知・権力すらも蹂躪し、煮え滾る腹の中身を出し尽くすまで終わらない不条理な生理欲求。

不調と不摂生と不運によって腸が捻れた瞬間、少女たちは思考の全てを濁流に呑み込まれ、破滅を歩む絶対弱者に転落する。

勇気と恥を天秤に掛け、穢れた欲求を隠蔽できず、決壊を目の前に恥を晒し、最悪の具合を知られたくない人に「うんちがしたい」と言い残して便器の元へと無様に駆けていく。

そしてどうしようもなく、最後は糞をぶちまける。

“そこ”は外か便器か下着の中か。無防備に尻を曝け出す弱者たちは、下劣な音と醜悪な臭いを撒き散らし、擦り切れた心に最低の記憶を刻む。

腹を下して恥と痛みの渦中に迷う少女たちの物語を9作品収録。

腹が緩み、選択を間違えて、そして失敗して
——少女たちは“底”にいる。

◆小説

もちづきうずめ 軟球ごるふ AJ
ゆっきゅん 早川オコゼ
灰屋 できすとりん 岩咲魔じっく

◆イラスト

毒桃
あしぶ みなみず 紫桃ふいず
かび道楽 みときダム

発行／CRもちづきうずめ

